

2022年度～2025年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果中間報告書
『デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価』
研究代表者: 泉恵美子(関西学院大学)(研究課題番号: 22H00684)

デジタル時代における小学校英語Can-Do評価尺度 活用マニュアル

～eポートフォリオ及びデジタルCan-Do評価試案～

小学校英語評価研究会

泉恵美子(関西学院大学)
アレン玉井光江(青山学院大学)
加藤拓由(岐阜聖徳学園大学)
黒川愛子(帝塚山大学)
倉田伸(長崎大学)
森本敦子(立命館大学)
長沼君主(青山学院大学)
大田垂紀(別府大学短期大学部)
田縁真弓(立命館大学)
バトラー後藤裕子(ペンシルバニア大学)

2026年3月

はしがき

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究B)事業「小中連携を目指した英語学習者の自己効力と自律性を促進する授業設計と評価」(2014~2017年度)、「小中接続を目指し学習者の思考・判断・表現と学びに向かう力を促進する授業設計と評価」(2018年度~2021年度)の後を受け3期目、「デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価」(2022年度~2025年度)の最終年となります。これまで、学習指導要領で求められている育成すべき資質・能力の中でも、特に「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力」をどのように指導し、評価すればよいのかに焦点を当て、児童生徒の自己効力と自律が促される評価のあり方を探求し、Can-Do評価やパフォーマンス評価ルーブリック尺度試案などに取り組んで参りました。また、科研費受託以前にJESの課題研究助成を受けたメンバーが中心となり、「小学校英語評価研究会(English Assessment Society at Elementary Level: EASEL)」を立ち上げ、「小学校外国語における指導と評価のあり方」について長年取り組み、活動を行っております。その研究成果をまとめた冊子の発行は本誌で12冊目となります。

指導と評価の一体化、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」、主体的、対話的で深い学びなどについて、先生方のお悩みも尽きず、新しい教科書やタブレットも用いて評価をどう進めればよいか、思考力・判断力・表現力を育成する言語活動はどのように設定し、評価すればよいのかは大きな課題です。現在の研究の目的は、デジタルを用いて、より良い小学校英語の指導と評価の在り方を提案し、検証することです。GIGAスクール構想で、児童一人一台のPC端末が配布され、学習者用デジタル教科書が配布されています。学習者特性に応じたデジタルの活用、ICT機器を活用した小学校英語における評価用タスク、パフォーマンス課題の開発と導入、ルーブリックとCan-Doを合わせた評価尺度の設計と実証、eポートフォリオの開発という体系的な研究を推進しております。

2022年度は、文部科学省検定教科書小学校「外国語」の学習者用デジタル教科書6社の分析を試みました。2024年度からは、新しく06版の教科書が使用されており、2025年度からは、文部科学省検定教科書中学校「外国語」の改訂版が出されました。そこで、今年度は、昨年度の小学校の学習者用デジタル教科書の分析を踏まえ、中学校の新教科書6社を用いて、各教科書の特徴と共通点などを分析し、小中の連携の視点から提案することに取り組みました。また、今年度は研究最終年ということで、デジタルを用いて、児童の学びに向かう力を育てる自己調整学習を支援し、学びの足跡を残すeポートフォリオの開発と実践をまとめ、英語教育と情報活用能力を掛け合わせた「小学校英語×ICT」デジタルCan-Doの評価尺度試案の提案と授業実践を行いました。さらに、最も大きな課題ともいえる読み書き指導における研究と実践もまとめました。本誌には、それらの内容と、小学校で指導しておられる先生方の実践論文と、研究分担者による研究論文も掲載しております。

その他、JES全国大会やJASTECなど学会発表、松山、沖縄でのキャラバン、例年の言語教育エキスポでの発表、大阪でのシンポジウムなどを開催することができました。会場をご準備いただいた関係各位、ご発表やご講演、ご参加いただきました皆様に心より感謝しお礼を申し上げます。ご多忙の中、度重なる会議に集まり、熱心な議論を交わしつつ、玉稿をお寄せいただいたメンバー各位にも深く感謝申し上げます。Society 5.0、教育DX、デジタルの時代で大きな変革の中、学習指導要領の改訂に向け文部科学省外国語WG等での活発な議論も続いております。世界各地で平和や人権が脅かされる時代に、我々は未来を担う子供たちにどのような教育ができるのでしょうか。日々児童と授業を創っておられる先生方や、生き生きと英語でコミュニケーションを楽しむ児童のwell-beingを願いつつ、今年も研究を進めることができ、本誌も発行できますことを嬉しく思っております。本科研メンバーがまとめた書籍も5月刊行の予定です。これからも理論と実践の往還をめざし、デジタル時代に対応した研究を進めて参りたいと思っております。本研究成果が小学校英語教育関係者の皆様の今後の教育活動や研究のお役に立てることを願ってやみません。我々のこれまでの研究成果や報告について、Webサイト(<http://www.izumi-lab.jp/easel.html>)をご覧ください、皆様からの忌憚のないご意見やご連絡を頂ければ幸いです。引き続き、ご支援・ご教示のほどよろしくお願い申し上げます。



2026年3月3日
研究代表者 泉 恵美子

目 次

デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル

～eポートフォリオ及びデジタルCan-Do評価試案～

活用マニュアル解説	1
デジタル（情報活用能力）Can-Do評価尺度試案	7
令和7年度版中学校「外国語」教科書分析と考察	22

研究成果最終報告

研究概要	55
------	----

プロジェクト報告

小学校英語教育における自律的な学びのための形成的評価を支援するeポートフォリオ 汎用テンプレートの開発	64
小学校英語の読み書き活動におけるCan-Do評価	73

実践報告

探究の学習過程をもとにした小学校外国語科の授業づくり—デジタル（情報活用能力）Can-Do の作成 と関連付けて—	奥平 明香	84
【参考資料】奥平明香先生の授業記録	加藤 拓由	92
デジタル Can-Do を活用した小学校英語授業の実践—「聞くこと」から「話すこと」への学びの可視化 を通して—	幡井 理恵	96
小学校特別支援学級における外国語授業—児童の情報活用能力を高める指導者や担任の働きかけ—	大江 太津志・安丸 香織	108

研究論文

新中学校第1学年検定教科書の振り返り単元にみられる小中接続への工夫を活かした外国語科接続期 の指導	黒川 愛子	116
------------------------------------------------------	-------	-----

デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル解説 —デジタル（情報活用能力）Can-Do 評価試案—

長沼 君主（青山学院大学）

1. はじめに

次期学習指導要領に向けて中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループでの議論が始まり、AI時代に外国語を学ぶ「本質的意義」の再整理が行われている。そこでは大きく「自らの人生を舵取りできる、多様な他者と協働できる資質・能力」を育成するため、「言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと」と「自分の考えが磨かれて思考が深まる、人間関係が豊かになること」が意義としてあげられ（第4回資料）、こうした人間中心の価値観のもとで、外国語の新たな「見方・考え方」のイメージが作成されている。

一方で、学習の基盤となる資質・能力についても議論がされており、現在の「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」のうち、「問題発見・解決能力」は各教科等で育む資質・能力に位置づけられ、「言語能力」と「情報活用能力」の相互の関係が整理されている。「言語能力」が思考やコミュニケーション等の基礎であるのに対して、「情報活用能力」はそれらの強化・拡張を行うものとして相補的に働くものとされ、「情報活用能力」については、

情報技術を活用して、言語と言語以外の情報を効果的に組み合わせたり、情報を再構築したり、自らの身体では難しい創作などを行ったり、情報を地理的制約を超えて広く発信するなど、人間の思考やコミュニケーション、身体活動等を強化・拡張し、探究的な学びや課題解決に繋げていくもの。より質の高い、効率的な「外化」を可能とする。（下線部筆者）

ものであると説明されている（第9回資料、総則・評価特別部会資料より転載）。2024年度から始まったNEXT GIGAステージでは、各教科における一人一台端末をより一層活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が喫緊の課題となっているが、学習支援の道具としてのICT機器の活用に留まらず、思考やコミュニケーション等の強化・拡張を行うものにとらえ、「言語能力」と「情報活用能力」をより本質的かつ統合的に育成することは、これからの小学校外国語教育においても重要な課題となるだろう。

CEFR/CV (Council of Europe, 2020)においても、コミュニケーションモードの視点からの技能の再整理の中で、「やり取り」のモードにおいて、話すことに加えて、書くこととオンラインでのやり取りの能力記述が加わった。ICTを活用したオンラインでのやり取りには、

- ・メッセージの余剰性の必要性
- ・メッセージの正確な伝達の確認の必要性
- ・理解を助け、誤解に対処するための言い換え (reformulate) 能力
- ・情緒的 (emotional) 反応を扱う能力

など、従来のやり取りとは異なる要素や能力が必要であるとしている。CEFR/CVでは、複言語複文化能力のCan-Do尺度や、新たに追加されたコミュニケーションモードである、人や情報の「仲介」能力のCan-Do尺度が加わったが、オンラインでのマルチモダルな能力のCan-Do尺度が加わった点も含め、言語能力をより広義にとらえていることが見てとれる。

本研究グループ(小学校英語評価研究会)では、第I期と第II期の科研を通して、一貫してCan-Do評価尺度 (cf. 長沼, 2011; 長沼・高野, 2015) の開発を行ってきたが、情報活用能力については、ICT機器の活用の工夫としての補助的な位置づけであった。第III期科研では、学習者用

デジタル教科書等の ICT を活用した「学びを支援する単元をつなぐ Can-Do 尺度」の開発を行い、支援ツールとして、デジタルポートフォリオの開発を行って来たが、昨年度はさらに上記の問題意識から、「言語（外国語）能力」×「情報活用能力」の「デジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度」の試案作成を試みた。情報活用能力の能力記述を Can-Do 評価尺度の各段階の記述に直接組み込むことを試みたものであり、教育工学における情報活用能力に関する資料を参照し、インプット情報活用能力とアウトプット情報活用能力の Can-Do 評価尺度を作成した。

2. デジタル（情報活用能力）Can-Do 評価試案

「デジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度」の試案作成にあたっては、昨年度のマニュアルにおいて、協力者の奥平先生の実践をもとに、下記の「聞くこと」（インプット情報活用能力）と「話すこと」（アウトプット情報活用能力）の尺度の試案を作成した。

○「思い出を共有するために、学校行事の出来事や感想を発表しよう。」

■「伝わり方の違いに気を付けて、登場人物たちの思い出を聞くことができる。」

- ① 話されている情報を聞き、指示された情報の比較をすることはまだむずかしい。
- ② 話されている情報を聞き、教師に指示された情報の比較ができる。
- ③ 思い出について、複数の条件に応じて情報を選択し、比較して特徴を見つけ、特徴を基に分類したりすることができる。
- ④ 思い出について、明確に伝えるために複数の情報の特徴ごとに分類したことを発話に活かす目的をもって、自分が特に共有したいことに関連づけたりして整理できる。

■「一緒に過ごしてきた仲間や先生方に、小学校生活での思い出を話すことができる。」

- ① 伝える目的をもって話すことは、まだむずかしい。
- ② 伝える目的を考え、話す内容を選択し、単元で学習した基本的な語句や表現を用いて話すことができる。
- ③ 伝えたい思いや目的をもって取捨選択した内容を、聞き手に伝わるように、適切な語句や既習表現を用いて話すことができる。
- ④ 自分の思いや意図をもって取捨選択した内容を、相手への伝わり方の印象を考えて整理した上で話すことができる。

情報活用能力に関する基礎資料としては、各教科の学習指導要領の記述を分析して作成された「情報活用能力ベーシック（小学校版）」（中川ほか, 2021）の5つの学習プロセス（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現、⑤振り返り・改善）を参照し、①課題の設定と⑤振り返り・改善は、メタ認知活動として主たる言語活動に焦点化した上で、②と③のインプット理解に関する情報活用能力と、④のインプットをもとにしたアウトプットに関する情報活用能力の2つの尺度を作成した。

情報活用能力ベーシックでは、②の情報収集は外国語科では記述がないが、国語科の記述（「相手や目的を意識して、必要に応じた方法で複数の情報を収集する。」）を参照し、外国語科でもモデルとなるインプットからの情報収集を行うことを踏まえて尺度に取り入れた。また、③の整理・分析は、アウトプットの目的を念頭においたインプット処理を行うことを踏まえ、インプット情報活用能力で主に参照した。

情報活用能力の学習発達段階を示す資料として、インプット情報活用能力尺度においては、下記に示す、情報活用能力育成のためのアイデア集の「問題解決・探究」における情報活用能力

発達記述（文部科学省，2023）を主に参照した。

レベル 9	他人の主張に関する根拠を見つけることができる／複数の条件に応じて、複数の情報を検索し、選択できる
レベル 8	複数の条件に応じて、複数の情報を選択できる／目的に応じて、グラフを選択し、修正できる
レベル 7	信頼できる根拠を選択できる／データの矛盾点を指摘できる
レベル 6	目的に応じて、情報を整理することができる／複数の事象を示した図を読み解くことができる
レベル 5	目的に応じて、情報を図、表、グラフに示すことができる
レベル 4	複数のページに書かれている情報を要約できる
レベル 3	複数の条件に応じて、情報を選択し、見いだした特徴を基に分類できる
レベル 2	複数の条件に応じて、情報を選択し、比較して特徴を見つけることができる
レベル 1	簡単なグラフや表から情報の読み取りができる／指示された情報の比較ができる

アウトプット情報活用能力尺度においては、「情報活用能力の体系表例」（文部科学省，2020）の「問題解決・探究における情報を活用する力（思考力，判断力，表現力等）」の5つのステップのうち、より高次のステップを除いた1～3の能力発達記述を参照した。体系表例の「問題解決・探究」の情報活用能力は、①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力、②新たな意味や価値を創造する力、③受け手の状況を踏まえて発信する力、④自らの情報活用を評価・改善する力などから構成されているが、そのうち産出に関わる②と③の下記の能力記述を主に参照した。

②新たな意味や価値を創造する力	
ステップ 3	情報の傾向と変化を捉え、類似点や規則性を見つけ他との転用や応用を意識しながら問題に対する解決策を考察する
ステップ 2	情報を抽象化するなどして全体的な特徴や要点を捉え、新たな考えや意味を見出す
ステップ 1	情報の大体を捉え、分解・整理し、自分の言葉でまとめる
③受け手の状況を踏まえて発信する力	
ステップ 3	目的や意図に応じて複数の表現手段を組み合わせることで表現し、聞き手とのやり取りを含めて効果的に表現する
ステップ 2	表現方法を相手に合わせて選択し、相手や目的に応じ、自他の情報を組み合わせることで適切に表現する
ステップ 1	相手を意識し、わかりやすく表現する

今年度は、昨年度のデジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度を基盤とし、さらなる情報活用能力と言語（外国語）能力の統合的な育成を目指し、新たに3つの実践事例に基づいたインプット情報活用能力尺度とアウトプット情報活用能力尺度の試案作成を試みた。また、実践事例に関しては、実践報告として別途掲載した。事例①は昨年度事例と異なり、モデルとなるインプットの談話パターンではなく、言語表現に焦点をあてて、アウトプットに向けた情報活用を行っている。事例②はインプット情報活用能力尺度に続けて、アウトプット情報活用能力尺度において、「アイデア集」の後半のレベルの記述を用いており、①段階目の自信がない段階で視覚情報を用いる能力を参照している点に特徴がある。なお、私立学校中学年の実践ではあるが、公立学校での実施を念頭に置き、高学年の該当単元を記載した。事例③は低中学年での実践であり、情報活用の前段階として、身近で信頼のある情報源をまねして情報を得る過程に着目した。情報の取り込みにあたっては情報の信頼性や情報源との関係性が重要であり、試みとして掲載した。

事例①【奥平】：Here We Go! 5 Unit 8 “This is my town.”	pp.7-12
◆インプット情報活用能力尺度【参照】「アイデア集」問題解決・探究：L1～L3 「まちの魅力を伝え合うやり取りを聞き、魅力を尋ねる表現の言い方が分かる。」	
◆アウトプット情報活用能力尺度【参照】「体系表例」B 思判表：1③ステップ1～3 「相手に応じて、まちの魅力を伝えることができる。」	
事例②【幡井】：Here We Go! 6 Unit 3 “What time do you get up?” (Let's Try! 2 Unit 9 “This is my day.”)	pp.13-16
◆インプット情報活用能力尺度【参照】「アイデア集」問題解決・探究：L1～L3 「先生との生活の違いを知るために日課を聞き、自分の生活と比べながら整理することができる。」	
◆アウトプット情報活用能力尺度【参照】「アイデア集」問題解決・探究：L5～6・L8～9 「自分らしさが伝わるように、冬休みの一日の生活を整理し、工夫して紹介することができる。」	
事例③【大江】：Let's Try! 2 Unit 7 “What do you want?”	pp.17-21
◆インプット情報活用能力尺度【参照】「体系表例」A 知技：2①ステップ1a 「お店屋さんのセリフを友達と一緒に考え、指導者の手本を聞いてまねして声に出すことができる。」	
◆アウトプット情報活用能力尺度【参照】「体系表例」B 思判表：1③ステップ1 「アイスクリームやさんになりきって、おきゃくさんがほしいアイスをたずねたり提供したりできる。」	
実践報告①【奥平】（参観記【加藤】）	pp.84-91
【高学年】「探究の学習過程をもとにした小学校外国語科の授業づくりーデジタル（情報活用能力）Can-Do の作成と関連付けてー」	
<参観記>奥平明香先生の授業記録	pp.92-95
実践報告②【幡井】	pp.96-107
【中（高）学年】「デジタル Can-Do を活用した小学校英語授業の実践ー「聞くこと」から「話すこと」への学びの可視化を通してー」	
実践報告③【大江】	pp.108-115
【低中学年】小学校特別支援学級における外国語授業ー児童の情報活用能力を高める指導者や担任の働きかけー	

試案においては、自己調整段階や情報活用能力ベーシックに示される学習プロセスのどの学習過程と関連しているか、また、主に「情報活用能力調査及び情報活用能力育成のためのアイデア集」の「問題解決・探究における情報活用」（下記、アイデア集）や「情報活用能力の体系表例」の「問題解決・探究における情報を活用する力（思考力、判断力、表現力等）」（下記、体系表例）のレベルやステップのいずれに該当するかをチェックする欄を設けた上で、それらを踏まえて Can-Do 尺度の能力記述における情報活用能力について説明するようにした。

- 自己調整段階：□プランニング（予見） □モニタリング（遂行統制） □リフレクション（自己省察）
- 学習過程：□課題設定 □情報収集 □整理・分析 □まとめ・表現 □振り返り・改善
- 情報活用能力（アイデア集）：□L1 □L2 □L3 （中略） □L7 □L8 □L9 □N/A
- 情報活用能力（体系表例）：□②S1 □②S2 □②S3 □③S1 □③S2 □③S3 □N/A
- 情報活用能力説明：（省略）

さらに、【思考を促す活動の工夫】や【情報活用能力を活かす活動の工夫】（学びに向かう力

を促す工夫)についても記述し、「インプット情報活用能力尺度」では<教師の発問と児童の応答の例>、「アウトプット情報活用能力尺度」では<パフォーマンスモデル>について、各段階の例をアノテーション付きで示した。

3. Can-Do 尺度設計補足資料

以下に、本科研の基盤となる Can-Do 尺度の具体的な考え方を示すため、2016 年度「中学校英語教科書接続 Can-Do リスト試案」より、4 段階の Can-Do 尺度例を示す。「can」を用いた言語活動となり、場面・状況として留学生の歓迎会を開くことを想定し、留学生の情報をもとにして、歓迎会であることを相談して決めることを目的とした課題(タスク)となる。また、過去のマニュアルより、Can-Do 尺度の説明を補足する「活動説明」や「尺度説明」に関する注意事項についても抜粋して再掲する。

「歓迎会の相談で友だちができることを確認し、自分は何ができるか言える。」

- ① 自分ができることを言うのもまだ難しい。
- ② 歓迎会で自分ができそうなことをいくつか言うことができる。
- ③ 自分ができることを言うだけでなく、相手ができそうなことを尋ねることもできる。
- ④ 互いのできることを尋ね合いながら、歓迎会であることを相談して決めることができる。

Can-Do として示した「歓迎会の相談で友だちができることを確認し、自分は何ができるか言える。」がいわゆる「Can-Do リスト」の項目にあたる「全体的能力記述」となり、全体の言語活動の内容(行動)を反映している。その下の①~④が「尺度(scale)」の「段階的能力記述」にあたり、それぞれ下記のような段階として位置づけている。

- ① 「自信がなくまだ難しい、または自分にはできないと感じている段階」
- ② 「自信があまりない学習者でも何らかの補助的な足場があればできる段階」
- ③ 「多くの学習者が十全に参加すれば達成可能なクラスでの到達目標となる段階」
- ④ 「自信のある学習者を飽きさせないような次への挑戦的課題を設けた段階」

②の足場(scaffolding)の段階を設けることで、手助けをされたり、条件付きでできることであったりしても、「できるようになりつつある」過程にある「部分的な能力(partial competence)」であると肯定的にとらえて、①のような「できない感」ではなく、「できる感」を感じさせるようにすることを意図している。また、クラス全体の目標である③の段階に至るためのステップを可視化することで、次に足場を外して学習に取り組むことへ動機づけ、自律性を高める。

そのためには、③は定着を前提とし過ぎずに、十全に学習に参加すれば十分に到達可能な段階とし、また、④も特定の個人のみが達成できるような段階でなく、よりよい達成に向けて自己実現できるような、i+1を意識した適度な挑戦度合いにすることが重要である。十分にクラスが③に到達できた場合には、次の活動では④を③として設定し、さらなる言語発達を促したり、逆に全体手的に到達が難しい場合には、②を③として新たに追加での足場を考えたりするなど調整を行う。

本マニュアルの「活動説明」では、全体的な活動イメージや実施手順のほか、事前活動についても必要に応じて記述をしている。できる感を感じさせるには、活動がパフォーマンス場面となっていることが望ましく、事前活動として言語材料を導入しておくことを想定している。その際には定着を前提とし過ぎないために、毎回、達成に必要な十分な事前活動の時間を取る工夫が必要となる。ただし、入れ込み過ぎてドリルが中心になっては本末転倒であり、パフォー

マンスをさせる中で、次第とできるようにっていくといった活動設計も可能であろう。その他の活動で十分に自己効力が感じられていれば、最初できない感を与えることも、できるようになりたいと動機づける有効な手段となる。②の足場を与える前に③に取り組ませた上で、必要に応じて②を与えたり、逆に最初は②を想定した活動として③に難易度をあげるなど、実施手順ができる感に影響するため、十分な注意をする必要がある。

また、「尺度説明」では、段階設計の工夫についての記載をしており、とりわけ、②と④の段階設定の妥当性についての説明を行うようにしている。例えば、②では「先生の助けがあれば」などの記述は、それが全員に公平に足場として機能しない場合は段階とはしないようにするなど配慮した。上記の例の「友だちと一緒にならば」に関しては、自信がまだあまりないため、ともするとできていないと見なされがちだが、パフォーマンスにあらわれていないだけで、友だちの後追いであれば確信が持てるなど、学習者の中では学びが育ちつつある状況をとらえることを想定している。

段階化にあたっては、「だいたい」とか「すべて」など、量的副詞の記述のみに頼ることは避け、主観的な判断ではなく、客観的な判断が可能となるように工夫をしている。とりわけ、「すべて」は定着を想起させるため注意が必要である。同様に「正確に」や「間違わずに」といった記述のみとなることも避けるようにしている。上記の例では、④の挑戦段階に設定しており、「素早く」といった記述と合わせることで、集中して取り組む中で、反応が自動化されていくことを促している。

こうした学習タスク的な要素もとりわけ最初の時間などでは入れて、コミュニティ的なタスクのみで活動を構成し、負荷があがり過ぎないように設計している。「素早く」は声に出す場合は、速さを意識しすぎて発音が壊れてしまわないように、十分な配慮が必要であり、そのためにも同時に「正確さ」を意識させることは、認知的な学習として有効な戦略となる。備考欄には、その他、言語材料の取り扱いへの注意や指導例からの工夫の度合い、またはバリエーション的な活動についてなどを記載した。

本マニュアルはコピーして使うためのスタンダードとしての Can-Do リストではなく、レファレンスとして、授業の活動設計の参考になることを想定して作成されている。それぞれのレッスンの作成者は異なる文脈で授業をしており、全体での一貫性のある Can-Do リストではなく、なるべく多くのバリエーションを示すことを目的としている。本マニュアルの活動や評価ルーブリックを足掛かりとして、まずはアレンジしてみるころからはじめ、尺度によって「できるようになっていく」プロセスを視覚化して、パフォーマンスから逆向きで活動を設計できるようになるための一助となれば幸いである。

参考文献

Council of Europe (2020). *Common European of Reference for Languages: Learning, teaching and assessment. Companion Volume*. Council of Europe.

中川一史ほか (2021). 『情報活用能力ベーシック (小学校版)』日本教育情報化振興会.

長沼君主 (2011). 「小学校英語活動における自律性と動機づけを高める Can-do 評価の実践」『ARCLE REVIEW』No.5, 50-77.

長沼君主・高野正恵 (2015). 「小学校英語活動 Can-Do 評価尺度の開発と児童・教師内省の分析」*JASTEC Journal*, 34, 168-186.

文部科学省 (2020). 「学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力の育成一体系表例とカリキュラム・マネジメントモデルの活用―」文部科学省.

文部科学省 (2023). 『情報活用能力育成のためのアイデア集―「情報活用能力調査」の結果から見る指導改善のポイント―』文部科学省.

Here We Go! 5 Unit 8 “This is my town.”

○「まちの魅力を伝え合おう。」

■「まちの魅力を伝え合うやり取りを聞き、魅力を尋ねる表現の言い方が分かる。」

- ① 話されている内容から必要となる情報を聞き、指示された情報の比較をすることはまだ難しい。
- ② 話されている内容から必要となる情報を聞き、教師に指示された情報の比較ができる。【L1】
- ③ まちの魅力の尋ね方について、複数の情報から自分の発話に参考となる情報を選択し、自分の発話時の表現と比較して特徴を見つけることができる。【L2】
- ④ まちの魅力の尋ね方について、複数の情報から自分に必要となる情報を選択し、見いだした表現の特徴を基に分類できる。【L3】

- 評価活動:第4時での「聞くこと」【アレンジ度:★★☆☆】
- 使用教材:Let's listen《p.94》
- 評価観点:聞くこと/情報活用能力(情報収集+整理・分析)
- 自己調整段階:プランニング(予見)モニタリング(遂行統制) リフレクション(自己省察)
- 学習過程:課題設定 情報収集 整理・分析 まとめ・表現 振り返り・改善
- 情報活用能力(アイデア集):L1 L2 L3 L4 L5 L6 L7 L8 L9 N/A
- 情報活用能力説明:小学校外国語科では、情報を収集する場面は、音声を聞く場面、動画等を視聴する場面が主である。本事例での、情報収集とは音声情報の収集であり、後の実際の発話に活かす目的をもって行う。児童は、使用教材である Let's listen.での内容理解を行った後に、実際のやり取りで、互いの考えるまちの魅力について伝え合う場面において、「まちの魅力は何か」と尋ねるための表現が必要となる。その際、情報収集として、特に、表現の収集を行った。使用教材で用いられている質問の表現が必要となるため、目的をもって教材を聞き返すことで情報の収集を行う必然性がうまれる。また、収集した情報(表現)を、自分の発話と比較して分析し、特徴を見つけたり、自分にとって必要となる情報(言い方や表現)を選択するなど、分析的な聞き方を行うことを通して、見出した表現の特徴を基に分類するなど情報活用力を育成する。
- 活動説明:ここまでの授業では、“Do you like your home town? Why?” や、“Do you have 場所・施設など in your(our) town?” という表現を用いて、まちの好きなところや施設などを伝え合ってきた。本時は、「自分の考えるまちの魅力」を伝え合うことが本時の目標であるため、具体的に「良さや魅力」を尋ねる表現が必要となる。好きという感情は主観的な印象が理由となる場合もあるが、「良さや魅力」となると、相手に応じた良さや相手の目的や必要感に応じた魅力という客観的な視点も加わる。そのことにより、質問者も、自分の立場(興味・関心や知りたい目的)を伝えることで、具体的に“What's good about your town?”と尋ねる表現を用いて、目的や場面、状況が設定されたやり取りが生まれるようにした。やり取りの例は、後述する。
- 尺度説明:②の段階は、本時のめあてに向かったやり取りを実際に行った後に、「具体的にどんな点がまちの良さ(魅力)か」について尋ねる際の表現が必要になった状況で、Let's listen.のインタビューがどのように質問しているか注意して聞くように促す。その際、“like”を使っているか、その他の語句や表現を使っているか比較して聞くように指示をする。③の段階は、これまでに自分が使用してきた“Do you like your home town? Why?” や、“Do you have in your(our) town?” という表現と比較して聞くように促す。具体的には、“like”や“have”という表現をポイントに絞って比較して聞くように指示をする。④の段階は、②③の段階を踏まえて、“Do you like ~?” や、“Do you have ~?”という出だしの言い方と、“What's good ~?” と、いう出だしの言い方を比較し、分析をしながら分類を行う。その際、これまでに音声で聞き慣れてきた経験を生かし、like, have は、「Do you グループ」で、good(good point)は、「What's グループ」だなどと音声情報の特徴を基

に分類し、名前付けをすることもできる。思考ツールのベン図や X チャート等を用いて、着目した文字 (like, have, good) を書かせたり、タイピングしながら分類することも可能である。

- 備考:教科書の表現では、チャンツに“Tell me about your town.”という表現が提示されている。やり取りを通して、まちの様々なことを伝え合う際に、提示された表現だけでは十分でない場合がある。そのような場合は、リスニング課題として設定されている音声を活用することで、表現の幅が広げられることがある。児童が音声に立ち戻って聞き直し、自分の言いたい事に必要な情報を再収集することができるような学習経験を積ませることが重要である。

<教師の発問と児童の応答の例>

①情報活用能力(問題解決・探究)【L1】未満 指示された情報の比較がまだできない段階。

T:具体的に魅力を尋ねるには、どのように言うとよいか。Do you like～?以外でも尋ねているかな。

S:これまでの質問と何が違うんだろう。“Do you like your home town?”とも言っているよ。

②情報活用能力(問題解決・探究)【L1】指示された情報の比較ができる段階。

T:具体的に魅力を尋ねるには、どのように言うとよいか。Do you like～?以外でも尋ねているかな。

S:“Do you like ～?”のやり取りの後に、“Good point”を使って尋ねている。

T:Nice catch! Let's listen carefully to that part.

～視聴後～

S:Do you like～じゃなくて、What's good?と尋ねている。

③情報活用能力(問題解決・探究)【L2】複数の条件に応じて情報選択し、比較して特徴を見つける段階。

T:これまで、みんなが使ってきた質問の表現は、どんな言い方があったかな?どんな言葉をつかってきたかな?

S:Do you like～?や Do you have～?を使ってきた。

T:What's new phrase? Today' new question phrase is・・・?

S:What's good about your town? 後ろは、about your town.で、チャンツの言い方と同じ。

④情報活用能力(問題解決・探究)【L3】複数の条件に応じて、情報を選択し、見出した特徴を基に分類できる。

T:Let's make group these words.

S:likeやhaveと違って、始まりは、What's なんだね。like, haveは、「Do youグループ」で、good (good point)は、「What'sグループ」だ。

【思考を促す活動の工夫】

音声情報の収集を行うには、目的が必要である。小学校外国語の場合、特に5年生の学習段階においては、知識・技能を獲得しようとしながら表現の幅を広げていく学習段階になった際に、主にやり取りの場面において、実際にやり取りをしてうまくいかなかった(言えなかった、分からなかった)表現に気づき、音声情報に立ち戻って聞き返す必要感が生まれる。身近で簡単なことを、基礎的な語句や表現を駆使してやり取りを続けていくことから、これまでにどのような語句や表現に児童が慣れ親しんできたか、どの言葉なら聞き取って発話につなげられそうかを教師が把握しておくことが必要である。本事例では、これまでに十分に慣れ親しんできた Do you like/have?の文と What's～?の文の比較だったことから、音声で捉えたり分析、分類していくことが可能となった。教科書で示されている音声を教師自身がしっかり把握し教材分析をしておくことで、児童が既習を活かした思考の整理を行う活動を組み込むことが可能となる。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

教科書で設定されているリスニング課題は、段階が計算されて設定されている。単に、内容理解だけに使用して終わるのではなく、思考のレベルを深めていくような聞くことの活動に利活用できる。また、リ

スニング課題は、目的や場面が課題の中で設定された上でやり取り等が行われていることから、場面に活かせる発話に活用できる内容が多い。聞いて理解しただけでは、なかなか発話に繋がらないことから、教師の指示を通して必要な語句や表現にフォーカスさせ、分析的に聞かせる過程を経験することで情報活用能力の育成の基礎に繋がる。小学校段階では、文字情報に頼れない場合も多いが、「聞くこと」の方略を高めておくことがまずは重要である。絵カードや簡単な語句カードを提示し、思考ツールと組み合わせることで思考の整理や分析をすることで、今後の文字情報を伴った学びにも繋がる学びが展開できる。

Here We Go! 5 Unit 8 “This is my town.”

○「まちの魅力を伝え合おう。」

■「相手に応じて、まちの魅力を伝えることができる。」

- ① 伝える目的をもって話すことは、まだ難しい。
- ② 伝える目的を持ち、単元で学習した基本的な語句や表現を用いて相手に分かりやすく話すことができる。【③-S1】
- ③ 自分の思いや目的をもって、聞き手に必要な情報を引き出すために表現方法を選択し、適切な語句や既習表現を用いて話すことができる。【③-S2】
- ④ 自分の思いや意図をもって、聞き手とのやり取りをしながら、複数の表現手段を組み合わせる効果的に話すことができる。【③-S3】

- 評価活動：第4時での話すこと[やり取り]【アレンジ度：★☆☆】
- 使用教材：Let's listen《p.94》
- 評価観点：話すこと[やり取り]/情報活用能力(整理・分析、まとめ・表現)
- 自己調整段階：プランニング(予見) モニタリング(遂行統制) リフレクション(自己省察)
- 学習過程：課題設定 情報収集 整理・分析 まとめ・表現 振り返り・改善
- 情報活用能力(体系表例)：②S1 ②S2 ②S3 ③S1 ③S2 ③S3 N/A
- 情報活用能力説明：本事例では、音声情報の収集後の、実際の発話について説明する。場面は、使用教材である Let's listen. を活用して、内容理解と情報の整理・分析を行った後、児童が実際に、互いの考えるまちの魅力についてやり取りを行う場面である。
 ここでは、児童は、「自分の考えるまちの魅力は何か」を伝えるための発話能力が必要となる。その際に、使用教材で用いられている表現を参考にして発話をしていく。具体的には、相手の好みや必要な情報に応じて、まちの魅力(できること)を伝える力が必要となる。誰にとっても、どんな情報(まちの魅力)を、どのように話せばまちの魅力が伝わるか、相手に応じた内容を言葉や表現の選択を行いながら話すことで、発信型の情報活用能力を育成する。
- 活動説明：児童はこれまでに、“Do you like your home town? Why?” や、“Do you have 場所・施設など in your(our) town?” という表現を用いて、まちの好きなところや施設などを伝え合ってきた。本時は、「自分の考えるまちの魅力」を伝え合うことが本時の目標であるため、具体的に「良さや魅力」を尋ねる表現が必要となる。好きという感情は主観的な印象が理由となる場合もあるが、「良さや魅力」となると、相手に応じた良さや相手の目的や必要感に応じた魅力という客観的な視点も加わる。言語活動の視点から考えると、主観的に自分の考えや気持ちとしてのまちの魅力(できること)を伝えるのも良いが、相手の好みや必要としている情報に応じて、情報(自分の考え)を伝えることもまた必要である。
 この考え方をもとに、児童は、情報の収集段階で学んできた“What's good about your town?” に繋がる前後の文脈で、相手の好みを尋ねる必要がうまれる。また、その前後の会話の文脈があるからこそ、“You can enjoy ~.”や“We can enjoy ~.”の返答が意味をもってくる。会話の例は後述する。
- 尺度説明：②の段階は、本時のめあてに向かったやり取りを実際に行った後に、「具体的にどんな点がまちの良さ(魅力)か」について答える状況である。Let's listen. のインタビューがどのように返答しているかを聞く。その活動を通して、“We have ~.” “You can enjoy ~.”と、単元で学習した基本的な語句や表現を用いて返答することができる段階である。③の段階は、これまでに自分が使用してきた“I like ~. Do you like ~?” を使って相手のこと(相手にとって知る価値のあること、好みなど)を知ってから、“We have ~. We can enjoy ~.”と、まちの魅力を伝えていく。具体的には、相手と自分の共通点をもとに、自分の思いを含めながらまちでできることを伝える段階である。④の

段階は、②③の段階を踏まえて、“Do you like ～?” や、“Do you have ～?”という質問をしながら即興的なやり取りを行う。返答の際、“We can enjoy ～. You can enjoy ～,too.”と、住民である自分達はもちろん、また聞き手も体験可能であることを述べて、まちの魅力やできることについて伝えることができる。また、ご当地感をだすために、地域の特徴的なもの・ことなどを伝える際に、方言なども用いて伝え、聞き手の興味や関心を高めるようにする。

- ▶ 備考:教科書の表現では、チャンツに“Tell me about your town.”という表現が提示されている。やり取りを通して、まちの様々なことを伝え合う際に、提示された表現だけでは十分でない場合がある。そのような場合は、「ほかにどんな情報があれば、より伝わるか。」「どのように話せば、やってみたくなったりするか。」など、伝えた方がよい追加情報を考えさせることで思考が深まる。例えば、紹介する内容により、“It’s fun/scary/exciting/delicious.”などの実際に体験したからこそ伝えられる感想を加えて言うこともその一つである。

<パフォーマンスモデル>

①アウトプット情報活用能力(思考力、判断力、表現力等)【③-S1】未満

まちの魅力について尋ねられた際、自分の好きなこと・もの(食べ物など)を言うことはできるが、まちの魅力伝える目的をもって話すことが、まだできない段階。

S1:What’s good about your town?

S2:I like Okinawa soba.

②アウトプット情報活用能力(思考力、判断力、表現力等)【③-S1】

まちの魅力について尋ねられた際、単元で学習した基本的な語句や表現を用いて相手に分かりやすく話すことができる段階。

S1 :What’s good about your town?

S2:We have nice Okinawan food restaurant. You can enjoy Okinawa-soba.

③アウトプット情報活用能力(思考力、判断力、表現力等)【③-S2】

まちの魅力について尋ねられた際、聞き手にとって知る価値のある情報を引き出すために質問をし、返答の際には、表現方法を選択し、適切な語句や既習表現を用いて答えることができる段階。

S1 :What’s good about your town?

S2:We have nice Okinawan food restaurant. I like soba noodle. Do you like noodle?

S1:Yes! I like noodle very much.

S2:Oh! You can enjoy Okinawa-soba. We have many nice Okinawa soba restaurant.

④アウトプット情報活用能力(思考力、判断力、表現力等)【③-S3】

まちの魅力について尋ねられた際、聞き手と即興的なやり取りをしながら、複数の言語を用いた表現を組み合わせ、効果的にまちの魅力について伝えることができる段階。

S1 :What’s good about your town?

S2:We have nice Okinawan food restaurant. I like soba noodle. Do you like noodle?

S1:Yes! I like noodle very much.

S2:Oh! You can enjoy Okinawa-soba. We have many nice Okinawa soba restaurant. We can eat jushi-onigiri, too. It’s Okinawan takikomi-gohan. It’s

yummy. You can enjoy it, too! Let's go to ○○shokudo! ○○shokudo is my favorite restaurant. It's very nice! (お店の写真などを見せる)

【思考を促す活動の工夫】

発話の広がりや深まりを促すやり取りには、伝え合う目的や場面、状況が必要なことはいうまでもない。本単元に限らず、単元内で学習する基本表現は、英語学習の知識の幅を広げるが、その表現だけを用いて会話をしても言語活動としての広がりや深まりは生まれにくい。そこで、既習表現の活用が重要になってくる。まち紹介の単元では、単元の中盤あたりまで、児童は、新しい表現や語句に言い慣れることをモチベーションとしているが、言い慣れてきた頃には物足りなさを感じ始める。そのタイミングで、自分が小さい頃によく家族で出かけた場所や近所の小さな商店など「児童にとって思い入れのある場所(My favorite place)」を紹介し合うことで懐かしさや新鮮さを感じながら思いをこめてやり取りをする。そうすることで、自分も何とかして伝えたくなったり、相手が言っていることも興味を持って聞こうとする。相手との共通点を見いだせれば、身近なことで伝えたい事柄も増え、発話の増加にもつながる。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

やり取りを行いながら、既習表現を駆使して発話をし、使用する語句が増えたり言い慣れが進んだりする。やり取りを通して収集した相手の好みや知りたい情報について、返答を替えながら写真などを提示できるとより分かりやすく、相手の興味・関心を引き付けることができる。そこで、やり取りの途中で写真を提示して見せたり、日本語や沖縄の方言なども混ぜて、複数の表現方法を組み合わせてやり取りを行うとより効果的である。その際は、始めから写真等の視覚資料を見せ続けるのではなく、効果的なタイミングで提示することも指導することで、発信のための情報活用能力を育成することが可能となる。

Here We Go! 6 Unit 3 “What time do you get up?”

(Let's Try! 2 Unit 9 “This is my day.”)

○「先生の一日の生活の流れを聞いてみよう。」

■「先生との生活の違いを知るために日課を聞き、自分の生活と比べながら整理することができる。」

- ① 話されている情報を聞いても、内容を理解することはまだむずかしい。
- ② 話されている情報を聞き、教師の日課を理解することができる。
- ③ 話されている複数の情報を聞き、教師の日課の特徴を見つけることができる。
- ④ 話された複数の情報を整理し、自分らしさを伝えるために必要な情報とそうでない情報を区別しながら聞くことができる。

- 評価活動:先生の日課紹介を聞き取り、日課や時刻を自分の日課と比較しながら聞き取る。【アレンジ度:★★☆】
- 使用教材:Let's watch と Let's listen(p.34)、Let's watch and think.(p.38)、教師の日課の写真・動画、日課のデジタルカード
- 評価観点:思考・判断・表現、聞くこと(必要な情報を聞き取り、時系列を整理したり、自分の生活と比べたりしながら聞くことができるか)
- 自己調整段階:☒プランニング(予見)☐モニタリング(遂行統制) ☐リフレクション(自己省察)
- 学習過程:☒課題設定 ☒情報収集 ☒整理・分析 ☐まとめ・表現 ☐振り返り・改善
- 情報活用能力(アイディア集):☒L1 ☒L2 ☒L3 ☐L4 ☐L5 ☐L6 ☐L7 ☒L8 ☐L9 ☐N/A
- 情報活用能力説明:インプット段階では、教師の日課に関する情報を聞き取り、自分の生活との共通点や違いに着目しながら情報を整理・比較する活動を通して、情報活用能力の育成を図った。児童は、単に日課に関する語句や表現を聞いて理解するだけでなく、「自分の生活を紹介する」という最終活動に向けて目的を意識しながら情報を収集し、必要な情報を選択したり整理したりすることが求められる。本実践では、日課の聞き取りと比較という活動の特性を踏まえ、問題解決・探究における情報活用能力のうち、情報理解から情報選択に至る基礎段階(L1~L3)を中心に育成することを意図して授業を設計した。この過程では、情報の理解(L1)、複数情報の整理・比較(L2)、目的に応じた情報の選択・分類(L3)といった、問題解決・探究における情報活用能力の基礎的な段階の育成を意図している。

なお、本研究で参照した「問題解決・探究における情報活用能力」のレベルでは、L1 は「簡単なグラフや表から情報を読み取ることができる」段階として示されているが、本実践ではこれを図表情報に限らず提示された情報を理解する基礎段階として捉え、教師の日課に関する発話を聞き取り、示された情報を把握する段階として位置付けた。さらに、小学校段階の外国語(活動)では言語情報のみで理解することが難しい場合も多いため、教師が提示するイラストや写真などの視覚情報を手がかりに意味理解につなげる力もL1 の段階に含めて捉え、本 Can-Do 尺度では、言語情報と視覚情報を組み合わせて意味理解を行う段階を L1 として位置付けた。生活を比較しながら聞くことで、自己理解や他者理解を深める機会にもなり、主体的に学びに向かう姿勢の形成にもつながることを期待している。
- 活動説明:教師が画像や動画を使用して日課紹介を行う。児童は、一日の流れを整理しながら聞き取ったり、自分の生活との違いを意識しながら聞き取ったりする活動。外国語活動としては、Let's Try! 2 Unit 9“ This is my day.”に基づき、日課や時刻を表す文レベルの情報理解を中心とするが、Here We Go! 6 Unit 3“ What time do you get up?”の Let's listen で実施する際には、1つの談話の中に含まれる複数の情報の関係を捉えながら話し手の職業と関連付けて理解し、自分の生活と比較しながら聞き取る活動とする。
- 尺度説明:インプット段階の尺度は、教師の日課に関する情報を聞き取り、自分の生活との共通点や違いに着目しながら情報を整理・比較する力の発達段階を示したものである。①情報理解が難しい段階から②

提示された単一の文の情報を理解する段階、③一つの談話の中に含まれる複数の文の情報を整理したり比較したりして特徴を捉える段階、④目的に応じた情報の選択・分類へと発展する構造で設定している。

- 備考:「全部聞く」ではなく「自分とどこがちがうかを探す」という目的を持たせることが大事である。児童の聞く力に合わせて、比較視点(時間/活動/早い遅い など)を例に提示してから聞き取らせると良い。

<教師の発話と児童の理解の例>

- ① I get up at 6 a.m. (get up など日課を表す語句や表現を聞き取って理解することがまだ難しく、画像や動画を見て理解する状態【情報理解の前段階】)
- ② I get up at 6 a.m. (先生は6時に起きるということを理解することができる状態【単一情報の理解】)
- ③ I get up at 6 a.m. I eat breakfast at 6:30 a.m. I brush my teeth at 7:00 a.m.
(先生は6時に起きて、6時半に朝食を食べて、7時に歯を磨くから、30分で朝の支度をするのかと理解できる状態【複数情報の整理・比較・特徴の把握】)
- ④ I get up at 6 a.m. I eat breakfast at 6:30 a.m. I brush my teeth at 7:00 a.m.
(私は朝5時半に起きて、まずは顔を洗ったり歯を磨いたりするな。【目的に応じた情報の選択・関連付け】)

【思考を促す活動の工夫】

教師の生活を時系列で整理することで、教師の日課の特徴に気づかせた。日課や時刻を伝えるだけでなく、How about you? What time do you get up? Oh, you get up early.など、教師が積極的に児童の日課と比較するような伝え方を行った。また、教師が I take a shower at 6:15a.m. と伝えたのに対して、How about you? Do you take a shower in the morning? No? Do you take a shower? No? (児童がお風呂に入るジャスチャーをする。) Oh, you take a bath. What time do you take a bath? のように伝え、児童が自分生活の流れに焦点を当てた内省につながられるように問いかけの工夫を行った。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

日課の情報を整理・可視化するために、教師が日課のイラストと時刻を書き入れるデジタルカードを作成して配布した。教師の話聞きながらデジタルカードに時刻を書き入れることで、自分との共通点や違いに着目して振り返る機会を設けた。

Here We Go! 6 Unit 3 “What time do you get up?”

(Let's Try! 2 Unit 9 “This is my day.”)

○「友達に知ってもらいたいと思う冬休みの自分の一日を紹介しよう。」

■「自分らしさが伝わるように、冬休みの一日の生活を整理し、工夫して紹介することができる。」

- ① 自分の日課をスライドに並べることはできるが、自分らしさを意識して伝えることはまだむずかしい。
- ② 自分らしさが伝わるように、冬休みの一日の日課の中から活動を選んで紹介することができる
- ③ 一日の流れに沿って複数の情報を整理し、自分の特徴が伝わるように紹介することができる。
- ④ 友達の発表を参考にしながら改善し、より自分らしさが伝わるように工夫して紹介することができる。

- 評価活動:自分らしさが伝わるように、整理した冬休みの一日について、日課の情報をもとに、自分の生活の特徴が伝わるよう活動内容や時刻を選択し、時系列に沿って構成して日課を紹介する。【アレンジ度:★★★】
- 使用教材:Let's try. Plus one(p.35&37)日課のデジタルカード(音声録音を含む)、児童が自分で撮影した写真や動画
- 評価観点:思考・判断・表現、話すこと[発表](整理した情報をもとに、自分の冬休みの生活の特徴が伝わるよう、活動内容や時刻を選択・構成し、時系列に沿って表現できているか)
- 自己調整段階:プランニング(予見) モニタリング(遂行統制) リフレクション(自己省察)
- 学習過程:課題設定 情報収集 整理・分析 まとめ・表現 振り返り・改善
- 情報活用能力(アイデア集):L1 L2 L3 L4 L5 L6 L7 L8 L9 N/A
- 情報活用能力説明:アウトプット段階では、インプット段階で収集・整理した日課の情報をもとに、冬休みの自分の一日の生活の流れが伝わるよう日課や時刻を選択し、時系列に沿って構成して表現する活動を通して、情報活用能力の発展的な活用を図った。児童は、単に日課や時刻を英語で紹介するだけでなく、「自分らしさを伝える」という目的を意識しながら情報を選択し、整理した情報をデジタルカードや動画などを用いて構成して表現することが求められる。本実践では、インプット段階で整理した情報を活用して自己表現を行うという活動の特性を踏まえ、問題解決・探究における情報活用能力のうち、整理した情報を可視化して表現すること(L5)、目的に応じて情報を整理して表現すること(L6)、複数の条件に応じて情報を選択・構成すること(L8)、他者の発表を参考に表現を見直し改善すること(L9)といった、問題解決・探究における情報活用能力の発展的な段階の活用を意図している。友達の生活との違いや共通点を踏まえて自分の生活を見つめ直すことで、自己理解や他者理解を深めるとともに、他者の表現を手がかりに自分の表現のよさや改善点を考え直す過程を通して、よりよい表現を目指して改善しようとする主体的な学びの姿勢の形成にもつながることを期待している。
本実践では、インプット段階の情報理解・整理(L1~L3)から、アウトプット段階の情報構成・発信・改善(L5・L6・L8・L9)へとつながる一連の情報活用プロセスを意識して授業を設計した。これにより、外国語活動における言語理解や自己表現の活動を通して、問題解決・探究における情報活用能力を段階的に活用・発展させる学習過程を示すことを意図している。
- 活動説明:児童は、冬休みの一日の流れが伝わるように整理した情報をもとに、画像やデジタルカード等を活用して自分の冬休みの日課を紹介する活動。自分の生活の特徴が伝わるように、一日の流れを意識して構成したり、友達の発表を参考にしながらより分かりやすく伝える工夫をしたりする。なお、教科書上は「話すこと[やり取り]」の活動として位置付けられているが、実践報告では整理した情報をもとに自分の生活の特徴を構成して伝えることを重視するため、「話すこと[発表]」の形式で実施した。
- 尺度説明:アウトプット段階の尺度は、インプット段階で整理・分析した日課の情報をもとに、自分の生活の特徴が伝わるよう日課を選択して時刻を伝え、一日の流れに沿って構成して表現する力の発達段階を示したものである。目的に応じて情報を選択・構成し、他者の発表や共有を参考にしながら表現を改善してい

＜過程を評価の中心とする。尺度の段階は、①情報の選択が難しい、②目的に応じた情報選択、③時系列に沿って複数の情報を選択・構成して表現、④他者の発表を踏まえた改善・再構成をして表現の段階へと発展する構造で設定している。

備考：冬休みの生活のすべてを表現するのではなく、「友達に知ってもらいたい、自分らしさが伝わる内容を選ぶ」という目的を持たせることが重要である。児童の表現力に応じて一日の流れの枠組みを示し、他者との違いに着目して自分の特徴を伝えられるように意識させるとよい。最終段階では、友達の発表を参考に表現を見直す機会を設けることで、より正確な表現(知識・技能)と、自分らしさが伝わる表現(思考・判断・表現)の両面から改善につなげられる時間を確保する。それにより、自らの取り組みを改善(主体的に学習に向かう態度の育成)することにもつながる。

＜児童のパフォーマンスとその補足説明＞

- ① get up のイラストの下に自分が起きる時間の 7 a.m.が書かれている。そのほか、一日の流れに対応してスライドは並び替えているが、自分らしさを含めて伝えられない状態。【情報整理・表現準備】
- ② I get up at 7 a.m. I eat breakfast at 7:30 a.m. I study at 8 a.m.(朝のうちに勉強を済ませていることを伝えている。【情報の選択】)
- ③ I get up at 7 a.m. I eat breakfast at 7:30 a.m. I study at 8 a.m. I eat dinner at 7:30 p.m. I watch TV at 8:00 p.m.(朝のうちに勉強を済ませて、夜はテレビを見るということを伝えている。【複数情報の構成】)
- ④ I get up at 7 a.m. I eat breakfast at 7:30 a.m. I study at 8 a.m. I study English.(友達が I study Math.と発表しているのを聞いて追加) I eat dinner at 7:30 p.m. I watch TV at 8:00.(朝のうちにやる勉強を英語だと伝えたいので、動画のスライドに英語を勉強しているイラストを載せて、表現を増やしている。【他者を参考にした表現の改善】)

【思考を促す活動の工夫】

教師・友達・自分という比較視点を意識させながら、自分らしさが伝わる日課の選択や構成を促した。単に日課や時刻を紹介するだけでなく、Why? Do you like it? How is it different from mine? などの問いかけを行い、自分の生活の特徴や理由を考えながら表現できるよう支援した。また、中間指導において友達の発表動画を共有した後に、英語の表現をより正しく伝えよう、自分らしさを表すために○○を加えようなど、改善につながる振り返りの機会を設け、より分かりやすく自分らしさが伝わる表現へと再構成できるよう促した。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

インプット段階でも使用した児童が日課や時刻を選択して並べ替えられるデジタルカードを、アウトプット段階でも活用した。整理した情報をもとに一日の流れを構成して紹介する活動を行うことで、自分の生活の特徴を意識して表現する機会を設け、デジタルカードを自由に追加したり、書き換えたりすることも容認した。さらに、友達の発表を参考に表現を見直す中間振り返りの時間を設け、より自分らしさが伝わるよう改善しようとする姿勢を促した。なお、改善した点については、最終の振り返りに自由記述でどこを改善したかを表出させるようにした。

Let's Try! 2 Unit 7 “What do you want?”

○「アイスクリームやさんごっこをするために、お店屋さんがどんなことを言うか聞いてまねしよう。」

■「お店屋さんのセリフを友達と一緒に考え、指導者の手本を聞いてまねして声に出すことができる。」

- ① 指導者の手本を聞いても、まねして声に出すことはまだむずかしい。
- ② 指導者の手本を聞き、聞いて取り入れた言葉を指導者に促されればまねして声に出せる。
- ③ 指導者の手本を聞き、聞いて取り入れた言葉を自分からまねして声に出せる。
- ④ 指導者とのデモンストレーションの場面でも、自分からまねして声に出すことができる。

- 評価活動:お店屋さんのセリフを考えよう【アレンジ度:★★★】
- 使用教材:Listen①(パフェ作りではなく、アイスクリームやさんでの Teacher Talk)
- 評価観点:知識・技能、聞くこと
- 自己調整段階:プランニング(予見) モニタリング(遂行統制) リフレクション(自己省察)
- 学習過程:課題設定 情報収集 整理・分析 まとめ・表現 振り返り・改善
- 情報活用能力(体系表例):②S1 ②S2 ②S3 ③S1 ③S2 ③S3 N/A
- 情報活用能力説明:本活動では「情報活用能力の体系表例」の「A 知識及び技能 2 問題解決・探究における情報活用の方法の理解 ①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解」のステップ1a「身近なところから様々な情報を収集する方法」について学ぶのがまだ難しい児童を対象にしている。そのため、L1 の土台となる部分の能力を育成することをインプット段階で目指したいと考える。筆者は独自にL1 の土台(前段階)として「身近な情報源を信頼して情報を受け入れる」という段階を想定している。ここでいう「身近な情報源」とは、指導者を指す。指導者の発する音声での手本を聞き取ってまねして言うてみる活動を通して、指導者を信頼して必要な情報(アイスクリーム屋さんで使用する表現)を自分のものとして取り入れる機会を児童が得られるようにする。ここでは、情報を取り入れてまねすることは、アウトプットを通じたインプット理解の発露としてとらえている。インプット理解を目に見える形にするための「まねして声に出す」という活動だということを念頭に置いておく必要がある。
- 活動説明:指導者は児童に、「アイスクリームやさんをするとき、お店の人はお客さんになんて言うかな?」「まずは・・・?」などと発問し、アイスクリームやさんをするのに必要な表現を児童から引き出す。その上で、“May I help you?” “What do you want?”などの表現を指導者から一人ずつ聞き、まねして声を出す活動を行う。その後、指導者がお客さんになり、児童がアイスクリームやさんになりきって、聞き取ってまねした言葉をアイスクリーム屋さんごっこのやり取りの中で使ってみる(時間をおいてまねる)活動を行う。その際、児童が言い淀んでしまっても指導者にどんな表現だったかたずねてもよいと伝えておき、手本を安心して何度も聞けるように配慮する。
- 尺度説明:指導者の手本を聞いてもなかなか自信をもつことができないのか、まねすることも難しい児童がいる(①の段階)。指導者が手本を聞かせて、まねてみるように促したり「一緒に(同じタイミングで)言ってみよう!」と声に出すことを誘ってみたりして、聞いた言葉をまねして声に出せることを②の補助的段階として設定する。情報活用能力の観点で考えると、段階が上がるごとにステップ1a「身近なところから様々な情報を収集する方法」の方向に能力が近づいていき、情報を自分から取りに行くような尺度設計になるべきと考えたため、指導者の積極的な支援なしに手本をまねして声に出せれば、③のおおむね満足できる段階に至っていると考える。また、④の挑戦的な段階では「指導者とのデモンストレーションの場面」のように少し間をおいて違う場面でも聞いてまねしたことがもう一度再生できることを求める。時間をおいてまねることで、少し前に聞いたことを頭の中でもう一度活性化させ、より深いインプット理解につながると考えた。
- 備考:本尺度は低中学年の特別支援学級5人前後の少人数での学習を想定している。指導者が児童に音声を聞かせてまねをするように支援するのも、児童1人ずつに行うことを想定している。20人以

上の普通学級でも応用可能だが、指導者の支援の量には限界があるので、活動内容や尺度・支援の方法については児童の実態に応じて変更するとよい。

<教師の発問と児童の応答の例>

- ①T:「いらっしゃいませ！」は、“May I help you?”って言うよ。まねして言ってみよう！
S:…(聞いてはいるが、言い淀んでまだまねをする自信がない)
T:お客さんが来たら、“May I help you?”ってたずねてみるんだよ。またやってみようね！
- ②T:「いらっしゃいませ！」は、“May I help you?”って言うよ。まねして言ってみよう！
S:…(1人で言うのは少し恥ずかしくて言い淀んでいる)
T:いっしょに言ってみよっか、せーの“May I help you?”
S:“May I help you?”
T:すごい！声に出して言えたね！
- ③T:「いらっしゃいませ！」は、“May I help you?”って言うよ。まねして言ってみよう！
S:“May I help you?”
T:まねするのとっても上手！／1人で言えたね！いい調子だね！
- ④S:先生、「いらっしゃいませ」って何て言うやつけ？「なんかかへるぴゅー」やつけ？
T:半分覚えてるのえらい！よーく聞いてね。“May I help you?”
S:そうやった！“May I help you?”
T:Good job!!

※挑戦的な段階の見取りは、聞いてまねした後に、児童がアイスクリーム屋さんになりきって習った言葉を使ってアイスクリーム屋さんごっこを楽しんでいる際を想定している。

【思考を促す活動の工夫】

指導者が決めたセリフを言うのではなく、児童がアイスクリームのお店屋さんになったつもりでどんなことを言うか考える機会を作る。場面を想起することで児童の思考を促し、自分だったらどんなセリフを言うか自分の考えを形成する機会を与えることができる。また、「自分が考えたセリフは英語で言うとどうなるんだろう？」という素朴な疑問が児童の中に生まれやすくなると考える。児童が友達や指導者と一緒に必要な表現を考える活動を通して、「指導者の手本を聞く」場面が児童にとって必然性があり、言葉の取り入れを行うための状況を作り出すようにする。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

聞き取ってまねする機会の後に、指導者とデモンストレーションしてまねして音声化した言葉をやりとりの場面の中で使ってみる活動を1人ずつ行う。指導者がお客さん役、児童がお店屋さん役になり、お店屋さんごっこを楽しむために、一度まねした表現を児童が思い出して使うようにする。一度聞いてまねしてから時間が経過しているはずなので、表現をおぼえていない児童も多いかもしれないが、自分から「先生、何て言うんだっけ？」とたずねる機会を創出することになるかもしれない。児童によっては、自分から困りを言えずにフリーズしてしまうかもしれないが、わからないことを表現するのが難しい児童には、もう一度1対1で指導者の手本を聞かせてまねしてみるように促すことができる。

Let's Try! 2 Unit 7 “What do you want?”

○「アイスクリームやさんごっこをしよう！」

■「アイスクリームやさんになりきって、おきゃくさんがほしいアイスをたずねたり提供したりできる。」

- ① 指導者の助けがあっても、ほしいアイスをたずねたり提供したりするのはまだむずかしい。
- ② 指導者の助けがあれば、ほしいアイスをたずねたり提供したりすることができる。
- ③ 指導者の助けがなくても、ほしいアイスをたずねたり提供したりすることができる。
- ④ 役になりきって相手を意識し、ほしいアイスをたずねたり提供したりすることができる。

- 評価活動:アイスクリームやさんごっこ【アレンジ度:★★★】
- 使用教材:Activity①(パフェではなくアイスクリームに変更)
- 評価観点:思考・判断・表現、話すこと[やり取り]
- 自己調整段階:□プランニング(予見)☒モニタリング(遂行統制) □リフレクション(自己省察)
- 学習過程:□課題設定 □情報収集 □整理・分析 ☒まとめ・表現 □振り返り・改善
- 情報活用能力(体系表例):□②S1 □②S2 □②S3 ☒③S1 □③S2 □③S3 □N/A
- 情報活用能力説明:本活動では「情報活用能力の体系表例」の「B 思考力・判断力及び表現力等 1 問題解決・探究における情報を活用する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力」のステップ1「相手を意識し、わかりやすく表現する」ことに焦点を当てる。役になりきることで、表現にアドリブ要素が加わり、やり取りを豊かにして相手(お客さん)がより楽しくアイスクリームを買うことにつながる(④の挑戦的な段階に設定)。まだ、役になりきる以前に、やり取りすることになかなか自信がもてない児童については、「指導者の助けを得て」表現できるようになることをまずは目指すようにした。「身近な情報源を信頼して情報を受け入れる」インプットの段階に一旦戻って情報の取り入れを再度行うことで、児童が活動に参加して必要な表現を言えるよう支援する。
- 活動説明:児童は机の上に並べたアイスクリームカード(サイズ 3 種類×10種類程度の味)の前でアイスクリームやさんになりきり、「お客さん」として教室にやってきた様々な教職員に“May I help you?” “What do you want?” などとたずねながら、児童はお客さんが欲しいアイスが何か理解し、お客さんが欲しがっているアイスクリームカードを見つけて“Here you are.”と言いながらお客さんにカードを渡す。
- 尺度説明:児童の中には、自分の中で伝えたい情報の内容や形式をうまく安定させることが難しいために、指導者から助けを得てもそれをうまく取り入れることに至らず、アウトプットにつながらない児童がいる(①の段階)。また、インプット(情報収集)活動ではおおむね満足できる段階・挑戦的な段階として設定していた「指導者からの助け」を、②の補助的段階に据えた。この段階の児童は、自分が発信しようとする内容や形式がまだ不安定なため、誰かの助けを得ることで伝える情報を安定させる段階だと考える。アウトプット(まとめ・表現)活動では、取り入れた情報を自分の言葉にする必要があるため、ただまねして声に出すだけでなく、それを目の前にいる「お客さん」に向かって使うことになる。繰り返しアウトプットを行う中で、少しずつ指導者の助けがなくても自分で表現できるようになり、伝えたい情報の内容や形式が安定することを狙う。③のおおむね満足できる段階には「指導者の助けがなくても」できることを据える。この段階では、まだ④の「役になりきる」までには至らず、指導者の助けがなくてもなんとかやり取りの言葉なら再生できる状態を想定している。相手がどう受け取るかよりも、とにかく習った表現を使用することに焦点を当てている段階と言える。本活動で焦点を当てている情報活用能力である、ステップ1「相手を意識し、わかりやすく表現する」のうち、「表現する」の部分がまずできるように考えた。ここまでの段階(①②③)は情報活用能力(体系表)における「相手を意識し、分かりやすく表現する」(ステップ1)に至るための前段階のレベルと想定している。④の挑戦的な段階として、「役になりきって相手を意識する」ことを設定し、基本的なやり取りに加えて相

手の発言に合わせて“Ok.” “I see.”と伝えたり、お客さんにおすすめをたずねられて“I like…”と答えたりしてやりとりをさらに豊かにできるようになることのよさを価値づけるようにした。

- 備考: 本尺度は低中学年の特別支援学級5人前後の少人数での学習を想定している。指導者や担任は、児童が困った時に助けられるように常に児童の様子を観察し、必要に応じて支援できるように巡回することを想定している。お客さんとして他の教職員に協力をあおぎ、アイスクリームを買いに来てもらう。20人以上の普通学級を想定したときは、児童同士でお店屋さん役とお客さん役に分かれて実施することができる。

<パフォーマンスモデル>

①(お客さん(C)がやってくる)

S: …(なんと言うか思いつかない)

T: (小声中) “May I help you?” って言うよ。せえの!

S: …(固まっている)

T: (小声中) 一緒に言ってみようよ。せえの、“May I help you?”

S: …(固まっている)

※指導者の助けを得ても、やり取りの続行が難しい段階

②(お客さんがやってくる)

S: …(なんと言うか思いつかない。指導者の方をチラチラ見て助けを求める)

T: (小声中) “May I help you?”

S: “May I help you?”

C: “Can I have an ice cream, please?”

S: “What do you want?”

C: “Rum raisin, please.”

S: うーん、なんて言うんやっけ?(小声中指導者に助けを求める)

T: (小声中) “What size?”

S: “What size?”

C: “M, please.”

S: “Cup or cone?”

C: “Cone, please.”

S: (正しいカードをもって) “Here you are.” C: “Thank you!”

※指導者の助け(T)がところどころ入るが、なんとかやり取りを続行させることができる段階

③(お客さんがやってくる)

S: “May I help you?”

C: “Can I have an ice cream, please?”

S: “What do you want?”

C: “Popping shower, please.”

S: “What size?”

C: “L, please.”

S: “Cup or cone?”

C: “Cup, please.”

S: (正しいカードをもって) “Here you are.” C: “Thank you!”

※指導者の助け(T)なしにやり取りが成立する。定型のやり取りからは外れない段階で、まだ「役になりきる」までには余裕はない状態

④(お客さんがやってくる)

S: “Hi! May I help you?”

C: “Can I have an ice cream, please?”

S: “Yes. What do you want?”

C: “Love portion 31, please.”

S: “Ok. What size?”

C: “?? Size?”

S: (指を差しながら) “S, M, L size”

C: “Ah, M, please.”

S: “Cup or cone?”

C: “Cone, please.”

S: (正しいカードをもって) “Ok. Here you are.” C: “Thank you!”

S: “?? Favorite?”
 S: 「ああ、おすすめ」“I like cotton candy.”
 S: “Yes.”
 S: “Ok!”

C: “And, what’s your favorite flavor?”
 C: “Your favorite flavor.「おすすめ！」”
 C: “Cotton candy?”
 C: “I see. Cotton candy, please.”

※指導者の助けなしにやり取りするだけでなく、Ok./I see.などのあいづちを適宜入れたり、お客さんが分からないことを知っている英語で教えようとしたり、分からない英語をお客さんとのやり取りの中で理解しようとするなど、自分からコミュニケーションを広げていったり相手の情報に合わせて発言したりする段階

【思考を促す活動の工夫】

インプット活動の際は、「まねして声に出す」ことを、アウトプットを通したインプット理解の発露としてとらえていた。それに対して、本活動(アイスクリームやさんごっこをしよう!)では、「まねして声に出す」ことを通してインプットしたことを実際にアウトプットして使ってみる場面になっている。これまで学んだどの表現を使ったらよいかを児童が考えて選ぶことでやり取りする機会になる。また、「お客さん」は、商品のサイズ展開についてあまりよく分かっていない様子だったり、突然おすすめをたずねてきたり、追加注文をしてきたりするなど、児童が予想していない発言をするので、児童は練習の時よりも状況に合わせて自分の思考を働かせて言葉を使用することになる。

【情報活用能力を活かす活動の工夫】(学びに向かう力を促す工夫)

この活動のために数名の教職員に協力を求め、職員室からやってきてもらう。いつもより児童の緊張度と挑戦する気持ちを高めて活動を行うことにつながる。指導者や担任は児童が何と言えればいいか困ったときに助けに回る役回りに徹することができ、児童も困ったことや思い出せない表現をたずねやすい。困ったときに助けを求める力(「情報活用能力の体系表例」の「C 学びに向かう力、人間性等 1問題解決・探究における情報活用の態度 ②試行錯誤し、計画や改善しようとする態度」のステップ1a「問題解決における情報の大切さを意識して行動する」)を育てることにつながるのではないかと。情報に対して自分からアプローチがかけられるようになるように指導したい。

令和7年度版中学校「外国語」教科書分析と考察

中学校外国語の文部科学省検定教科書6社の令和7年度版教科書について、HPでの情報等も参照しながら分析をし、令和3年度版教科書とも関連させて、学習者用デジタル教科書と教科書紙面における主な変更点を中心に、以下の3名の担当者が様々な視点からの考察を行いました。ただし、本報告は公開されている限られた資料での報告であり、全てのデジタル教科書の機能や特徴を網羅した結果ではないことをお断りしておきます。各教科書を比較する主旨ではなく、ご自身が使われている以外の教科書も参考にして、実践を工夫される上での何かの参考にしていただければ幸いです。

*令和3年度版中学校「外国語」教科書分析と考察については、2021年度冊子『小学校英語Can-Do及びパフォーマンス評価尺度活用マニュアル～中学校英語教科書接続観点別評価試案～』に掲載されています(pp.65-102)ので、ご参照ください。

(科研ホームページ：<http://www.izumi-lab.jp/easel.html>)

中学校英語検定教科書に見る小中接続・・・・・・・・・・・・・・・・ pp.23-24
(「言語教育エキスポ2026」予稿集より抜粋)

黒川愛子(帝塚山大学)・アレン玉井光江(青山学院大学)・加藤拓由(岐阜聖徳学園大学)・長沼君主(青山学院大学)・泉恵美子(関西学院大学)

令和7年度版 *NEW HORIZON English Course* (東京書籍) 教科書分析・・・・・・・・ pp.25-27

令和7年度版 *NEW CROWN English Series* (三省堂) 教科書分析・・・・・・・・ pp.28-30

令和7年度版中学校英語検定教科書(東京書籍及び三省堂)特徴分析・・・・・・・・ pp.31-33

アレン玉井光江(青山学院大学)

令和7年度版 *SUNSHINE English Course* (開隆堂) 教科書分析・・・・・・・・ pp.34-36

令和7年度版 *ONE WORLD English Course* (教育出版) 教科書分析・・・・・・・・ pp.37-40

令和7年度版中学校英語検定教科書(開隆堂及び教育出版)特徴分析・・・・・・・・ pp.41-43

黒川愛子(帝塚山大学)

令和7年度版 *BLUE SKY English Course* (啓林館) 教科書分析・・・・・・・・ pp.44-47

令和7年度版 *Here We Go! English Course* (光村図書) 教科書分析・・・・・・・・ pp.48-51

令和7年度版中学校英語検定教科書に見られる小中接続の工夫・・・・・・・・ pp.52-54

加藤拓由(岐阜聖徳学園大学)

中学校英語検定教科書に見る小中接続

(「言語教育エキスポ2026」予稿集より抜粋)

黒川愛子(帝塚山大学)・アレン玉井光江(青山学院大学)・加藤拓由(岐阜聖徳学園大学)・長沼君主(青山学院大学)・泉恵美子(関西学院大学)

1. はじめに

2024年度に小学校外国語科で、2025年度に中学校外国語科で、英語検定教科書が改訂され、学習者用デジタル教科書も配布された。児童生徒に一人一台のタブレットを用いて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図ることになる。本研究グループは、長年、小中連携も視座に、英語の評価について研究を進めてきた。特に児童生徒の思考力、判断力、表現力と学びに向かう力、自己効力や自律性を高める活動設計と評価に着目し、Can-Do評価やパフォーマンス評価、ルーブリック、eポートフォリオなどを開発し、理論と実践を行い、HP等でその成果を報告している(<https://izumi-lab.jp/easel.html>)。本発表は、令和7年版文科省中学校英語検定教科書6社の学習者用デジタル教科書(DT)と教科書紙面を分析し、昨年度報告をした、令和6年版小学校英語検定教科書の分析を踏まえ、より良い小中接続のための学びと指導、評価について考察し、さらなる教科書活用に向けた議論を行う。

2. 各社共通する小中接続の視点

2.1 小中連携を意識した単元構成

中学校1年生の教科書は、従来とは異なる構成となっており、最初の単元前の導入活動に留まらず、年間を通して小学校で学んだ言語材料を整理・応用している。文法項目については、キーセンテンスとともに、各単元の最後に文法用語も導入して説明されている。その際、復習される文法項目は、小学校で導入された語順、一般動詞、be動詞、疑問詞、名詞などである。また、語彙については、小学校で導入された単語と中学からの単語が分けて掲載されている。さらに、単元はCan-Doリストを通して指導と評価がでつながっている。

2.2 言語活動を意識した単元構成

小学校の身近な話題から中学校のより広い世界の話題へ徐々に移行しながら、各単元において受信技能から発信技能を育てるように構成されており、各単元の最終活動として発信技能を高め、定着させる活動が用意されている。さらに複数の単元を終えたのち、育成した能力を活用して総合的なコミュニケーション能力を発揮するプロジェクト活動が設定されている。そこでは、高次の思考を活用した言語活動に取り組むようになっている。

2.3 音韻認識・文字指導の充実

各社とも、中学校導入段階での「読み・書き」指導にスムーズにつなげるために、小学校で学習した音・文字指導を引き継ぎ、中学校1年生の導入期に生徒の音韻認識を高めるための指導を導入している。使用される教材は、小学校での活動経験を反映し、ゲーム的活動等を取り入れた音と文字との関係などについて、小学校での学習を想起させるように工夫されている。

2.4 豊富な学習者用デジタルコンテンツ

小学校で蓄積された情報活用能力を活かし、生徒の学習意欲を高める豊かなデジタルコンテンツが用意されている。また、本文に追加して、実際の場面で英語を使えるような、リアルな場面設定がされた学習者用デジタルコンテンツの充実が見られる。

3. おわりに

今回の報告は、教科書や一般公開されている資料を中心に、07版の改訂に焦点を当てて分析し

ており、各教科書の特徴を全て網羅しているわけではない。また紙幅の都合で割愛している箇所も多い。あくまで参考資料に留めていただければ幸いである。

引用文献

小学校英語評価研究会（2022）。「Can-Do 及びパフォーマンス評価尺度活用マニュアル～中学校英語教科書接続観点別評価試案～

令和7年度版 *NEW HORIZON English Course* (東京書籍) 教科書分析

アレン玉井光江(青山学院大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタル教材機能一覧

<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu/digitallearning/use/#sample>

◇デジタル教材体験版

<https://www.lentrance.com/reader/portal.html?e7985b95c#bookshelf>

英語体験版アカウント ID : R7tosho PW : sample

2. デジタル教科書

全教科に渡り、生徒の充実した学びをサポートするため、文字の大きさ変更(リフロー表示)、本文の読み上げ、文字色・背景色・行間の変更、ふりがな表示・分かち書き表示などのカスタマイズ可能な学習支援機能が準備されている。一人一人のニーズに対応し、支援が必要な生徒にも有効である。次にデジタルに関する5つの特徴を記す。

● 教科書紙面のページめくり速度を大幅向上

改修前に比べ、ページめくり時の表示時間を10分の1程度に短縮。授業の流れを止めずに、スムーズに紙面を開くことができるので、生徒の学びがはかどる。

● 音声や映像に簡単にアクセス(英語)

ポップアップ画面から、わずか1タップで、ネイティブスピーカーの英語音声や映像を聞くことができる。音声や映像の再生速度は調節が可能である。

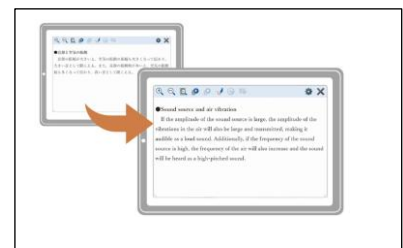


● Google 翻訳が利用可能

ポップアップ画面で Google 翻訳が利用可能。133 言語(2024 年 3 月時点)に対応し、外国につながる生徒の学びをサポートする。

● 授業支援ツールとのスムーズな連携

生徒が書き込んだ内容を画像保存できるスクリーンショット機能がある。ボタン1つで簡単に保存できるため、授業支援ツールを使った考えの共有や先生への提出がスムーズにできる。



● 教科書と教材とのリンク

学習者用デジタル教科書と連携可能なデジタル教材(有償)により、「個別学習」「協働学習」さらには「家庭学習」をサポートしている。

3. 新誌面上の工夫

【ダイジェスト版】

https://tokyoshoseki.meclib.jp/library/books/R7eigo_d/book/index.html#target/page_no=1

【内容解説資料】

https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/chu_r7/english/file/guide_book.pdf

令和7年度本には、つぎのような6つの大きな特徴がみられる。

1) スモールステップで確かな英語力を育成するため、次のような形で単元末活動(ゴール)に向けて言語活動を積み上げていく構成となっている。

- ① 学年のテーマを明確にして、生徒の段階的な成長を実現
- ② スモールステップでゴールにつなぐ Unit 構成
- ③ 単元のまとまりを重視した学習の流れ

単元のまとまりを重視した Unit の学習の流れが確保されており、それぞれのユニットでは、Part 毎に【Activity 1】【Activity 2】【Activity 3(ラウンドリーディング)】が用意されて、ゴールに向かって活動が積み上げられている。さらにユニットの最後には、【Unit Activity】があり、ユニットで学習した新しい表現を含めて4技能を総合的に高める活動が用意されている。さらにそれぞれのユニットでの各領域の活動では、Small Step で確かな英語力を育成する構成となっている。

2) スムーズに小中接続を行うため、生徒が英語を学ぶ楽しさや達成感を味わいながら学習を進められるように、次のような工夫がなされている。

- ① 小学校英語の基礎の定着を丁寧にフォローしている。系統性をもった文法配列に加え、「音と文字」の関係性を復習・学習し、単語の読み書きができるようにするための【Sounds and Letters】が設けられている。【Sounds and Letters】は令和3年度版と比べて約2倍の分量となっており、アルファベットの名称と音の確認から始まり、短母音・長母音、ライムを用いた子音の確認、ライムの異なる単語の比較による短母音の確認、子音二重字、final -e、母音二重字、R音化母音へと段階的に扱い、word decoding の力を丁寧に育成する構成となっている。
- ② 夏休みを活用して学習の足並みをそろえるため、「夏休み特集」が設けられている。生徒が自ら取り組みたくなるようなアニメ仕立てとなっており、既習事項の復習ができる構成となっている。
- ③ 小学校から中学校への学びに円滑につながるような Unit 構成となっており、「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」という活動の流れで定着を促している。

3) 未来を担う地球市民を育成

生徒が積極的に世界とつながろうとする「心」が育つように、次のような教材が掲載されている。

- ① カナダの生徒との国際交流で伝え合うよろこびを体験
- ② 多様な文化や価値観への気づきを促す「ダイバーシティメモ」
- ③ SDGs を自分事として考える題材を豊富に掲載

身近な話題から社会的な話題へと、発展的な「学びの広がり」を意識した構成になっている。SDGs、環境問題、人権、平和など、グローバルで深いテーマも取り扱っている。

4) 語彙選定の工夫

語彙は小中学校の教科書や CEFR-J の語彙リストのA1レベルを中心に選定されている。小学校で学習したとみなされる語を630語と設定し、それに中学校の新出語約1,700語を加えた約2,300語を取り扱っている。このうち小学校既習語から392語、中学校新出語から408語の合計800語を「発信まで使えるようになりたい語」と設定している。

5) 文法配列の工夫

文法指導では、小学校の学びを意識し、系統性を持たせた配列にしてある。夏休み前までは小学校で

学習した内容を振り返りながら、慣れ親しんだ表現について意識的、また明示的に文法事項について説明がされている。2-3年については、Unitの前半のPart1・2に、より重要な文法項目を配置し、後半のRead and Think 1・2には軽めの文法事項が配置されている。

6) 学習者用デジタル教材のコンテンツをさらに充実させ、生徒の学びのダイバーシティを保障し、「自分に合った学び方で学ぶ」を実現するため、具体的に次のような機能・教材が用意されている。

- ① 各学年とも、教科書冒頭に「学び方コーナー」があり、英語学習のコツが紹介されている。
- ② 小单元「Real Life English」では、生徒が「伝えたい!」と思えるように、実生活に即した場面設定がしてある。
- ③ 各学年とも教科書の巻末に帯活動用「Small Talk」が新設されている。Unitのトピックに関連した質問に、即興で応答する練習ができる。
- ④ 自分にあった学び方が見つかるQRコンテンツが豊富に用意されている。

令和 7 年度版 *NEW CROWN English Series* (三省堂) 教科書分析

アレン玉井光江(青山学院大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタル教材機能一覧

<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu/digitallearning/use/#sample>

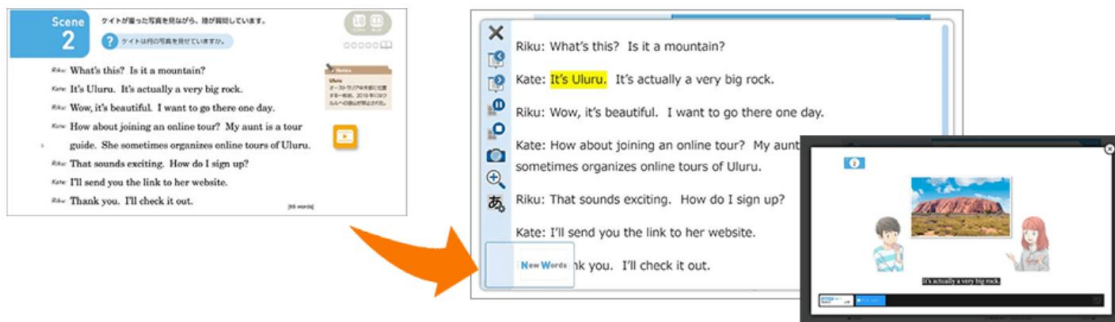
◇デジタル教材体験版

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/07ncpr/digital/>
英語体験版アカウント ID : R7trial PW : sanseido

2. 学習者用デジタル教科書

- 直感的操作で QR コードコンテンツと連携できるようにしている。

教科書紙面から音声を簡単に再生することができ、動画をはじめとする QR コードコンテンツに直接アクセスすることができる。



- 生徒の特性に応じた支援機能を充実させている。

どんな生徒にも使いやすいメニューパネルから、総ルビやグレースケール表示など、それぞれの特性に合うように設定できる。拡大画面では、Google 翻訳を利用することができ、教室内の多様な言語環境にもしっかりと対応している。

- 豊富なデジタルコンテンツ

- ① 発音チェック機能では、教科書本文や基本文を読むと、その発音を AI が 3 段階で評価する仕組みとなっている。
- ② 4,500 語以上の見出し語を収録した「英和辞典」、基本文を丁寧に解説した「文法解説動画」、意味や発音を確認・練習できる「単語練習」など、家庭学習でも活用可能なコンテンツを豊富にそろえている。

3. QR コード

- 基礎的・基本的な力が身につく、使いやすいコンテンツが提供されている。

本文の発音を録音すると AI が判定する発音チェック機能により、繰り返しトレーニングができる。また、各レッスンの理解を深める資料動画や文法解説動画を通して、一人一人の学びをサポートしている。

4. 指導者用デジタル教科書（教材）

- 授業展開にあわせて、コンテンツを組み換えることができる。



- 教科書本文を「NEW CROWNCORPUS」としてデータベース化している。特定の単語が使われている文を一覧で確認したりすることができる。



5. 新誌面上の工夫

【ダイジェスト版】

https://tb.sanseido-publ.co.jp/07ncpr/images/top/07nc_pamphlet_all.pdf

【内容解説資料】

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/07ncpr/#08>

令和7年度本には、次のような特徴がみられる。

1) 内容が豊富なストーリーと話題

- ① レッソンは複数の SCENE で構成されており、キャラクターたちのストーリーを楽しみながら、英語表現や文化について学べるようになっている。
- ② 中学生の知的好奇心や発達段階に即した題材を選定し、英語の授業を通して身の回りや社会的課題について「自分ごと」として考えるきっかけを創出している。

また、他教科で学習した内容を外国語学習に結び付けることで理解を深め、広い視野で考え、より豊かな表現へと発展させる構成となっている。

2) 学習意欲を高めるデジタルコンテンツ

一人一人の学びに合わせて自学自習を支援できるよう、いつでもどこでも学ぶことができるコンテンツを豊富に用意している。「本文アニメーション」、「文法解説動画」、「基本ドリル」、「英和辞典」、「単語練習」、「発音図鑑」、「発音チェック」などを備え、一人一人の学びを支援するとともに、学習方法の指導や文法事項の整理を行っている。

3) 小学校の学びを生かし中学校につなげる。

小学校で育ててきた「自分のことを伝えたい」「相手のことを知りたい」という気持ちを継続しながら、中学校での学びへと円滑に接続することを目指している。小学校から中学校への学びの変化を円滑につなぐため、下記のような工夫がなされている。

- ① 1年生用教科書では、小学校で経験した「聞く」活動や、小学校で学んだ表現を用いた「やり

取り」から授業を開始する。

- ② Starterには、小学校で行ったゲーム性のある活動(activity)が用意されている。
- ③ 英語の「音」と「文字」を確認するページにおいても、小学校英語の内容を振り返ることができるようにしている。
- ④ 絵辞典「My Dictionary」には小学校で学習した語句の一部が含まれており、必要に応じて容易に参照できるよう工夫されている。
- ⑤ 小学校と同様に、ゴールとなる活動に向けてレッスンが構成されており、「聞く」「話す」活動を通して小学校での学びを振り返り、整理できるようになっている。
- ⑥ 中学校から本格的に始まる「読む」活動を丁寧に扱うとともに、「書く」活動にも積極的に取り組めるよう配慮されている。

4) 学びやすい構成

中学校卒業時の目標達成に向けて、学年・学期・単元ごとに段階的なゴールを設定し、順を追って一つ一つ達成していくことで、身に付いた力を実感できるよう、次のような構成となっている。

- ① 「とびら」で学びの見通しを立て、Part で新しい言語材料を学習する。Part 2 の後は、Goal Activity の内容に応じて構成が異なる。
- ② 一つ目は、Write/Speak の活動につなげる構成である。Side Story を読んで表現を学び、Small Talk Plus では単元末の活動に関連したテーマでやり取りを行う。
- ③ もう一つは、Read の活動につなげる構成である。Part で題材への興味・関心を高め、その流れで Goal Activity に取り組む。

5) Take Action では、リアルな場面を設定し、英語を使用する必然性のある活動を展開している。

主人公の一人である陸の姉・夏海がカナダのバンクーバーにホームステイをしているという設定のもと、実際の場면을想定しながら「聞く」「話す」「読む」活動を行う構成となっている。

6. 語彙の選定

CEFR-J (A1/A2)の語彙リスト、主要辞書のコーパス、中学校英語教科書、小学校英語教科書、学習者コーパスなどを分析して、掲載すべき語彙を精選し、小学校で学習したとみなす語彙(600語~700語)と中学で学習する語彙(1,600語~1,800語)を設定している。そのうち小学校では374語、そして中学校から622語の合計996語を発信語彙としている。

令和 7 年版中学校英語検定教科書(東京書籍及び三省堂)特徴分析

アレン玉井光江(青山学院大学)

本セクションでは、NEW HORIZON(東京書籍)と NEW CROWN(三省堂)の共通点および相違点について述べる。まず、共通点から検討する。以下の 6 点について整理した(NH=NEW HORIZON, NC=NEW CROWN)。

1. NEW HORIZON(東京書籍)と NEW CROWN(三省堂)の共通点

1) 小中連携を意識した教科書作り

中学校 1 年生の教科書は、大きく二つの構成に分かれており、夏休み前までは小学校で学習した英語内容の復習・整理を行っている。文法項目については、導入文とともに提示されるほか、各ユニット(またはレッスン)の末尾において文法用語を用いた説明がなされている。夏休み前までに復習される主な文法項目は、小学校で導入された語順、一般動詞、be 動詞、疑問詞、名詞などである。また、語彙については、小学校で導入された語と中学校で新たに扱う語が区別して示されている。

NH: 全体で 10 Unit あるが、そのうち Unit 0~Unit 4 までで小学校の活動を振り返り、聞いたり話したりした英語を読んだり書いたりするように指導している。ユニットの構成は、初めに【Enjoy Listening】として、目標言語項目が含まれた表現を聞く活動から入り、【Enjoy Communication】でスピーキング活動を行う。このタイトルは小学校の教科書でも使用されている。次に【Story】に移り、表現が含まれる文を読んだり書いたりする。文法項目については、ユニット中では【Key Sentence】という形で文法用語を使いながら明示的に説明され、ユニットの最後に【Grammar for Communication】としてまとめて詳しく取り扱われている。語彙については、【New Words】として初めての単語と【小学校の単語】として小学校で学習した単語が分けて表示されている。

NC: 全体で 9 Lesson あるが、そのうち Lesson 1~Lesson 4 が小学校での活動を反映している。初めに【聞いてみよう】で目標言語項目が含まれた表現を聞く活動を行い、次の【話してみよう】でスピーキング活動に移る。【Scene 2】から本文を読んだり書いたりする活動をする。文法項目については、レッスン中では【Check】で文法用語を使用して明示的に説明され、レッスンの最後では【Language Focus】としてまとめて詳しく取り扱われている。語彙については、【New Words】で新出単語を、そして【双葉アイコン】を使って小学校で導入された単語を表示している。

2) 言語活動を意識した教科書作り(夏休み以降)

生徒の身近な話題から外の世界の話題へ徐々に移行しながら、各ユニット(NH)、レッスン(NC)において受信技能から発信技能を育てるように構成されている。それぞれのユニットまたはレッスンのパートごと、またすべてが終了したときに、発信技能を高め、定着させる活動が用意されている。さらに複数のユニットおよびレッスンを終えたのちに、育てた能力を使っての総合的な言語活動が用意されている。

NH: ユニットの構成は【Preview】【Part 1】【Part 2】【Read and Think】で構成されており、それぞれに【Activity】が設けられ、受信活動から発信活動へと段階的に展開する構成となっている。まず、アニメを通して英語を使用する場面を学習し、Readingを通して新しい表現を学ぶとともに、文法事項を理解しながらそれらを活かして話したり書いたりする活動へとつなげている。次に、読む技能を身に付けながら内容について思考を深め、自分の意見を発信する

活動へと発展させる。ユニットの最後には、テーマに応じて複数の言語技能を統合した総合的な活動【Unit Activity】が用意されている。さらに、ユニットの枠を超えた二つの【Stage Activity】も設けられている。

NC: レッソンは【Part 1】【Part 2】【Part 3】【Goal Activity】で構成されている。NCにおいても、まずストーリーを聞いたり読んだりして文法事項を身に付け、その内容に関連して自分のことを発信する活動へとつなげている。最後に【Goal Activity】に取り組む構成となっている。

【Goal Activity】は二種類あり、学習内容を基に、内容や構成を意識して書いたり話したりする活動(Speak・Write)と、Readの活動とに分かれている。

3) 豊富で充実したコンテンツ

2社とも学習意欲を高める豊かなデジタルコンテンツを用意しており、個別最適な学習に向けて適切な教材を提供している。

4) 本文に追加して、英語を使うリアルな場面設定がされた活動

NH: もっと英語を使う目的で設けられている【Real Life English】や【Let's Read】、またユニットで学習したことを生かしてカナダの生徒と交流を試みる【Stage Activity】がある。

NC: 日常生活のリアルな場面で英語を活用するための【Take Action!】、【Listen/Talk/Read】、また物語を楽しむ【Reading Lesson】がある。

5) 学び方を学ぶ・評価の方法

NHでは【学び方コーナー】、NCでは【for Self-study】が設けられており、学習方法やその意義について説明されている。

6) 評価について

NH および NC ともに巻末に Can-Do リストが用意されており、中学3年間に何が英語でできるようになるかを5領域に分けて記述されている。さらに、各ユニット、レッスン、またほかの活動でどのような力がつき、何ができるようになったかを4段階で自己評価できるようになっている。

2. NEW HORIZON (東京書籍) と NEW CROWN (三省堂) の相違点

次に、両社の教科書の相違点について、以下の三点から比較する。

1) 小中の接続について

小学校の活動を反映した夏休み前までの構成において、ゲーム活動、音と文字との関係などについて異なる取り扱いがされている。

NH: 単語の decoding の力を定着させることを目的に【Sounds and Letters】を0~4まで、5回に分けて取り扱っている。導入されている順番は、アルファベットの名前と音の確認→短母音・長母音→ライムを使っての子音確認→ライムが異なる単語を比較して短母音の確認→子音二重字→final -e→母音二重字→R音化母音である。それに合わせて文を読む練習が導入されている。また、小中連携を目的とした最終的な活動として【夏休み特集】があり、そこでユニット1~4で学習したことを総復習している。

NC: 各レッスンの最後に【Goal Activity】が設けられており、複数の言語技能を統合した活動が用意さ

れている。すべての Goal Activity に書く活動が含まれており、生徒は身近な話題を中心に話したり、読んだりして書いている。また、Lesson 1 の前に【Starter】が設けられており、そこで、サイコロゲームやビンゴゲームを楽しみながら、表現の復習ができる。また、My Dictionary において小学校で習った語句や表現が部分的に絵で表されている。

2) 各ユニットまたはレッスンの構成について

全体的なユニットおよびレッスンの構成は似ているが、以下のような違いがみられる。

NH: 本文【Part 1】【Part 2】の後に【Read and Think】が設けられており、三回視点を変えて読解する「ラウンドリーディング」によって、確かな読解力の育成を図っている。

NC: 本文【Part 1】【Part 2】の後に【Part 3】が設けられている。【Side Story】では、会話や場面と言語の働きを意識したやり取りを練習し、【Small Talk Plus】では、やり取りを継続するためのコツを学ぶことで、会話を深める練習ができる構成となっている。

3) Can-Do リストとゴール設定について

NH, NC どちらの教科書も Can-Do リストを用意しているが、NH では、それぞれ学期末に相当する Stage 1, 2, 3 で取り扱っている 1 つずつの活動を通しての評価であり、NC では教科書にある 7 種類の活動に対する評価になっている。

また、NH ではユニットの最初に【GOAL】が明示され、それが【Unit Activity】つながることが示されている。一方 NC では、【Scene】として状況が説明され、【Goal Activity】の説明はあるが、具体的なゴール設定はされていない。

令和7年度版 *SUNSHINE English Course* (開隆堂) 教科書分析

黒川愛子 (帝塚山大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタル教材機能一覧

<https://www.kairyudo.co.jp/2024/digital.html>

◇デジタル教材体験版

https://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/DigitalText/R7sample/ei/en_s_trial/
(指導者用)

https://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/DigitalText/R7sample/ei/en_g_trial/
(学習者用)

https://www.kairyudo.co.jp/contents/02_chu/DigitalText/R7sample/ei/en_k_trial/
(学習者用+教材)

2. デジタル教科書(以下,DT)【HPより】

学習者用DTと指導者用DTでは異なり,指導者用DTには学習者用DTにない機能がある。

1) 学習者用DTの特徴

① 特別支援機能としては,文字や背景色の変更が可能・本文読み上げ機能・リフロー画面読み上げ機能・ルビ表示がある。

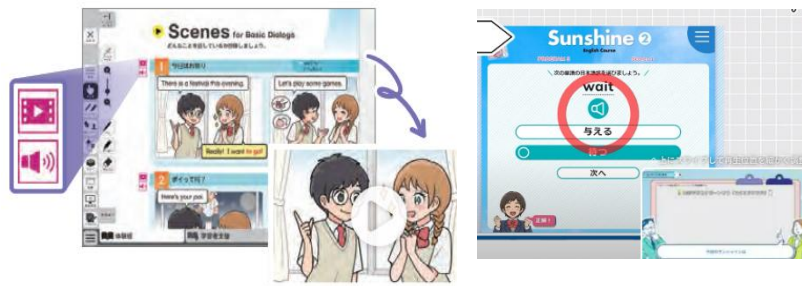


② 付箋にメモを書き込み,好きな場所に貼ることができる。ウェブサイトへのリンクを貼っておけば,すぐに調べたいサイトにアクセスができる。



③ 画面上のアイコンをタップすれば,教科書のQRコンテンツ利用が可能となる。

④「単語学習アプリ」が搭載されており,生徒は自身のタブレットで,好きな時に自身のペースで単語学習の取り組むことができる。



2) 指導者用DTの特徴

① 字幕付き動画がある

② 音声再生・文字表示が細かく選択できる。再生機能は通常再生・チャンク再生・役割再生・自由選択再生があり,間隔変更やスピード変更も可能。表示についても全文表示・役割表示・チャンク表示がある。

マスク機能もあり、単語・文・品詞・自由といろいろな機能が使える。

- ③ フラッシュカードが再生する語句や順番、数などを自由にカスタマイズ、保存が可能である。

3. 新誌面上の工夫

【ダイジェスト版】

https://krdkrk.jp/kwp_2025/wpcontent/themes/kairyudo_jhs/pdf/english_r7_digest.pdf

【内容解説資料】

https://krdkrk.jp/kwp_2025/wpcontent/themes/kairyudo_jhs/pdf/english_r7_inst.pdf

1) 令和7年度本の特徴

令和7年度版の特徴として3点が挙げられる。

① 基礎・基本が確実に定着

「知識・技能」を習得し、「思考力・判断力・表現」を育成する単元の流れになっている。マンガ形式で新出表現を楽しく学べる Scenes がある。場面とセットで表現が身に付くように工夫されている。単元最後は本文内容を振り返って、自分の思考を自分の言葉で伝える Review and Retell があり、本文題材に関連して自己表現を行う Action で締めくくられている。

② 3年間の到達目標が明確

バックワードデザインであり、指導計画が立てやすい構成になっている。教科書内に3年間の到達目標が明記されているため、生徒は常に最終ゴールが見え、見通しをもち学習に取り組めるよう工夫されている。3年間で8つの Project を達成していく Small Step の流れになっている。

③ 自ら学ぶ生徒の育成

動画等のバラエティ豊かなQRコンテンツが充実している。Scenes のマンガのアニメ、Our project の発表モデル動画、単語学習アプリがあり、生徒の知的好奇心をくすぐる coffee break や学習をサポートする巻末資料もある。

2) 令和3年度版からの改良ポイント

① ターゲット事項の明確化

ターゲット事項がさらにわかりやすくなっており、基礎徹底への支援がある。



② 思考を伴ったアウトプットへの段階的な支援

Retell のステップがさらに丁寧に要点確認、準備、Retell と段階的に取り組めるようになっている。教科書本文に何度も戻りつつ、生徒自身の思考をアウトプットにつなげる支援がある。

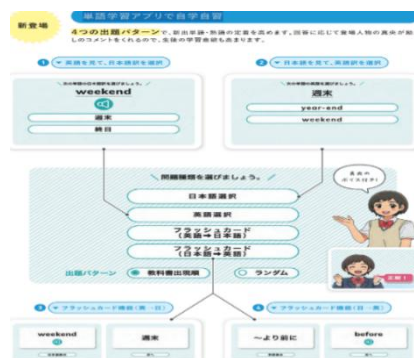


③ 登場人物を統一したストーリー性

令和2年度版では1つの单元の中で、コーナーごとに登場人物・題材が異なっていたが、令和7年度版では单元を通して登場人物をそろえ、「夏祭り」「屋台料理」のように題材で統一を行っている。

④ 単語学習アプリの新たな搭載

生徒は英語を見て和訳を選択する、日本語を見て英訳を選択する、フラッシュカード機能(音声付き)を用いての発音練習を行う等の学習を行うことができる。基礎の定着及び個別最適な学びへの支援と考えられる。



4. 小中接続に向けての観点からの工夫の特徴

- ① 小学校との接続ページ(Get Ready)があり、小学校の学習事項を全6時間で指導する構成になっており、中1ギャップが起こらないための工夫がなされている。
- ② 小学校での既習語彙がさらにわかりやすく掲載され、初出ページの記載がある。
- ③ 小学校外国語科教科書 *Junior Sunshine* の登場人物とともに学べる。
- ④ 基礎基本の徹底に向けての单元設定の工夫があり、とびらで学習の見直しを行い、Scenes ではマンガ形式で楽しく表現を学び(知識・技能)、Turning in で題材について考え、本文を学ぶ。Review and Retell では思考を深めるアウトプットへの支援があり、Action で自己表現を行っていく。全体を通して、生徒が小中のつながりを感じながら学べるための工夫と支援がある。

5. Sunshine の全体的な特徴

- ① 1年生の教科書にも2年生・3年生の目標が明記されており、生徒が最終ゴールへの見直しをもち学習に取り組むため支援であると考えられる。
- ② 中1の接続期では、小中接続を意識し、「書くこと」への支援が充実している。「読むこと」についても、語順や品詞について色分けする等の工夫がなされている。
- ③ 目標の達成度を児童が意識するよう工夫がなされている。
- ④ 「読むこと」について、目的意識をもって読むことに取り組む発問が本文最初にある。続いて推論発問が設定されており、深い読みや思考力の育成が意図されている。
- ⑤ 「書くこと」に関わっては、本文の題材に関連させた自己表現活動が設定され、Word Bank も掲載され、生徒の思考を促し、「書くこと」に取り組んでいくための支援がある。
- ⑥ 自ら学ぶ生徒の育成への工夫としては以下の5点が挙げられる。
 - (ア) 豊富なQRコンテンツから自身で選択して学べる
 - (イ) 発表モデル動画を見て練習できる
 - (ウ) 学習をサポートする巻末資料を参考に思考を深める自己表現に取り組める
 - (エ) Coffee Break で教科書題材に関連した内容に触れ、知的好奇心を高めることができる
 - (オ) 単語学習アプリを用いて自身で選択した学びを行うことができる
- ⑦ 文法項目のまとめページにおける解説がわかりやすく工夫されている。
- ⑧ 本文内に音読練習への意欲を高める工夫がある。

令和7年度版 ONE WORLD English Course (教育出版) 教科書分析

黒川愛子 (帝塚山大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタルコンテンツの動画説明 <https://www.videog.jp/player/kJRmRfEokOeB>

◇デジタル教材機能一覧

<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/eigo/d-book/index.html#page=23>

◇デジタル教材体験版

https://www.kyoikushuppan.co.jp/docs/r7chuu/digital/sample/KSK_SR7_EIGO_T/

(指導者用)

https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/digital/sample/KSK_SR7_EIGO_D/

(学習者用)

https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/digital/sample/KSK_SR7_EIGO_M/

(学習者用+教材)

2. デジタル教科書(以下, DT)

1) 指導者用 DT と学習者用 DT は内容が一部異なっており、「デジタルコンテンツのすみ分けとして、両者それぞれに何が搭載され、どこが異なっているかが明記されている。このため、指導者はその共通点や相違を活かしての指導が行えるようになっている。

https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/eigo/files/DL08_eigo.pdf



2) 学習者用 DT の機能

学習者用 DT の機能は、ア 教科書内掲載英文・語句の音声再生、イ 本文のカラオケ表示、ウ 再生速度の調整、エ 録音・再生、オ「学びリンク」へのアクセス カ フラッシュカード・新出語彙一覧の確認、キ 音声認識基本文型の定着コンテンツの7つがある。



3) 指導者用 DT を用いて可能となる活用の工夫

- ①何が指導者用 DT だけに入っているかが明確になっており、使いやすい。
- ②指導者 DT・学習者用 DT にあるワークシートが段階的に Small Step から思考判断表現につながっていくよう準備されており、段階的な指導が行える。
- ③指導者用 DT 内には解答を提示するコンテンツがあり、解答チェックをスムーズに行うことができる。
- ④指導者用 DT 内には文法説明 (Grammar コンテンツ) が簡単に行えるコンテンツが入っており、板書代わりに拡大表示して説明を行うことができる。

4) 学習者用 DT を用いて可能となる個別最適な学びへの支援

- ①「学びコンテンツ」から生徒は搭載されているコンテンツを自由に選択して何度も活用できる。
- ② 英文語彙に加え、ワークシート、「How to Use 文法解説動画」が活用可能である。
- ③ 指導者用 DT を用いての授業内での練習に加え、「Let's Use やり取り基本動画」も活用でき、学習者各自でやり取り及び発表の練習を行うことができる。
- ④ Key Sentence(s) コンテンツの英文の表示・非表示も選択でき、生徒は英文を見て言う・英文を見ずに言うという自身の状況に応じた基本文型の復習を行うことができる。音声認識機能により、生徒の発した言葉が文字化され、生徒自分の定着度や苦手な箇所を視覚的に把握することができる。スピーキング力向上に向けた大きな支援でもある。



3. 誌面上の工夫

【ダイジェスト版】

https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/eigo/files/DL10_eigo.pdf

【内容解説資料】

https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/r7chuu/eigo/files/DL01_eigo.pdf

1) ホームページ(以下, HP)上に強調されている特色

① スムーズな小・中接続

小学校英語の学びを活かす・広げ, 中学校英語の入り口は易くすることへの配慮が行われている。

② 「生きた英語」の習得として, 教科書から飛び出して, コミュニケーションで使う英語を意識すること, 学びの定着・応用がかなう教科書となるよう, 応用力を育成できる豊富な教材を用意している。

③ 未来をひらく多様な題材

日常生活から, 社会や将来へ考えを広げること, 好奇心を伸ばし, 思考や共感の力を高めることへの工夫がある。

④ 充実したデジタルコンテンツが搭載されている。

2) 本文を活かした自己の考えを伝えるアウトプット活動への工夫

令和3年度版よりも活動のヒントを増やし, 本文を参考に自己表現を書く Think & Try には「~の形を使うんだね」等のヒントや巻末に「活動例」が支援としてある。



3) 見通しをもった学習と振り返りへの支援

1年では中学卒業までの目標, 2・3年では1年間の目標を立ててから学習をスタートさせ, 各 Lesson の扉に Goal が示され, 見通しをもった学習への支援がある。各 Lesson 末では, Goal の達成度を振り返る形になっている。

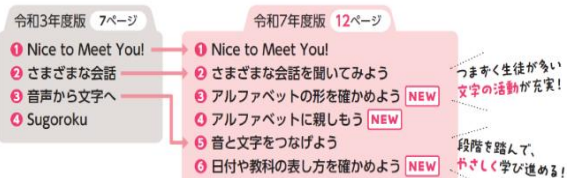


4. 小中接続に向けての観点からの工夫の特徴

1) 「小・中接続をしっかりと丁寧に」を打ち出し, Lesson 1に入る前の Spring Board が充実している。

Springboardの内容を充実

中学校での学習に向けた準備がしっかりできるように, Springboardの構成・ページ数を見直しました。



● Springboard 3



11pp. 10-11

● Springboard 4



11pp. 12-13

アルファベットの形と音をしっかり確認!

● Springboard 5



11pp. 14-15

音と文字をつなげる活動に取り組む!

● Springboard 6



11pp. 16-17

- 2) 小学校で学習した単語のうち、発信語彙として身につけてほしい語を「小学校の発信語」として掲載し、生徒が小中のつながりを実感できるための支援がある。



- 3) 中1最初の単元での「読むこと」への負担感の軽減を意識し文字数を減らしている。



5. ONE WORLDの全体的な特徴

- ① イラスト、動画等の豊富な視覚教材による小中ギャップへの配慮があり、Let's Talk で小学校での既習表現を用いた「話すこと[やり取り]」の活動があり、小中接続への工夫がある。
- ② 指導者用 DT を用いた音声重視の授業、学習者用 DT を用いた個別最適な学習への支援の工夫があり、音声認識機能による学習者のスピーキング力向上への工夫、単元外の Activities Plus には即興的なやり取りの力を伸ばす工夫がある。
- ③ 「聞くこと」に関わって文字なしで聞く活動から始まり、イラストからのヒントや選択式等の平易な「聞くこと」から「書くこと」に進めていく段階的な工夫がある。
- ④ Think & Try や Let's Try において、生徒の思考を促す工夫が観察され、「聞くこと」から「話すこと」「読むこと」「書くこと」につなげる統合的な活動への工夫がある。
- ⑤ Activities Plus が4カ所あり、既習言語材料を用いた Q&A が掲載され、応答例や Word Bank があり、思考を伴った「話すこと[やり取り]」を積み重ねる設計で、即興的なスピーキング力の育成への支援がある。
- ⑥ 「読むこと」について、Check, Reading Point, Read & Try! 等において、平易な発問から、徐々に内容理解を促す工夫が観察される。
- ⑦ SDGs 関連、環境・エネルギー問題、異文化理解、進路選択、ホームステイ等、多様で豊富な題材への工夫がある。

令和 7 年版中学校英語検定教科書（開隆堂及び教育出版）特徴分析

黒川愛子（帝塚山大学）

このセクションでは *SUNSHINE English Course 1*（開隆堂）と *ONE WORLD English Course 1*（教育出版）の共通点と相違点について述べたい。以下、*SUNSHINE English Course 1* を *SE*、*ONE WORLD English Course 1* を *OW* と示す。

1. *SE* と *OW* の共通点

1) 小中接続への工夫に関わって

① 小学校との接続ページの設定

SE には Get Ready があり、*OW* には Spring Board があり、ともに小学校での学習事項を復習するための工夫がある。

② 小学校での既習語彙の明示

SE は令和 2 年度版と比較して、小学校での既習語彙をさらにわかりやすく掲載し、初出ページを記載する工夫を行っている。*OW* は小学校で学習した語彙のうち、発信語彙として身に付けてほしい語を「発信語彙」として明記している。生徒が小中の学びのつながりを実感できるようにするための支援と考えられる。

③ 豊富な視覚教材及びデジタルコンテンツの工夫

SE、*OW* ともに令和 2 年度版と比較して、更に生徒の興味関心を高めるための豊富な視覚教材を増やしている。

④ 学習者用デジタル教科書（以下、学習者用 DT）の機能の向上

SE、*OW* ともに学習者用 DT の機能が更に使いやすくなり、個別最適な学びへの支援への工夫が顕著に表れている。

⑤ 指導者用デジタル教科書（以下、指導者用 DT）の効果的な活用

SE、*OW* ともに指導者用 DT には、学習者用 DT にはない機能が搭載されており、授業で、指導者用 DT だけにある機能を用いて音声重視の指導を行うことができる。

⑥ 教科書全体における小中接続への意識

① で述べた接続ページのみならず、*SE*、*OW* ともに令和 3 年度版以上に、教科書全体に、小学校の学びを引き継ごうとする意図が観察される。

2) 小学校での学びを引き継いでの基礎の定着に向けての単元設計の工夫

SE、*OW* ともに、小学校での学びを引き継ぎながら、基礎基本の徹底に向けての単元設定の工夫がある。

SE: とびらで学習の見直しを行い、Scenes（マンガ形式）で楽しく表現を学び（知識・技能）、Turning in で題材について考え、本文を学ぶ。Review and Retell では思考を深めるアウトプットへの支援があり、Action で自己表現を行っていく。

OW: Lesson の扉ページに各 Lesson の Goal が「内容理解」と「活動」に分けて明示され、Part 1, 2 の本文の内容理解後に Think & Try! で本文を利用したのやり取りに取り組み、Part 3 最後の Read & Try! では、Part 3 の長めの本文を読んで行う概要・要点整理や本文から派生した活動に取り組む。Task で本文の振り返りや、「話す・書く」活動を通じて、自分の考えなどをクラスメートと発

表・共有する活動を行う。Grammar では Lesson で学んだ文法事項を視覚的に学ぶ。

3) 生徒の思考を促す自己表現活動を増やすための工夫

SE, OWともに、アウトプットにつなげていく段階で、生徒の思考を促そうとする工夫が観察される。

4) 生徒の 4 技能 5 領域向上に向けた統合的な活動を増やすための工夫

SE, OWともに、「聞くこと」から始め、「読むこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」へと、平易な活動から段階的に進め、最終的に統合的な活動につなげていこうとする工夫が観察される。令和 3 年度版よりも、その工夫は更に高まっていると考えられる。

2. SEと OWの相違点

SE, OWともに、小学校での学びを引き継ぎながら、生徒の 4 技能 5 領域の向上に向けての工夫が観察される。4 技能 5 領域の各領域の向上に関わる工夫については、その量や方法に異なりはある。特に、「書くこと」「読むこと」に関わる生徒の負荷をいかに、大きくせずに進めるかに関わっては、各教科書内の方法は異なっていると考えられる。

本稿では、SE, OW各社の特徴という視点で述べたい。

1) 各教科書本文(以下、本文)の最初の発問に関わって

SE: 「聞くこと」「読むこと」に関わってまとめて日本語の発問が1つ

OW: 「聞くこと」は Check に発問が1つ, 「読むこと」は Reading point が1つ記載されている。

2) 各本文に関わって

SE: 各本文下に語数が書かれている。

OW: 語数は書かれていない。

3) 「聞くこと」に関わって

SE: 各単元最初の Scenes で簡単な対話を聞き、絵を選ぶ等の平易な活動がある。各パート内は本文以外の「聞くこと」に特化した箇所はないが、平易な「聞くこと」から本文につなげようとする工夫がある。

OW: 各パートに Let's Listen があり、英文を聞いて、それを要約する英文にするための適語補充を行う活動がある。教科書内に Tips for Listening が 4 カ所あり、聞くことに取り組み、聞き取りのコツが記載されている。

4) 「話すこと[やり取り]」に関わって

SE: 単元最初の Speak & Write に対話例を参考に取る平易な「やり取り」があり、その「やり取り」から、わかったことを記入例を参考に、「書くこと」につなげる活動がある。また、自分が話した内容を「書くこと」の活動もある。

OW: 本文横の Think & Try に会話文があり、下線部に自由にことばを入れてやり取りする活動がある。「例文を参考にしての読むことからやり取りにつなげる工夫」で考えられる。教科書内に Tips for Speaking が 4 カ所あり、平易な Q&A の練習を蓄積する工夫がある。また、Useful Expressions が 2 カ所あり、トピックに応じたモデルのやり取りを読み、それを参考に自分たちでやり取りを行う。

5) 「話すこと[発表]」に関わって

SE: Our Project でモデル発表を「聞くこと」から、モデルスピーチ原稿を「読むこと」に進み、自分で伝えたい内容の構想を練り、マッピングを行い、発表原稿を書き、それを発表するという活動の流れになっている。伝えたい内容の構成を生徒が考えていくための支援や思考の促しへの工夫と考えられ、「話すこと[発表]」への支援が豊かであると考えられる。

OW: Project でモデル発表を「聞くこと」からスタートし、自身が伝えたい内容を原稿として「書くこと」に取り組み、そこから「話すこと[発表]」につなげている。本文の学習後に、Review で生徒がセリフを自分で出す活動が、思考を促し、「話すこと」につなげている工夫であると考えられる。

6) 「書くこと」に関わって

SE: 本文の後に Review があり、絵や写真を使って本文の内容を振り返り、英語を書き入れる活動設計がある。「読むこと」から「書くこと」へとつなげている工夫が観察される。

OW: 紙面教科書の QR コードから「学びリンク」につながり、ワークシートを見ることができる。単語の意味が書かれており、英語を聞いて英単語を書くシートになっている。また、当該単元の本文を全て学習した後に Task があり、学習した本文の内容を振り返り、与えられた語彙から英文を書く活動がある。「読むこと」から「書くこと」につなげている。「書くこと」への支援が豊富であると考えられる。

7) 「読むこと」に関わって

SE: 単元最初の Speak & Write では「やり取り」をする前に対話文を読む活動がある。Power Up では対話文を「読むこと」から音読し、話すこと[やり取り]につなげる工夫がある。巻末に Reading 教材はないが、その分、本文や各コーナーでの英文を多くしていると考えられる。

OW: 本文横の Read & Try! で本文の概要を日本語で書かれた箇所に適語補充する活動がある。また、Activities Plus で「話すこと[やり取り]」に用いるQ&Aが豊富に紹介されている。「読むこと」から「話すこと[やり取り]」につなげていると考えられる。巻末の Reading 教材は3つある。

8) ゴール及び、振り返りに関わって

SE: 各単元最初に各パートの Goal が記載されており、巻末に「できるようになったことリスト」がある。聞いてわかる・読んでわかる・やり取りできる・発表できる・書けるの 4 技能 5 領域を意識した振り返りで、生徒は 3 段階で自己評価を行う。

OW: 各単元最初に Goal が1つ記載され、各単元の最後に「ふり返ろう」があり、「内容理解」と「活動」の 2 項目を 4 段階で自己評価する形式である。

SE, *OW*ともに、多様な工夫と特徴が観察される。それらを中学校教員が把握し、目の前の生徒の状況を観察しつつ、指導の中で活かしていくことが小中接続に向けて最も重要なことであると考えられる。

令和7年度版 *BLUE SKY English Course* (啓林館) 教科書分析

加藤拓由 (岐阜聖徳学園大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタル教材機能一覧

<https://digi-keirin.com/r7-dtext/jeigo.html>

◇デジタル教材体験版

https://p01.cloud.cho-textbook.jp/?organization_code=keirin-taiken

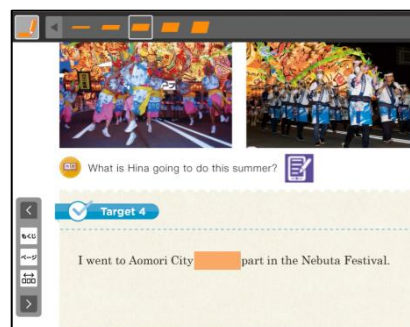
英語体験版アカウント ID : jeigo2024 PW : trial-jeigo

2. デジタル教科書活用の工夫

1) 個別最適・協働的な学びのための機能

ア) 暗記ペン

家庭学習や、個別学習などの際に使用できる学習支援ツール。暗記したい部分を暗記ペンでマスキングし、重要事項の暗唱などに活用できる。マスキングの濃度もタップすることで変更が出来るので、薄く半透明にして、生徒が自学自習する際に活用できる。



イ) 越しおり

個人が、タブレットに書き込みをしたページに「越しおり」を付けて、それを仲間を送ることで、書き込みの内容を共有することができる。互いの考えを紹介し合うなど協働的な学習を行う際のツールが充実している。



2) 単元末の学習の振り返り機能

各ユニットの単元末に振り返り機能が搭載されている。Input、Output の視点から4段階で学習状況を自己省察し、その下の空欄には文章で、自分の学びについて記述するようになっている。また、指導者用デジタル教科書には、生徒の振り返りの状況が集約されるので、個別指導などに活用することができる。



3. 新誌面上の工夫

【ダイジェスト版】

https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/chu_r7/english/file/guide_book_digest.pdf

【内容解説資料】

https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/chu_r7/english/file/guide_book.pdf

1) 小学校での既習事項を踏まえた**文法配列**

中1の教科書は、小学校外国語で身に付けた「音声で十分に慣れ親しむ」という学び方を重視した文法配列になっている。小学校の既習事項を想起させ、生徒が実際に言語活動を行いながら、文法事項の知識・理解を進めるよう工夫されている。


Unit 1 Let's Be Friends!	① I'm / I'm not ② I like / I don't like ③ I can / I can't
Unit 2 Club Activities	① Are you ...? ② Do you ...? ③ Can you ...?
Unit 3 Hello, New Friend.	① How many ...? ② What sport do you ...? ③ What do you ...?
Unit 4 My Brother in Canada	① This is / He is / He isn't ② Is that ...? / Who's ...? ③ What's ...?
Unit 5 A Fascinating Island in Hawaii	① Where're you ...? / Where do you ...? ② What time is ...? / What time do you ...? ③ When's ...? / When do you ...?
Unit 8 Jin in London	① like ...ing ※Unit 8までに本文やスクリプトで使用したが、 ② want to / My dream is to play 文法的に整理するのはUnit 8
Unit 9 Winter Vacation in New York	① I played / I had ② Did you ...? ③ She was / Was she ...?

2) Let's Listen、Listen & Think など、「**聞くこと**」の活動が豊富に用意されている

学習指導要領に示された、(1)必要な情報を聞く、(2)要点を聞く、(3)概要を聞く、といった、様々な聞き方の指導に対応できるよう、「聞くこと」の課題が多様に示され、生徒は様々な学習方略を身に付けられる。

例えば、聞き取りの足場となるよう Before Listening が配置されたり、写真などの視覚補助が豊富に示されたりしている。聞いた内容から、リテリングにつなげる工夫もみられる。

目的・場面・状況に沿った2つの英文を聞いて、それぞれの必要な情報や要点を聞き取ります。3学年を通して、日常的な場面の対話や社会的な話題の聞き取りに取り組みます。



英文を聞く前に、**Before Listening**で語彙・表現を補充したり、スキーマを活性化させたりします。

最後は聞き取った内容を整理して、リテリングします。

2年 p. 43

③ 「即興的」に話す力を育成する

学習指導要領の「話すこと [発表]」では、簡単な語句や文を用いて、即興で話すことを目標としている。

例えば、最初の Step 1 では、まず「聞くこと」の学習に取り組ませる。この Listening でメモしたことは、次の Step 2 で、「話すこと [発表]」の活動で、自分が話したい内容のメモをするときのモデルになる。

さらに Step 3 では、Step 2 でメモした内容をもとに、原稿を作らず、即興で話をする。この活動は、その後、キーワードを頼りに、本文内容をリテリングする際の基礎的な力となる。

Ms. Hall is YOSAKOI Soran Festivalについて話しています。
 Step 1 Ms. Hall の話を聞いて、①～⑤にあてはまる語句を () に書きましょう。

祭りの名前	YOSAKOI Soran Festival
開催場所	(①) ()
開催時期	(②) ()
特色 (いつから始まったか 何をするか、どんな意味があるかなど)	<ul style="list-style-type: none"> started in (③) () a combination of Kochi's Yosakoi Festival and Hokkaido's Soran Bushi. Two rules to (④) () naruko in their hands to use a phrase from the Soran Bushi in their song
自分の考え	It's a lot of (⑤) () for the audience to see the powerful performances of the dancers in colorful costumes.

※ naruko (鳴子) …もとは田畑につるし、音で鳥を追い払う道具でしたが、高知のよさこいで楽器として使われるようになりました。

Step 2 あなたは、自分が好きな祭りや地域で開催されている祭りについて紹介することになりました。Step 1 を参考に、紹介したい祭りの内容を表にメモしましょう。

祭りの名前	
開催場所	
開催時期	
特色 (いつから始まったか 何をするか、どんな意味があるかなど)	
自分の考え	

4) 段階感のある「書くこと」の言語活動

「書くこと」の活動でも、Small Step を意識した活動が用意されている。

Let's Write の学習においても、「目的や場面、状況」を意識した活動設計になっている。単に和文英訳のような練習活動を行うのではなく、「何のために書くのか」「誰のために書くのか」という、言語活動を通した指導が設定されている。

左の例の Step 1 では、英文メールの文章構成を明示している。学習者は、このメールの文を参考に、Step 2 で「紹介すること」と「説明」をメモする。そして、Step 3 でメモを参考にしながら、メール文を書き、互いに読みあうという段階を踏んで活動を行う。

Let's Write 日本の学校生活を紹介するメールを書こう

【電子メール】
 目標：自分たちの学校生活を紹介するメールを書くことができる。

Scene オーストラリアの姉妹校の生徒の Jack から「日本の学校生活について教えてほしい」というメールが届きました。あなたは、どんなことを紹介しますか。

Step 1 Sho が書いた返信メールを読みましょう。Sho は何について紹介していますか。

送 信 者	From: Sho
受 信 者	To: Jack
タイトル	Subject: Cleaning time at school
始めのあいさつ	Dear Jack,
メールのお礼	Thank you for your e-mail.
紹介することとその説明	I can tell you about our cleaning time. In Japan, students clean classrooms after classes. We sweep the floor, erase the blackboard, wipe the desks, and take out the trash. We work together. Our school building is old, but we use it with care.
終わりのあいさつ	Sincerely,
署名	Sho

Step 2 あなたなら、Jack からのメールにどのように返信しますか。学校生活の何について紹介するか、下の表にメモしましょう。

紹介すること (話題)	
説明	

Step 3 ① Step 2 をもとに、メールを書きましょう。
 ② ペアになり、お互いのメールを読み、気づいたことを伝え合きましょう。

Tool Box

【説明の書き出し】
 *I can tell you about -
 *I can explain about -
 【終わりのあいさつ】
 *Sincerely, *Kind regards, *Take care.

Words cleaning dear thank you for e-mail sweep erase blackboard wipe take out trash work building care sincerely explain regard(s) Kind regards Take care. Words classroom(s) out

5) 英語の学び方 (学習方略) を明示している

●英語の学び方 内容一覧

学年	学び方	タイトル	観点
1年	1	英和辞典の引き方	語彙
	2	英語を音読するコツ	音声
2年	1	英語を聞き取るコツ	音声
	2	英語でやり取りするときのコツ	表現
	3	英語力を鍛えるコツ	音声
3年	1	単語を覚えるコツ	語彙
	2	英文を読むコツ	語彙・表現
	3	英文を書くコツ	表現

各学年とも、「英語の学び方」を具体的に紹介している。生徒が「自己調整力」を発揮し、個別学習や家庭学習に取り組む上でも、学習者自身が「学び方」を知っていることは非常に重要である。上記の例は、様々な音読の方法について示している。これらのページを、教師と生徒がともに見て、効果的な英語の「学び方」を一緒に学ぶことこそ、主体的に学ぶ態度を育み、生涯にわたって学び続ける学習者を育成する上で重要な要素となる。

【Blue Skyの総評】

- ① 中1の接続期では、小中連携を意識し「聞くこと」の指導が充実している。
- ② 文法指導でも、小学校の学びを意識した指導配列になっている。
- ③ 各領域の活動では、Small Stepを意識した段階感のある活動設計になっている。
- ④ Speakingでは、原稿に頼らず「即興的」に英語を話すことを意識している。
- ⑤ 身近な話題から社会的な話題へと、発展的な「学びの広がり」を意識している。
- ⑥ 学習者用デジタル教材に、「個別最適・協働的な学び」のための工夫がみられる。
- ⑦ SDGs、環境問題、人権、平和など、社会的で深いテーマも扱っている。

【Blue Sky活用上の留意点】

- ◆各単元でのCan Do評価を取り入れているが、具体的な指導場面でCan Do評価を学習改善・指導改善に、どのように活かすか、指導者が工夫する必要がある。
- ◆ICT活用の例なども示されているが、従来のデジタル活用の枠内に収まっている。デジタル活用能力の育成を意識した、より効果的な指導の方法を研究する必要がある。

令和7年度版 *Here We Go! English Course* (光村図書) 教科書分析

加藤拓由 (岐阜聖徳学園大学)

1. デジタル教科書の基本情報

◇デジタル教材機能一覧

https://dt.mitsumura-tosho.co.jp/products_c/eigo/

◇デジタル教材体験版

<https://manaviewer.jp/Bookshelf>

英語体験版アカウント 学校ID: 70038

ユーザーID: 2024mitsu パスワード: 2024demo

2. デジタル教科書活用の工夫

1) 家庭学習や個別練習を支援するための機能

ア) 個別学習の学習支援ツール

家庭学習や、個別学習などの際に使用できる学習支援ツールが標準搭載されている。音読暗記用の付箋機能や、アクセント・音調表示、日本語訳サポートなども、選択できる。また、教科書本文にはない、Extra Story なども見ることができ、発展的な学習もできる。



イ) アフレコできる実写ドラマ

Here We Go! の特色の一つである、導入ストーリーのドラマ性を生かした、実写ドラマが見られる。人物別の音声 On, Off や、字幕の On, Off もでき、登場人物になりきって、その場にいるような気持で、セリフのアフレコができるようになっている。



3) パフォーマンステストのサポート機能

東京都が実施している、中学校英語スピーキングテスト、ESAT-J のような、パフォーマンステストにも対応できるよう、デジタル教科書の QR コンテンツの中に、Speaking Test が搭載されている。学期末のまとめとなる You Can Do It! で、生徒はデジタル教科書の指示に従い、テスト問題を聞いて、タブレットなどに自分の発話を録音する。教師は、それを採点し、評価や指導改善を行う際などに活用することができる。



3. 新誌面上の工夫

【観点別 内容と特色】

<https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c-eigo/tangen>

【教科書解説資料】

<https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/c-eigo/henshu>

1) ストーリー仕立ての内容構成

*Here We Go!*は、3年間を通して教科書の内容がストーリー仕立てになっている。メイン・キャラクターの4人は、3年間を通して様々な場面で成長していく、生徒にとって等身大の存在である。これにより、生徒が英語の内容を自分事として考えたり、発話したりできる。さらに、5ラウンドシステムによる学習がしやすい構成になっている。



2) リアルな状況設定のもと、思考力・判断力・表現力を磨く Goal 活動が設定されている

ストーリー性があることにより、生徒が自分事として教科書の内容を捉えることができる。これにより、教科書の Goal 活動で、リアルな目的や場面、状況設定ができるので、思考力・判断力・表現力を育成することが容易になる。左は、淡い恋愛ストーリーが伏線になっており、Eri が書いた手紙を読み、その返事を書くという、中学生ならではの課題になっている。

Goal 手紙の返事を書こう

Hajin が Eri からもらったチョコレートには、手紙が付いていました。Hajin になったつもりで手紙を読み、Eri に返事を書きましょう。

Hajin になったつもりで、Eri が Hajin に宛てて書いた手紙を読みましょう。

Dear Hajin,

I would like to apologize to you for my bad attitude toward you. I know that you practiced hard, but I felt pressure to improve our play. I want you to know my feelings because you are my best friend.

To show my thanks, I made some chocolate. I am not good at cooking, but I did my best. I hope you'll like it.

I hope we can be good friends forever.

Your friend,
Eri

3) **Can-Do リスト**が効果的に設定され、3年間を通した学びを鳥瞰することができる

年間を通した Can-Do リスト形式の領域別学習到達目標が設定されている。また、それぞれの到達目標がどのようにつながり、「年間を通してどのようなことができるようになるのか」を、左図のように鳥瞰し見通すことができる。

さらに、領域別学習到達目標では、それぞれの Unit に「重点化領域」が設定されており、指導者が授業を行う際、単元ごとに重点を絞った指導や評価を計画することができる。これにより、複数単元のまとめりや年間を通じて、バランスよく5つの領域の力を育てることが可能となり、指導者の評価業務の負担も軽減されることが期待される。



4) ていねいな Step を踏んだ「書くこと」の言語活動

「書くこと」の活動でも、丁寧な Small Step を踏んだ活動設計になっている。英文を書く上でのパラグラフを意識した Writing の構成だけでなく、思考スキルと関連付けたり、発展的な追加表現を例示したりして、学力の差が表れやすい「書くこと」の学習で、すべての生徒が無理なく、創造的なライティングに取り組めるよう工夫が用意されている。

2年 ボランティアの紹介記事を書く活動
[事実と意見を分けて書く]

Write

あなたが紹介したいボランティア活動について調べて、文章にまとめましょう。➡ Active Words (p. 135)

1

伝える内容を整理しよう

紹介したいボランティア活動について調べた後、図表を使って情報を整理し、文章の構成を考えましょう。

導入 ・トピック 〈例〉planting trees

内容 ・興味を持った理由やきっかけ ・活動の紹介 など
〈例〉I went to the Green Festival in May.

まとめ

思考の地図 関係づける(巻末⑤)

事実や自分の考えの伝え方

- 調べたことを伝える
 - ・ According to the website,
 - ・ The website says [shows]
- 自分の考えや感想を伝える
 - ・ I like to / I want to
 - ・ I think [feel] / I'm sure
 - ・ We should / It's important to
 - ・ It looks [sounds]

2年 Unit 6 Goal(p. 79)

5) 英語の学び方 (学習方略) を明示している



各学年とも、「英語の学び方」を具体的に紹介している。自己調整力を働かせながら、個別学習や家庭学習を効果的に行う上でも、学習者自身が「学び方」を知っていることは非常に重要である。上記の例は、4技能別に効果的な学習方法や思考ツールの活用方法について示している。これらのページを定期的に振り返って、教師が生徒と一緒に学習方略を確認しながら「学び方」を学ぶことは、よい学び手を育てる上で欠かせない。

【Here We Go! の総評】

- ① 3年間を通じて、導入ストーリーに物語性があり、生徒が内容に没入しやすい。
- ② 1年生の導入期は、小学校で学んだ場面を想起させた音声中心の活動になっている。
- ③ Story Retelling や Let's Talk のような「帯活動」で英語を話す基礎力をつける。
- ④ Extra Story や You're the Writer のような、少し背伸びした発展的な学習がある。
- ⑤ 身近な話題（1年）地域や日本（2年）社会的な話題（3年）と学びの広がりがある。
- ⑥ 世界の子供たちの生活や、文化、考え方などに触れ、豊かな人間性の育成を目指す。
- ⑦ SDGs、他教科、人権、平和など、生徒の深い思考を促す社会的な題材も扱っている。

【Here We Go! 活用上の留意点】

- ◆上記の総評で述べたように、生徒の確かな英語力を育成するための、多様な教材が用意されているが、生徒の実態に合わせて、教材の取り扱いを調整する必要がある。
- ◆ストーリー性のある本文なので、5 ラウンドシステムや、リテリングなどの活動はしやすい。一方、それらの指導ができるようにするためには、指導者が経験を積む必要がある。

令和7年度版中学校英語検定教科書に見られる小中接続の工夫

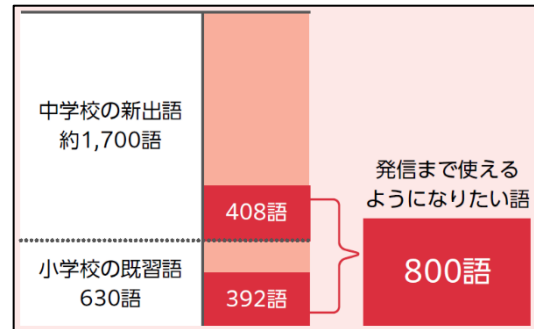
加藤拓由（岐阜聖徳学園大学）

複数の教科書に共通して見られる小中連携の工夫

1) 語彙導入の工夫

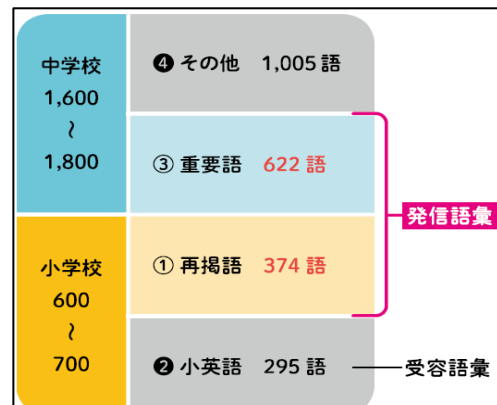
中学校での、語彙の大幅な増加に対応できるよう、各社とも、導入期の語彙導入には様々な工夫をこらし、学習者が過度な負担を感じないような工夫をしている。

例えば、東京書籍の *New Horizon* では、中学校1年生の夏休みまでの単元で表出する単語のうち、84%が小学校で習った単語が中心となっている。また、図1のように、小学校既習語から392語、中学校新出語から408語を「発信まで使えるようにしたい語」と設定し、中学校の教科書で繰り返し登場させ、定着できるようにしている。



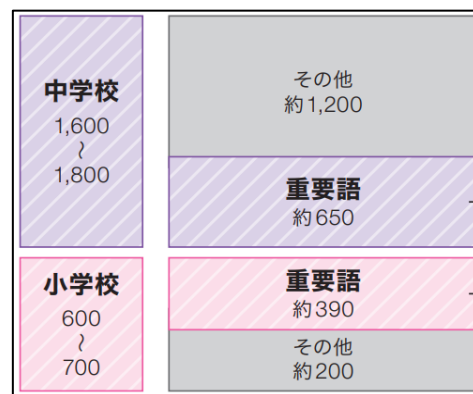
【図1】東京書籍 語彙選定の工夫

三省堂の *NEW CROWN* でも、CEFR-Jなどの語彙リストや、各種コーパスを分析し、中学校の教科書に掲載すべき語彙を選定している。学習指導要領では、語彙について、生徒の発達段階に応じて、受容レベルと語彙と、発信レベルの語彙を分けて指導することとしていることから、小中それぞれの語彙に、発信語彙コーパスをかけ、右の図2のように、発信語彙を設定している。



【図2】三省堂 語彙の選定

また、啓林館の *BLUE SKY* では、中学生が聞いたり、読んだりして意味を理解でき、話したり書いたりして表現できるようにするための語を「重要語」と設定している。学習指導要領では、「生徒が言語活動を行う際に、話したり、書いたりしたい語彙は、生徒によって異なる可能性がある」と記述されているため、*BLUE SKY* では「受信語彙」と「発信語彙」を一律に規定せず「重要語」として扱っている。【図3】



【図3】啓林館 語彙の選定

このように、扱う語彙数やその定義もさまざまであるが、各社とも、受容語彙と発信語彙を整理して精選して提示し、学習者の負担に配慮するなど、語彙学習における小中連携のための工夫がみられる。

2) 音韻認識・文字指導の工夫

中学校段階での「読み・書き」学習にスムーズにつながるために、小学校で学習した「音・文字指導」を引き継ぎ、中学校の導入期に音韻認識を高めるための指導を設定している。

図4は、光村図書の *Here We Go!*の Sounds & Letters である。中学校1年生の巻頭に配置されており、授業冒頭の帯活動などで扱うと、7月上旬には、単語や文を読むための基礎力が付くように設計されている。

教育出版の *ONE WORLD* は、中学校での導入期で文字の活動につまずく生徒が多いことから「読み書き」学習を大切に扱い、Springboard の構成を充実させている。図5では語の真ん中にある音を聞いて、文字と一致させる活動である。アルファベットの形や音の活動から、段階を踏んで、誰もが安心して学べるよう、ていねいな活動が設計されている。

開隆堂の *Sunshine* の巻末資料(図6)には、英語のつづりと発音。また、それらの発音に該当する単語がまとめて掲載されている。

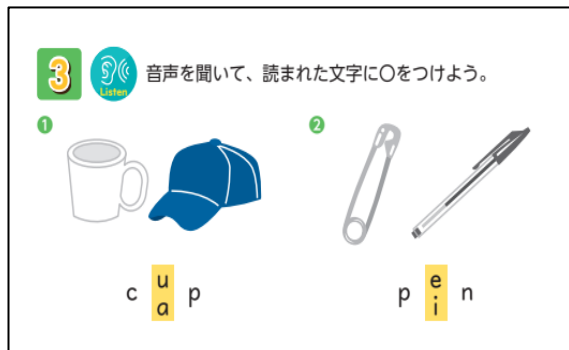
中学校の学習指導要領には発音とつづりの対応関係については、「ある程度単語の綴りとその発音になじんだところで、単純なものから徐々に指導していくこと」と記述されている。この巻末資料で、単語のつづりと発音の関係を、いくつかまとめて整理することで、フォニックスについて帰納的に理解するきっかけになるのではないかと考える。また、「単語補充欄」には、生徒が自分で単語を追記できるようになっているため、発音とつづりの関係について、教科書以外で出会った単語を記録しておくこともできる。

また、教科書本体ではないが、東京書籍が提供する無料のアプリ「NEW HORIZON 魔法の読み書きアプリ」では、英語が苦手な生徒も、自分でゲームを進めながら、楽しく単語を定着させることができる。

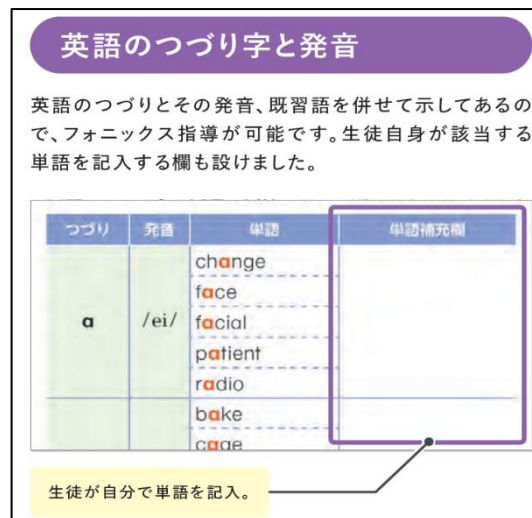
<https://nh21.tokyo-shoseki.co.jp/mapp>



【図4】光村図書 Sounds and Letters



【図5】教育出版 Springboard 5



【図6】開隆堂 巻末資料

3) 言語活動でつなぐ

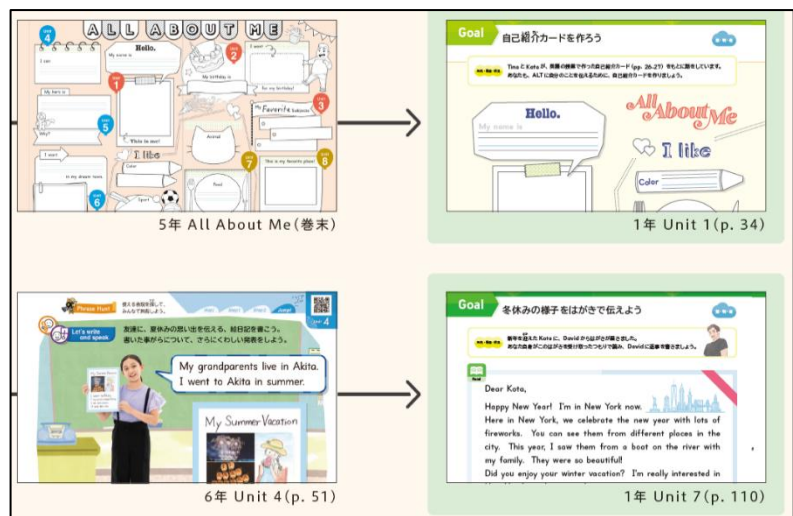
各社の教科書で、中学校1年生の秋ごろまでに学習する單元には、小学校外国語科で学習した表現を繰り返し活用し、小学校での言語活動を想起させながら、中学校の指導内容にスムーズに接続できるよう單元構成の工夫が見られる。

右の表は、三省堂の *New Crown* の單元配列と小学校教科との対照表である。中学校の導入期の Starter や、Unit 4 までの單元計画には、小学校で学習した言語活動が数多く配置され、小学校での既習表現を繰り返し使用しながら、中学校の言語活動へとスムーズにつなげるための工夫が見られる。

單元	タイトル	主な言語材料		令和6年度版 小学校教科書の主な單元						
		表現	語句	三省	東書	光村	開隆	教出	啓林	
Starter 1	好きなものを教えて!	What ... do you like? / I like ... / How about you?	教科/食べ物/スポーツ/動物/色など	⑤-1, 2	⑤-1	⑥-1, 3	⑤-1, 3	⑤-1	⑤-1	
Starter 2	好きなキャラクターは?	Who is your favorite ...? / I like ... / How about you?	スポーツ/性格・特徴など	⑤-3, 4, 5	⑤-4, 8	⑤-5	⑥-1	⑤-4, 8	⑤-9	
Starter 3	ランキングを作ろう!	What do you do after school? / What time do you usually get up? / I have ... on Mondays. など	余暇の過ごし方/曜日/時刻など	⑤-2, Try	⑥-2	⑥-3	⑤-3	⑤-3, 4	⑤-1, 3	
Starter 4	どこに行ってみたい?	Where do you want to go? / I want to go to ...	国・地域	⑤-7	⑤-7	⑥-6	⑥-5	⑤-6	⑤-8	
Lesson 1	About Me	be 動詞・一般動詞 (1・2人物) / What do you do on weekends? / What ... do you like?	部活動・習い事/余暇の過ごし方/頻度など	⑤-2	⑥-1	⑥-1	⑥-1	⑤-1	⑤-Pre	
Words & Sounds 1	何匹見える?	How many ...? / I see two pandas.	数/動物	⑤英語で 書いてみよう		⑥Let's Start2	⑥Let's Review			
Lesson 2	My Hero	助動詞 can / She ... / He ...	性格・特徴/ 余暇の過ごし方・遊びなど	⑤-3, 4, 5	⑤-3, 4, 8	⑤-4, 5	⑥-1	⑤-4, 8	⑤-5, 9	
Words & Sounds 2	誕生日はいつ?	When is ...? / My birthday is ...	月/日付	⑤-1	⑤-2	⑥-2	⑥-2	⑤-2	⑤-2	
Lesson 3	My Treasure	This is ... / That is ... / What is this? / Who is ...?	形・形状など/ 身の回りにあるものなど	⑤英語で 書いてみよう	⑥-4	⑥-8			⑤-6	
Take Action! Talk 1	道案内	Where is ...? / go straight / turn left [right] at ...		⑤-Try	⑥-5	⑥-6	⑥-5	⑤-8	⑤-7	
Lesson 4	My Summer Plans	I went [ate/saw/enjoyed-ing] ... / Where did you want to go? / I want to go to [eat/see] ...	様子・状態・気持ち/自然/ 国・地域/施設など	⑤-7	⑥-7	⑥-4, 8	⑥-4, 5	⑤-6	⑤-8	
Take Action! Talk 2	フードコートでの注文	What would you like? / I'd like ... / How much ...?		⑥-Try	⑥-6	⑥-7	⑥-6	⑤-7	⑤-6	

活動へとスムーズにつなげるための工夫が見られる。

図7は、光村図書の「小中連携ガイド」で紹介された、小学校と中学校の教科書における言語活動の例である。小学校の教科書で学習した言語活動とよく似た形式の言語活動が中学校でも設定されている。小学校では、書く分量や、例示されている英文の量は限られているが、小学校で学んだ、「音声で十分に慣れ親しんだ」後に「手本を見ながら写して書く」言語活動の学習過程を継承しつつ、中学校での4技能を統合的に活用した言語活動へとつながっていることがわかる。



【図7】光村図書 小中連携ガイド

しかし、実際に採択される教科書は、自治体ごとに小学校と中学校の外国語（英語）教科書が同じ教科書会社のものであるとは限らないため、紙面上の工夫が小学校と中学校でどれだけ連携されているかは明らかではない。

研究成果最終報告書

「デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価」

2022～2025年度科学研究費補助金基盤研究（B）

研究代表者：泉恵美子（関西学院大学）

（研究課題番号：22H00684）

研究概要

1 本研究の目的と概要

2020年度より小学校中学年で外国語活動が、高学年で外国語が実施され、高学年では教科化に伴い文部科学省の文科省検定教科書を用いて指導と評価を行うことになった。また、GIGAスクール構想により、2022年度より一人一台端末が配布され、2024年度からは外国語科で学習者用デジタル教科書の使用が始まった。Society 5.0の現在は、教育DX、AIなども進み、デジタル時代における英語教育をいかに進めるか、ICTをいかに指導や評価に有効に活用するかは大きな課題である。そこで、本研究の目的は、デジタル機器等を用いることで小学校英語の指導と評価がどのように変わるかを研究し、より良い評価の在り方を提案し、検証することである。

また、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日）によれば、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が目指されているが、学習者特性に応じた学習者用デジタル教科書の活用、タブレットやデジタル機器を活用した小学校英語における評価用タスク、パフォーマンス課題の開発と導入、ルーブリックとCan-Doを合わせた評価尺度の設計と実証、eポートフォリオの開発という体系的な研究を行う。その際、「思考力・判断力・表現力」は内容言語統合学習などの知見も取り入れ、「学びに向かう力」といった評価しにくい部分については、自己調整学習の知見を生かし、各自が目標を設定し、予見－遂行－省察を繰り返しながら、目標を達成することをめざす。その際、授業内タスクや課題を設定し開発することで、児童生徒が当事者として関与を高め、Education 2030が求めている学びの羅針盤をもとに教育におけるウェルビーイングを希求するのみならず、アセスメントリタラシーを高め、自己効力や自律性の向上を高めることもめざしたい。

研究の概要としては、小中接続も視野に入れ、デジタルを効果的に活用して「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力」をどのように英語教育で育成し、評価を行うかを考え、デジタルの取り入れにより変革する新たな学びのスタイルに基づいた指導と評価を提案する。さらに、よりよい言語活動への態度と学びの態度の統合的なアプローチにより、児童生徒の学習意欲を促進し、思考や判断を促すタスクや授業設計に基づいたCan-Do評価とパフォーマンス評価（ルーブリック活用）、eポートフォリオの開発を行い、効果的な指導と評価の事例を調査・実践等を通して質的・量的に検証し公開したい。また、それにより、小学校英語に対応する評価プログラムを開発する予定である。

2 2025年度の研究内容

今年度実施した研究内容は主に以下の通りである。

研究に際しては、研究代表者、分担者が各々の専門的立場から役割分担を行い、研究協力者と共に毎月の会議並びに、日常的なメール会議とGoogle Driveの共有により、相互に進捗状況を確認しながら協力して進めた。主な内容は次の通りである。

(1) 研究成果の発表と普及(教員研修): 小学校の外国語活動/英語教育における評価について、2022~2024 年度に作成した『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル~教育の DX を志向した指導・学習・評価に向けて~』『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル~学びを支援する単元をつなぐ Can-Do 評価試案~』『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル~e ポートフォリオ及びデジタル Can-Do 開発に向けて~』における単元をつなぐ Can-Do 評価及びパフォーマンス評価尺度、「学びに向かう力」自己調整学習につながる手立て、学習の3段階(予見-遂行統制-振り返り)における教員の支援(手だて)の在り方、e-ポートフォリオとデジタル Can-Do などについて、学会発表やワークショップ、教員研修等で紹介するとともに、研究成果の発表と普及、検証を行った。

また、今年度は e-ポートフォリオの開発と実践について考え、一般公開に向けた検討会を開催した。また、原点に戻り Can-Do の作成について教員研修でワークショップを実施した。さらに、子どもと共に研究する research with children, 子どもの権利や研究倫理についてペンシルバニア大学のバトラー後藤裕子教授より、自己調整学習に関して九州大学の伊藤崇達教授よりご講演・ご指導をいただき学びを深めることができた。

(2) 学習者用デジタル教科書と令和 07 版文部科学省検定済み教科書中学校「外国語」の分析と指導と評価の在り方の検討: 学習者用デジタル教科書が昨年度は小学校で今年度は中学校で生徒に配布されたことに伴い、教科書会社 6 社の中 1 の教科書紙面とデジタル教科書について担当を決めてそれぞれ特徴を分析するとともに、文科省検定済み教科書の旧版と今年度新たに使用される令和 07 版を比較し、どのような違いや共通点があり、新たにどのような観点が加わっているかを分析した。また、教科書分析を踏まえ、昨年度実施した小学校「外国語」の令和 06 版との接続、連携をどのように行えばよいかの提案を行った。特に、小学校の音声中心から中学校での読み書きにどのようにつなげるか、言語活動や語彙がどのように発展しているか、デジタル教科書の活用と個別最適な学びと協働的な学びの在り方を模索し、自由進度学習などでもタブレットを用いて学びの足跡を残せる e-ポートフォリオの可能性も検討した。その成果は言語教育エキスポ 2026 で発表し、本冊子でも掲載している。

(3) e-ポートフォリオの開発と実践: 昨年度に引き続き、研究者と 3 名の国公立小学校教諭が協力して模索し e-ポートフォリオを開発し、3 校で授業実践を行った。その際、Can-Do 評価を用いた形成的評価から総括的評価につなげ、全国の公立小学校で誰もが使える汎用性の高い e-ポートフォリオをめざし、課題の解決を図り、児童の様子を見ながら児童と教員が使いやすいより良いものにすべく発展させて Ver.1 を完成した。また、2 年間の実践を振り返り、実践者にインタビューを行い、e-ポートフォリオの利点と課題、可能性と実用性について分析を行い、その研究成果と課題について、国際学会や第 3 回のシンポジウムで発表し、本冊子でも報告している。

(4) 自己調整学習を促進する授業設計と外国語における情報活用能力/デジタル Can-Do リストの作成と実践: これまで、「学びに向かう力」を育て、自律した学習者育成のために、ラーニングマウンテンを活用して児童に各自の目標(めあて)を立てさせ、ルーブリックを児童と共創したり、学習者用デジタル教科書やタブレットを有効活用している優れた授業実践に焦点を当ててきた。昨年度は、その実践の中で、児童が思考のツールを用いたり、デジタル教科書を有効活用しながら、どのように「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力」といった資質能力を高め、英語によるコミュニケーション能力を高めているのかを、指導案とも関連付けながら、「外国語×ICT」の観点から情報活用能力の研究を基に、デジタル Can-Do 評価尺度作成を試みた。今年度はさらに、デジタル Can-Do 評価尺度の開発を公立小学校の低学年、特別支援学級や私立小学校へと広げ、実践も行った。

(5) 授業実践: 昨年度に引き続き、小学校外国語活動・外国語科に Can-Do 評価、パフォーマンス評価、デジタル Can-Do、e-ポートフォリオなどを取り入れることで、授業計画や指導がどのように変化し、授業が改善されるかを、児童・保護者、学校への協力の同意を得て、公立・私立小学校で実際の授業を通して検証を行った。その際、一人一台端末が配布されたことも受け、ICT やデジタル機器をいかに活用して授業と評価を行うかについて、研究と実践を行った。幼稚園、低学

年、中学年、高学年など発達段階の異なる幼児や児童を対象に、単元目標やルーブリックの共有、タブレットの活用、デジタルなど情報活用の力も含めた Can-Do 指標を示した指導と評価を行い、児童のデジタルも用いた自己評価も参考に、どのように児童の思考力・判断力・表現力を深めることができるか、学びに向かう力が育っているかなど課題等を洗い出し考察した。

また、今年度は豊見城市立ゆたか小学校の奥平明香教諭の小学校を訪問し、実際に児童の様子や指導者の様子を観察し、その後授業に関する協議を行った。ラーニングマウンテンやタブレット、デジタル教科書もフル活用して、個別最適な学びと協働的な学びを推進されている奥平先生のご実践から多くを学ばせていただいた。なお、先生ご自身の振り返り、内省シートやビデオ録画した授業や児童のパフォーマンス例を分析し、評価が指導にどのように影響を与えるかを引き続き検証した。

(6) リタラシーの指導と評価：小学校外国語では小中連携も踏まえ、「読むこと」「書くこと」(文字指導)をどのように段階的に指導し評価すればよいかは大きな課題である。そのため、リタラシーの指導と評価のあり方を継続して研究し、トップダウンとボトムアップの視点からの目標と指導・評価について引き続き検討を行い、Can-Do 評価を用いてどのように中・長期的に力を見取るのかについても検討を行った。さらに、テスト問題等を開発し、公立・私立の小学校で実施した。また、絵本を用いた Learning by Storytelling (LBS)の指導でも音韻認識を育てる教材やテスト、Can-Do 評価を用いて児童に自己評価をさせ、その効果検証も行った。

(7) HP の更新：科研の HP の更新を随時行い、ワークショップやシンポジウムの予定やチラシを掲載し広報に務めた。また、2025 年度の中間報告書冊子を作成し、アップロードする予定である。
(<http://www.izumi-lab.jp/easel.html> 参照)

3 2025 年度の活動報告

(1) 科研ミーティング

第 1 回 2025 年 4 月 19 日 (土) @Zoom	第 2 回 2025 年 5 月 17 日 (土) @Zoom
第 3 回 2025 年 6 月 28 日 (土) @Zoom	第 4 回 2025 年 7 月 27 日 (土) @松山 + Zoom
第 5 回 2025 年 8 月 24 日 (日) @Zoom	第 6 回 2025 年 9 月 28 日 (日) @Zoom
第 7 回 2025 年 10 月 19 日 (日) @Zoom	第 8 回 2025 年 11 月 16 日 (日) @Zoom
第 9 回 2025 年 12 月 21 日 (日) @Zoom	第 10 回 2026 年 1 月 10 日 (土) @Zoom
第 11 回 2026 年 2 月 1 日 (日) @Zoom	第 12 回 2026 年 2 月 22 日 (日) @Zoom
第 13 回 2026 年 3 月 15 日 (日) @関西学院大学大阪梅田キャンパス	

*その他、別途個別 MTG や WS、学会発表など打ち合わせ等もあり

(2) ワークショップ他 (EASEL 2025 年度「デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価」)

① **松山市中堅教員研修Ⅱ (小学校外国語) @松山市教育総合センター (2025 年 7 月 28 日)**

松山市小学校・中学校の中堅教員 (10 年目) を対象に「小学校外国語科の評価について」CAN-DO 評価ワークシートによるワークショップを行った。
発表者: 泉恵美子, 大田亜紀, 黒川愛子, 長沼君主, アレン玉井光江, 田縁真弓, 森本敦子

② **小学校英語研究会 (EASEL) デジタル Can-Do 事例検討会 @長崎大学 (2025 年 11 月 9 日)**

e ポートフォリオの実践報告と協議

発表者: 内田綾先生 (春日市立春日南小学校), 友池奈緒先生 (糸島市立波多江小学校), 大村由布子先生 (長崎大学教育学部附属小学校)

指導助言者: 倉田伸, 長沼君主, 大田亜紀

③ **EASEL 2025 年度 ワークショップ in 沖縄 @琉球大学 (2026 年 12 月 6 日)**

「デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価」
～児童・生徒と共に創る、学習計画と評価～

第1部 あいさつ: 泉恵美子

オープニング: 津田敦子先生(琉球大学)

「Let's Try! 対応英語学習アプリ「Mejiro English」の紹介-自己調整学習×形成的評価を支える-」

研究実践発表

①「小学校担任ができるPBL型の授業構成(仮題)」

上江洲育子先生(宜野湾市立宜野湾小学校)

②「ICTを使った個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指して(仮題)」

蒲池いずみ先生(那覇市立古波蔵小学校)

ランチ交流会@琉球大学内学生食堂

第2部 講話・Can-Do 評価尺度作成ワークショップ

講師兼ファシリテーター: 長沼君主

「小学校外国語科の評価とCan-Do 評価ワークショップ」

*6年生の「My best memory」の単元を扱った。

ファシリテーター: 泉恵美子, 大田亜紀, 黒川愛子, 田縁真弓, 森本敦子, 大江太津志, 奥平明香

まとめ・終わりのあいさつ: 大田 亜紀

④ 言語教育エキスポ2026@中央大学茗荷谷キャンパス (2026年3月1日)

シンポジウム(研究発表と協議)「中学校英語検定教科書に見る小中接続」

発表者: 泉恵美子, 長沼君主, 加藤拓由, 黒川愛子, アレン玉井光江

【要旨】2024年度には小学校, 2025年度には中学校の英語検定教科書がそれぞれ改訂された。本発表では, 改訂された中学校英語の検定教科書に軸足を置き, 小中接続の視点や, 学習者用デジタル教科書活用の視点を含め, 新しい教科書を活用した指導や評価の在り方について検討する。タスクフォースによる事前リサーチの結果, 特に, 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を推進するための仕組みや, 主体的な学習者を育てるための学習方略の育成に有効な手立てを見ることができた。詳細に関しては, 言語エキスポの発表会場において具体的な事例を紹介したい。

⑤ EASEL 2025年度 第2回 シンポジウム @大阪 (2026年3月15日)

@関西学院大学大阪梅田キャンパス

「デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と自律的な態度を育む外国語科の評価」

～児童・生徒と共に創る、学習計画と評価～

あいさつ: 泉恵美子

講演1: 伊藤崇達先生(九州大学)

「子どもの主体的な調整と学び合いを支えるために-自己調整学習の見地から-」

講演2: バトラー後藤裕子先生(ペンシルバニア大学)

「子ども中心のデジタル技術研究における倫理的配慮」

研究報告

①e-portfolio 大田亜紀・倉田伸・内田綾

②デジタルCAN-DO 長沼君主・幡井理恵・森本敦子

③読み書き指導 アレン玉井光江・田縁真弓

④小中接続・教科書分析 アレン玉井光江・加藤拓由・黒川愛子

シンポジウム「デジタル時代における学びの接続と評価-次期学習指導要領に向けて」

登壇者: 泉恵美子・大田亜紀・長沼君主・アレン玉井光江・奥平明香

ファシリテーター: 泉恵美子

終わりの挨拶: アレン玉井光江

(3) 雑誌論文・図書など

【論文】

泉恵美子・齊藤倫子・吹原顕子・田邊義隆(2025)「小学校英語教員養成における学生の意識の変容と課題-3年間の縦断的研究を踏まえて-」『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』44, 17-32.

- 小野尚美・田縁眞弓・吉本連・オーガスティン真智 (2025)「日本の小学校での ICT 活用の効果」『アジア太平洋研究』特別号, 1-40. 査読有
- 幡井理恵 (2025) 「デジタル世代の子どもに響く小学校英語授業デザイン」大修館『英語教育』2025年11月号, VOL.74, 6-7.
- Nakata, Y., Miyazaki, T., & Matano, C. (2025) “Narrative inquiry as a relational methodology: What and how can two teachers and a teacher educator learn from each other?” *International Journal of Applied Linguistics*. Advance online publication.
- 黒川愛子 (2026) 「小中接続に向けての検定教科書を用いた中学校外国語科における TPR 指導の展開—教員をめざす学生との授業からの考察を含めて—」『帝塚山大学教育学部紀要』第7号, 1-10, 査読有
- 黒川愛子 (2026) 「教員養成課程学生の音読学習に関する意識変容への考察 —Tutorial System の活用と授業実践を通じて—」『帝塚山大学子育て支援センター紀要』第7号
- 大石祥寛・徳永加代・城田直彦・黒川愛子・服部正志 (2026) 「地域の子どものための体験型イベントの企画・運営に学生が参画することの意義についての一考察」『帝塚山大学子育て支援センター紀要』第7号

【図書】

- 阿野幸一・アレン玉井光江 (他 108 名) (2025) 『中学校検定教科書 New Horizon 1,2,3』東京書籍, 978-4-487-12131-1
- 全国英語教育学会第 50 回研究大会記念特別誌編集委員会, 斉田智里・泉恵美子他 (編著) (2025) 全国英語教育学会第 50 回大会記念特別誌『英語教育学の今—実践と理論の統合—』

(4) 学会発表・講演・研修講師など

【学会発表】

- アレン玉井光江 (大場氏および山口氏とシンポ) 「非認知能力の発達と英語教育」日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 45 回全国大会, 青山学院大学 (2025.6.14)
- Mitsue Allen-Tamai, Literacy Instruction in Early English Education ”Nagoya-Gifu-Toyohashi JALT Forum 2025” (2025.7.27)
- アレン玉井光江 「物語で育む英語力—中学生に残る学びとは?」日本教育心理学会, 浜松アクロシティ (2025.10.12)
- Mitsue Allen-Tamai, Perspectives on Refugee Inclusion in Japan: Voices from Volunteers and Applicants Japan Association of Language Teachers, 国立オリンピック記念青少年総合センター (2025.11.1)
- 泉恵美子・長沼君主・加藤拓由・奥平明香 「小学校英語×デジタル (情報活用能力) Can-Do ワークショップ」日本児童英語教育学会 (JASTEC) 2025 年度 第 45 回全国大会, 青山学院大学 (2025.6.15)
- 井狩幸男・泉恵美子・板垣静香・樫本洋子・斉藤倫子・清水香苗・竹田里香・鳥羽素子・星原光江・松延亜紀 「ことばの学び~絵本の読み聞かせを通して」ワークショップ, 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部春季研究大会, 流通科学大学 (2025.5.24)
- Shinozaki, F., & Izumi, E. Community of Inquiry and Individual Differences in a University English Course: An Exploration of Asynchronous Video and Audio Communication, FLEAT VIII, the University of Hawaii at Mānoa (2025.6.26)
- 泉恵美子・小野祥康・中住幸治・山本玲子・田山享子 「実践研究をはじめよう—問いの立て方・研究の進め方—」小学校英語教育学会 (JES) 東北・秋田大会, 国際教養大学 (2025.7.5)
- 長沼君主・泉恵美子・加藤拓由・奥平明香 「デジタル (情報活用能力) Can Do 評価尺度作成の試み—情報活用能力ベーシックを参照した授業実践分析—」小学校英語教育学会 (JES) 東北・秋田大会, 国際教養大学 (2025.7.6)
- 泉恵美子・斉藤倫子・吹原顕子・田邊義隆・松永舞・北村友美子・多田玲子・松延亜紀 「小学校英語教員養成における学生の意識の変容と指導者の認識—縦断的研究を踏まえて—」日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 45 回秋季研究大会, 大阪成蹊大学駅前キャンパス (2025.11.30)
- 酒井英樹・アレン玉井光江・泉恵美子・狩野晶子・鈴木さおり・丹藤永也・長沼君主・箱崎雄子・

- 幡井理恵「小学校英語教育における指導体制と指導者育成に関する提言書（素案）について」日本児童英語教育学会（JASTEC）第45回秋季研究大会，大阪成蹊大学駅前キャンパス（2025.11.30）
- 小野尚美・泉恵美子・赤枝康隆「公立小学校における Learning by Storytelling 指導法の3年目の効果」日本児童英語教育学会（JASTEC）第45回秋季研究大会，大阪成蹊大学駅前キャンパス（2025.11.30）
- 泉恵美子・長沼君主・アレン玉井光江・黒川愛子・加藤拓由「中学校英語検定教科書に見る小中接続」言語教育エキスポ2026，JACET 教育問題研究会，中央大学茗荷谷キャンパス（2026.3.1）
- 泉恵美子「小学校英語教員養成における学生の意識の変容と課題—縦断的研究を踏まえて—」2025年度関西学院大学教育学会研究発表会（2026.3.5）
- Aki Ohta, Shin Kurata, & Emiko Izumi, Advantages and Considerations of e-Portfolios Using General-purpose Cloud Tools in Elementary School English Education “The IAFOR International Conference on Education in Hawaii 2026” (2026.1.3-7) virtual presentation (The Hawai’i Convention Center & the Ala Moana Hotel, Honolulu, Hawaii, United States)
- 大田亜紀「今一度考えよう、「言語活動」のあり方」日本児童英語教育学会（JASTEC）九州沖縄支部大会，博多駅前貸会議室（2025.10.25）
- 大田亜紀 授業研究コメンテーター「やり取りを通して内容を深める発表活動の構築—複数単元を跨いだ言語活動の実践を通して（6年）」内藤先生のご実践から，日本児童英語教育学会（JASTEC）秋季大会，大阪成蹊大学（2025.11.30）
- 加藤拓由「中学校外国語科の検定教科書に関する「検定意見書」分析—指導事由から考える、小中連携と学習指導要領—」日本児童英語教育学会（JASTEC）第45回全国大会，青山学院大学（2025.6.15）
- 加藤拓由「教科書の効果的な深め方—デジタル？紙？それとも？—」英語授業研究会関西支部春季研究大会，大阪商業大学（2025.6.22）
- 加藤拓由「小学校外国語科における資質・能力と情報活用能力の育成—『情報活用能力ベーシック』を取り入れた授業設計の視点から—」小学校英語教育学会（JES）全国大会（秋田大会），国際教養大学（2025.7.6）
- 黒川愛子「小中接続に向けての検定教科書を用いた中学校外国語科におけるTPR指導の展開—教員をめざす学生との授業からの考察を含めて—」全国英語教育学会第50回記念埼玉研究大会，獨協大学（2025.8.9）
- 宇田竜子・黒川愛子「小中接続を目指した小学校外国語科におけるTPRの活用—第5学年段階での指導の提案—」小学校英語教育学会（JES）第25回全国大会，国際教養大学（2025.7.6）
- 中野研一郎・黒川愛子・和田藍花「身体性原理とメタ言語能力の伸長が外国語習得に及ぼす影響の定量分析研究—認知言語学・英語教育・ICTの知見融合の学習教材—」全国英語教育学会第50回記念埼玉研究大会，獨協大学（2025.8.9）
- 小野尚美・田縁眞弓ほか「Learning By Storytelling 指導法 workshop」全国英語教育学会第50回研究大会，独協大学（2025.8.10）
- 池田周・オーガスティン・田縁眞弓「絵本を使った音韻認識育成の試み」小学校英語教育学会（JES）東北・秋田大会，国際教養大学（2025.7.6）
- 田縁眞弓「連携・接続の視点から見る読み書き指導」JES 京都支部（KEET）第29回研究会，京都外国語大学（2025.9.27）
- 幡井理恵「デジタル教科書と学習支援ツールで思考力・判断力・表現力を育成～夢宣言の実践から～」小学校英語教育学会（JES）東北・秋田大会，国際教養大学（2025.7.6）
- Rie Hatai, “Try Out Assessment Scales for Elementary Classroom English” JALT, 青少年オリンピックセンター（2025.11.2） ○
- 幡井理恵「小学校英語における他教科連携の実践と今後の展望」日本児童英語教育学会（JASTEC）第4回研究大会，文教大学（2026.1.25）

【講演】

<泉恵美子>

- ・京都光華女子大学 第5回英語教育フォーラム「～つなぐ・つなげる・つながる明日の英語教育～」 「これからの英語教育～光華の事例を参考に～」 京都光華女子大学 (2025.9.7)
- ・令和7年度兵庫県高等学校教育研究会英語部会神戸支部総会・研究大会「社会の状況を踏まえ求められる授業の在り方ー生徒の思考力と自己効力感を高め、自律的な学びを育むためにー」 兵庫県立神戸高等学校ゆ〜かり館 (2025.11.20)
- ・関西学院大学教育学部就職懇談会「子どもの言語習得から考える幼児期・学童期の英語教育」 関西学院会館 (2026.2.26)

<大田亜紀>

- ・大分市小学校外国語教育研究会 夏季講演会, 大分県大分市立下郡小学校 (2025.7.29)
- ・JES 四国合同セミナー「日々の悩みを出発点に、小学校外国語の「言語活動」を見つめ直す」 香川大学 (2025.2.14)

<田縁真弓>

- ・第5回英語教育フォーラム「つなぐ、つながる、つなげる英語教育」 京都光華女子大学 (2025.9.7)
- ・大阪市教育委員会 第41回総合研究発表会「個別最適な学びと協同的な学びの実現」 大阪市三先小学校 (2026.2.6)

【研修・セミナー等講師】

<アレン玉井光江>

- ・品川区教育会英語部会研究会「小中連携による英語教育の推進」 品川区立伊藤小学校 (2025.5.7)
- ・外国語活動・外国語科指導力アップ研修「子どもが主体となる外国語活動・外国語科の教科指導のあり方」 滋賀県総合教育センター (2025.7.22)
- ・小学校外国語科研修講座「時期学習指導要領を踏まえての外国語教育の動向および文字指導と理論」 福井県教育総合研究所 (2025.7.23)
- ・福井県立若狭高等学校 授業研究会「英語における対話型カリキュラム」 福井県立若狭高校 (2025.10.31)
- ・品川区教育会英語部会研究会「小中連携による英語教育の推進」 品川区立伊藤小学校 (2025.10.8)
- ・船橋市小学校英語研修会「小中接続を意識した文字指導」 船橋市立飯山満小学校 (2026.1.7)
- ・品川区教育会英語部会研究会「小中連携による英語教育の推進」 品川区立伊藤小学校 (2026.2.4)

<泉恵美子>

- ・西宮市立小学校教頭会 夏季研修プログラム「小学校教員養成における英語教育について」 (2025.8.4)
- ・神戸市教育委員会 神戸市立中央小学校校内研修指導助言「校内の先生方の授業ー外国語活動・外国語科についてー」 (2025.11.26)

<大田亜紀>

- ・大阪府堺市小英研 令和7年度「小学校外国語指導者研修」「読むこと」「書くこと」の指導について」 堺市役所三国ヶ丘庁舎5階 共用会議所 (2025.7.22)
- ・令和7年度福岡県大牟田市小英研 教育講座「小学校外国語の授業づくり」 福岡県大牟田市立明治小学校 (2025.8.1)
- ・福岡県筑紫地区小学校外国語教育研究会第2回研修会, 県大会授業指導案審議会, 福岡県太宰府市立水城小学校 (2025.8.4)
- ・福岡県うきは市小教研外国語・外国語活動部会夏季研修会「小学校外国語の授業づくり」 福岡県うきは市立大石小学校 (2025.8.5)
- ・北九州市立光貞小学校校内研修会「小学校外国語科・外国語活動における「言語活動を通して」の指導、評価・評定の在り方等について」 北九州市小英研, 北九州市ウエルとばた (2025.8.18)
- ・令和7年度 福岡県筑豊地区小英研研修会「外国語活動の授業づくり」 福岡県飯塚市立片島小学校 (2025.8.27)

- ・福岡県うきは市小教研外国語・外国語活動部会授業研究会「小学校外国語の授業づくり～公開授業から学ぶ～」福岡県うきは市立御幸小学校（2025.9.26）
- ・令和7年度 行橋市小学校教育研修会 外国語班授業研修会「小学校外国語の授業づくり」福岡県行橋市立行橋小学校（2025.10.16）
- ・令和7年度 福岡県教育センターキャリアアップ講座「小学校外国語活動・外国語科の授業づくり」福岡県久山町立久原小学校（2025.10.30）
- ・糸島市小学校教科等研究協議会外国語活動・外国語科授業研修会「主体的な学びを創るために大切なことについて考える」福岡県糸島市立南風小学校（2025.11.25）
- ・福岡地区兼筑紫地区小学校外国語教育研究会第3回研修会「外国語科・外国語活動における個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実について」福岡県太宰府市立水城小学校（2025.11.27）
- ・福岡県糟屋区小学校外国語活動・外国語研究会「言語活動を通じた」指導の充実を図るために」福岡県糟屋郡新宮町立新宮小学校（2025.12.3）
- ・宇佐市 小学校外国語部会研修会「小学校外国語の授業づくりー効果的な言語活動の進め方ー」宇佐市立四日市北小学校（2026.1.9）

<加藤拓由>

- ・本巣市教育委員会 小中義英語研修「ICT de こどもが主語の外国語の授業」岐阜県本巣市立真桑小学校（2025.8.1）
- ・安城市教育研究会英語（外国語活動）部会夏季研修会「個別最適な学びについてー英語の授業におけるICTの活用について」安城市教育センター（2025.8.5.）
- ・羽島市教育委員会 力量アップ講座「小中学校外国語（活動）の言語活動と、学習者用デジタル教科書の利活用」羽島市役所ほか（2025.5.13.～2026.2.12）
- ・高浜市教育研究会 一斉授業研究会 英語・外国語活動部会「言語活動の指導と評価」愛知県高浜市立吉浜小学校（2025.10.16）
- ・春日井市立鷹来小学校校内研修「明日もまた来たくなる学校に！～Well-beingな居場所作り～」（2025.5.15）
- ・春日井市立鳥居松小学校校内研修「ICT de Enjoy Summe」（2025.7.31）
- ・岐阜市立茜部小学校校内研修会「小学校外国語（活動）の言語活動と評価ーことばを、「楽しく」、「深く」学ぶための工夫ー」（2025.11.10）
- ・尾教研丹葉支部英語部会研究集会「主体的・対話的に学ぶ児童・生徒の育成ーICTの活用と言語活動を通してー」大口町健康文化センター（2025.10.15）
- ・一宮市教育委員会教育部 2025年度 小学校外国語自主研修「小学校外国語の授業について」一宮市教育センター（2025.5.16～10.10）
- ・昭島市立公立小学校教育研究会「相手意識をもって楽しんでコミュニケーションを図る児童の育成～児童が話したくなる・聞きたくなる授業の工夫を通して～」昭島市立拝島第二小学校（2025.10.29）
- ・校内現職教育講演会講師「小学校外国語活動の楽しい授業づくり～教師の英語力・指導力～」あま市立甚目寺小学校（2025.4.24）
- ・春日井市英語研究会 郡市別中間発表会講演「新教科書を使った英語授業デザイナーーICTを活用した、指導と評価の工夫ー」かすがいグリーンパレス（2025.10.8）
- ・日本デジタル教科書学会「学習者用デジタル教科書活用による、児童の学びの変容」瀬戸SORAN小学校（2025.8.23）
- ・小学校英語教育学会（JES）四国ブロック合同セミナー ワークショップ「言語活動の指導と評価 ～主体的な学び手を育てるために～」香川大学教育学部（2026.2.14）
- ・岐阜聖徳学園大学 教育フォーラム2026 シンポジウム「今後の幼小中高、および大学教育はどうあるべきか？」岐阜聖徳学園大学羽島キャンパス（2026.3.3）
- ・小学校英語授業づくり研究会「学習者用デジタル教科書活用と自己調整学習ー情報活用能力と学習方略育成の視点からー」オンライン（2025.5.6）

<黒川愛子>

- ・教職トライコース通年授業科目内教職講義「「教員になるための学びとは？」 夢をもって進み、大学で学び、身につけたいこと」大阪府立八尾翠翔高等学校（2025.5.16）

<田縁眞弓>

- ・ ELEC 小学校英語夏季講座「児童が話したくなる英語授業」オンライン (2025.8.9)
- ・ 令和7年播磨東地区夏季研修会小学校外国語研修「子どもの心を動かす外国語指導と評価」加東市地域交流センター、兵庫県播磨東地区教育委員会 (2025.7.28)
- ・ 令和7年度全国私立小学校連盟 英語研究部研修「私立小学校が拓く明日の小学校教育」京都ノートルダム学院小学校 (2025.8.22)
- ・ MPI 研究会 30周年記念講演会「SELの枠組みから見た早期英語教育」京都府長岡京市市民センター (2025.8.30)
- ・ 大阪市小学校英語教育研究会「短時間学習と通常授業の有機的融合」大阪市三先小学校他、大阪市教育委員会 (2025.11.11/18)
- ・ 東京都足立区教育委員会「外国語科と外国語活動」足立区湊江小学校 (2025.10.26/11.28)
- ・ 令和8年度東京都足立区小学校教育研究会「ストーリーテリングと小学校英語」東京都足立区千寿小学校、東京都足立区教育委員会 (2026.1.28)

<幡井理恵>

- ・ 中野区教員研修「小学校の外国語活動、外国語科の充実に向けて」中野区立教育センター、中野区教育委員会 (2025.5.4)
- ・ 柏市外国語指導スキルアップ研修「教科書を超えて“生きた学び”をつくる一人的支援と評価の視点から」柏市教育委員会 沼南庁舎 (2025.7.29)
- ・ 中野区教員研修「小学校の外国語活動・外国語科において ICT を活用するとは」中野区立教育センター、中野区教育委員会 (2025.8.4)
- ・ 世田谷区教員研修「教科書を超えて“生きた学び”をつくる一人的支援と評価の視点から」世田谷区立給田小学校、世田谷区外国語研究会 (2025.9.10)
- ・ 入間地区英語教育研究会 授業研究会「教科書を活用して“生きた学び”をつくる一指導と評価の一体化」ふじみ野市立大井小学校 (2025.10.7)
- ・ 世田谷区外国語研究会 教員研修「教科書を超えて“生きた学び”をつくる一人的支援と評価の視点から」世田谷区立奥沢小学校 (2025.11.5)
- ・ 大田区教育研究会 小学校外国語活動・外国語研究部研修「4技能×3つの資質・能力の育成を意識した小学校英語の指導」大田区立東調布第三小学校 (2025.11.6)
- ・ 高槻市教育研究会小学校外国語部教員研修「教室内英語力評価尺度を活用した Small Talk 作成を目指して」高槻市立教育会館、高槻市教育委員会 (2025.11.12)
- ・ ELEC 冬期小学校英語教育ワークショップ「発達段階に応じた思考力の育成と教室内教師英語」コンフォール安田ビル、 (2025.12.26)
- ・ 江戸川区外国語・外国語活動部 小学校教育研究会「外国語活動を考える～目標の設定と言語活動～」江戸川区立一之江小学校 (2026.1.21)
- ・ 相模原市立相模台小学校研修「4技能を中心とした教科書の活用」相模原市立相模台小学校 (2026.1.27)

<俣野知里>

- ・ 筑波大学附属小学校学習公開・初等教育研修会「児童の姿から「言語活動」を再考する-言語活動を支える手立ての試行から-」筑波大附属小学校 (2025.2.14~15)

【その他】

- ・ 倉田伸・泉恵美子・大田亜紀 Google プロジェクト「クラウド × 生成 AI で授業が変わる！教科の本質に迫るセミナー」Google for Education, YouTube 配信 (2026.2.26)
- ・ 田縁眞弓 ネバダ大学教育学部 Open workshop アメリカネバダ州 ネバダ大学リノ校 “Storytelling in Japanese Elementary schools” (2025.9.15)

その他、多くのメンバーが、教育委員会や幼稚園・小学校・中学校・高等学校等での教員研修に携わった。

(文責 泉恵美子)

プロジェクト報告

小学校英語教育における自律的な学びのための形成的評価を支援する eポートフォリオ汎用テンプレートの開発

大田亜紀（別府大学短期大学部）

内田綾（福岡県春日市立春日南小学校）

友池奈緒（福岡県糸島市立前原小学校）

大村由布子（長崎大学教育学部附属小学校）

倉田伸（長崎大学教育学部）

1. はじめに

1.1. 小学校英語教育における自律的な学び

小学校英語教育（中学年の外国語活動・高学年の外国語科）における「自律的な学び」とは、児童が教師から与えられた課題を受動的にこなす状態から脱却し、自身の学習目的を理解して自ら目標を設定する姿勢や能力を指す。具体的には、学習方法の選択や調整を行い、学びの過程を振り返って次へとつなげていくプロセスが含まれる。これは、文部科学省が推進する「主体的・対話的で深い学び」のうち、とりわけ主体的な学びと深く関わるものであり、生涯にわたって外国語を学び続けるための基盤となる。

現行の小学校学習指導要領では、外国語教育の目標として、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが示されている。すなわち、小学校英語教育では、知識や技能の習得だけでなく、児童が自ら進んで英語を使い、学びを深めようとする態度そのものが重視されているといえる（文部科学省 2018）。

この考え方は、観点別学習状況の評価における「主体的に学習に取り組む態度」にも表れており、この観点で重視されるのは、単に「楽しく参加しているか」「よく発表しているか」といった表面的な様子ではなく、粘り強くコミュニケーションを図ろうとしているか、そして自らの学習を調整しようとしているかという、自律的・自己調整的な側面が重要視される。具体的には、失敗や言葉の壁を恐れずに課題に取り組み、相手に伝えようとする「粘り強い取組」と、学習の過程を振り返り、自分なりに工夫したり、学習方略（ジェスチャー、言い換えなど）を見直したりする「自己調整」の二つの側面から見取ることが求められている。

このような自律的な学びを育てるためには、毎時間の振り返りの質を高めることが特に重要である。振り返りは、児童が自分の学びを言語化し、何ができたのか、どこに課題があるのか、次にどうしたいのかを考える機会となると共に、児童自身の学びをよりよくするための形成的評価の一環である。そのため、小学校英語教育における評価は、単に成績をつけるためのものではなく、児童自身の学びをよりよくするためのものとして機能する必要がある。とりわけ、学習の途中で現状と改善の方向を見ることができるようになる形成的評価の充実が、自律的な学びの育成に直結する。

その具体的な方法としては、Can-Do リストの活用、ルーブリック評価、振り返りシートなどの学習ログ、ポートフォリオの活用などが挙げられる。これらは、児童の自己調整の姿を可視化し、自分の成長や課題を把握する手がかりとなる。特に授業ごとの振り返りは、メタ認知を働かせ、自己調整学習のサイクルを回すための要となる。

さらに、ICT やデジタル端末の活用も、児童の自律的な学びを評価し、促進する上で大きな可能性をもつ。デジタルツールは、単なる業務効率化の手段ではなく、児童が自分の学習の履歴を蓄積し、学びを客観的に見つめ、次の目標を自ら設定するための有効な足場かけとなる。小学校英語教育において、自律的な学びを確かに育てていくためには、こうした評価の工夫と ICT の効果的な活用を一体的に進めていくことが、今後ますます重要になる。

1.2. 小学校英語教育における e ポートフォリオ

小学校外国語活動・外国語科においては、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」に加え、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱を育成することが重視されている。特に、児童が社会や世界と関わりながら主体的に学ぶ姿勢を育み、学習者としての自律性を養うことが求められている。こうした学びを支える環境として、GIGA スクール構想により 1 人 1 台端末と高速通信環境が整備され、デジタルデータを扱う「e ポートフォリオ」の活用が注目を集めている。e ポートフォリオは、学習の成果や過程をデジタル形式で記録・管理し、自己調整能力を育成するための重要な教育ツールとなり得る。しかし、小学校英語教育において汎用的なクラウドツールを用いた際の具体的な長所や留意点については、これまで十分に整理されてこなかった。この点について、Ohta (2026) は、Google for Education 等のツールを用いて開発したポートフォリオを 1 年以上活用した経験を持つ教師 3 名 (教師 A、B、C) を対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施し、活用のポイントを抽出している。なお、ここでの e ポートフォリオとは、デジタルデータを扱うポートフォリオをまとめて e ポートフォリオと呼ぶことにし、その中でも、「学習履歴」と「学習記録」の 2 つの構成要素 (森本 2015) のうち、「学習記録」に焦点をあてた e ポートフォリオである。

Ohta (2026) は、e ポートフォリオ活用の長所として、【比較活動の高度化】【評価の効率化】【自己決定場面増加】【学習効果】【学習の効率化】の 5 つを整理している。例えば、【比較活動の高度化】に関しては、児童全員の学習情報がリアルタイムで共有されることで、他者の振り返りを参照しながら自らの思考を深めることが可能になる。また、動画メディアを活用することで、従来のアナログ媒体では困難であった「過去の自分」と「現在の自分」のパフォーマンスを視覚的に直接比較できるようになり、スピーキング力の成長を実感しやすくなるという利点が示された。【評価の効率化】については、児童の自己評価が一元化されることで教師の整理時間が大幅に削減され、授業中にリアルタイムで児童の理解度を把握し、即時的なフィードバックを行うことが可能になる。さらに、【自己決定場面増加】では、目標達成に向けた学習方法を児童が自ら選択したり、見たい他者の発表を自由に選んだりすることで、学習の主体性が高まる様子が確認されている。

一方で、導入および運用における留意点として、同研究は【難易度】【授業時間】【利点の明示化】【限定されたフィードバック】の 4 項目を示している。【難易度】については、導入初期に児童が操作に習熟するための時間を十分に確保する必要があるだけでなく、小学校中学年においてはスプレッドシートの情報量や文字量を発達段階に応じて調整する工夫が求められる。また、教師自身の技術的スキルが初期設定や運用の障壁となる可能性も指摘された。【授業時間】に関しては、45 分という限られた時間の中で、英語による言語活動の時間とポートフォリオへの記録時間をいかに両立させるかが最大の課題となっている。これに関連して、児童が記録活動を負担に感じないよう、【利点の明示化】を通じて「自分の成長が見える」「便利である」といった意義や利便性を実感させることが不可欠である。さらに、【限定されたフィードバック】として、デジタル上では手書きのような自由なコメントがしづらいついた課題があり、効果的かつ効率的なフィードバック手法の検討が必要であることが示唆された。

これらの長所と留意点に関する知見は非常に有用であるものの、それらを踏まえて具体的に構築された e ポートフォリオのモデルは未だ十分に検討されていない。もし、小学校英語教育における自律的な学びのための形成的評価を支援する e ポートフォリオが存在すれば、英語を効果的に学び続ける学習者の育成に大きく寄与できる。さらに、その e ポートフォリオが汎用的なクラウドツールを用いて構築され、テンプレートとして公開可能になれば、学校現場への広範な普及が見込まれる点においても極めて意義深いといえる。

そこで本研究では、小学校英語教育における自律的な学びのための形成的評価を支援する「e ポートフォリオ汎用テンプレート」を開発し、その内容を報告することを目的とする。

2. e ポートフォリオ汎用テンプレート

本稿で開発した e ポートフォリオ汎用テンプレートは、EPELL-S (e-Portfolio for English Language Learning with Script) および EPELL-N (e-Portfolio for English Language Learning with No-Script) の 2 種類である。両者はいずれも、GIGA スクール構想下で広く普及している Google スプレッドシートを基盤として構築されている。EPELL-S は、Google Apps Script (GAS) による自動化処理を実装した汎用的な支援ツールである。一方、EPELL-N は GAS を用いていないテンプレートである。EPELL-N は自動化処理が実装されていないため機能面ではやや限定的となるものの、各学校の学習環境やセキュリティの設定内容 (GAS の実行制限等) に依存することなく導入・活用できるという長所を有している。

2.1. GAS 付き e ポートフォリオ汎用テンプレート (EPELL-S)

EPELL-S は、小学校英語教育において児童の「自律的な学び」を可視化するとともに、教員による形成的評価の質の向上と業務負担の軽減を両立させることを目的としている。特に、GAS を用いた単純作業の自動化により、教師の業務負担を大幅に軽減することに主眼を置いている。具体的には、各児童の振り返りデータの抽出や教員からのフィードバック送信を GAS によってシステム化し、指導と評価の一体化を効率的に支援する設計となっている。主な特徴として、「学習者用シート作成機能」「自動リスト化機能」「フィードバック自動入力機能」の 3 点が挙げられる。なお、本システムが想定する e ポートフォリオは、学習者である児童が自身のマイゴールや学習成果物、また振り返りの内容などを 1 つのワークシート (ファイル全体ではなく、個別のタブとして表示される画面を指す。以下、シート) に整理する形式である。初期のシート構成として、学習者用シート作成機能を利用するための「settings」、自動リスト化およびフィードバック自動入力機能を実行するための「feedback」、そして児童用シートのレイアウトや雛形となる「template」の計 3 つのシートがプリセットされている。

2.1.1. 学習者用シート作成機能

通常、教員は担当する児童の数だけシートを複製・作成する必要がある、多大な業務負担が生じる。さらに、他者の誤操作によるデータ喪失等を防ぐためには、各シートの編集権限を当該児童と教員のみ限定し、他の児童には閲覧権限のみを付与するなどのアクセス制御が有効であるが、これを見童全員分に個別設定することは更なる負担増を招く。EPELL-S の「学習者用シート作成機能」を活用することで、登録用一覧表に入力した情報をもとに、これらの権限設定を含めた学習者用シートの自動作成が可能となる。以下に具体的な操作方法を示す。

(1) 「template」シートの作成（雛形の構築）

「template」シートの画面例を図1に示す。まず、学習者用シートの複製元となる「template」シートを編集し、雛形を作成する。この内容は教員が目の前の児童の実態に合わせて自由にカスタマイズできる。ただし、図1に示すように、2行目から5行目にCan-Do評価を含めることは、児童に自律的な学びを意識させる足場かけとなるため、あらかじめ入力しておくことが望ましい。

図1 「template」シートの画面例

	A	B	C	D	E
1					
2	4	(CanDo評価・レベル4の文言を入力)			
3	3	(CanDo評価・レベル3の文言を入力)			
4	2	(CanDo評価・レベル2の文言を入力)			
5	1	(CanDo評価・レベル1の文言を入力)			
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					

(2) 登録用の一覧表に情報入力・作成

「settings」シートの画面例を図2に示す。「template」シートの完成後、「settings」シートにて対象児童の情報を登録する。具体的には、C列に児童氏名を入力すると、E列に整理番号と氏名を結合した文字列が自動生成され、これが各学習者用シートのタブ名となる。続いて、D列に各児童のメールアドレスを入力することで、生成されるシートの編集権限が「当該児童と教員のみ」に自動設定される強固なセキュリティ環境が構築される。その後、対象児童のB列を「登録する」に設定した上で、図中の「Run」ボタンを実行（押下）することで、一覧表の情報に基づき学習者用シートが自動生成される。なお、教員以外のユーザーによる誤操作（予期せぬプログラムの実行）を防止するため、「Run」ボタンの実行にはパスワードの入力が求められる設計としている（具体的なパスワードは配布マニュアルに記載）。以降、EPELL-S に実装されたすべての実行ボタンには、同様のパスワード保護が適用されている。

2.1.2. 自動リスト化機能

「feedback」シートの画面例その1を図3に示す。児童の情報が各シートに分散している場合、通常は各シートを個別に開いて確認する必要があり、一覧性が低いため、データを俯瞰的に参照したり比較したりすることが困難である。今回実装したEPELL-Sの「自動リスト化機能」を活用することで、各学習者が入力したデータを自動的に抽出して一覧表示することが可能となる。具体的には、指定した特定のセル番地に入力されている全児童のデータが、自動でリスト化される仕組みである。情報を一覧表示させるためには、図の46行目にある①「各学習者用シートの特定のセル番地」と、図の50行目にある②「一覧表示させる列番号（今回はD～H列のいずれか）」を指定する。②において、D～H列の複数列から選択可能としたのは、同一児童のデータを時系列

で比較・参照できるようにするためである。これにより、例えば同じ児童の「振り返り」の内容について、過去と現在の記述を並べて変容を見取ることなどが容易となる。運用上の留意点としては、各児童に入力させる情報のセル番地を全シートで統一しなければならない点が挙げられる。下図の例であれば、本機能を実行することで、各児童の学習者用シートのセル「A8」に入力されている情報が、「feedback」シートのD列へと自動的に抽出・転記されることになる。

図2 「settings」シートの画面例

	A	B	C	D	E	F
1						Run
	↓番号	↓登録の有無	↓氏名	↓メールアドレス (シートをロックする場合)	↓シート名	
2	1	登録する	くらた	shin1222kurata@kurata.edu.nagasaki-u.ac.jp	1くらた	
3	2	登録する	しん		2しん	
4	3	登録する			3	
5	4	登録しない				
40	39	登録しない				
41	40	登録しない				
42	↑番号	↑登録の有無	↑氏名	↑メールアドレス	↑シート名	
43						
44				(入力任意) プログラム実行後・削除可能		
45						

図3 「settings」シートの画面例その1

	A	B	C	D
1	↓番号	↓シート名	↓フィードバック	
2	1	1くらた		くらたの書き込み
3	2	2しん		しんの入力内容
4	3	3		マイゴールを3が書いた内容
5	4			- no sheet -
6	5			- no sheet -
40	39			- no sheet -
41	40			- no sheet -
42	↑番号	↑シート名	↑フィードバック	
43				
44				
45	抽出する列番号と行番号			
46	A	8		
47	↑列番号 A-Z	↑行番号 1-100	→	抽出
48				
49	出力する列番号			
50	D			
51				

2.1.3. フィードバック自動入力機能

「feedback」シートの画面例その2を図4に示す。通常、教員が児童ごとのシートにフィードバックを記述する場合、各シートを逐一切り替えて内容を確認し、入力する作業を繰り返さなければならない。この方法では、前項(2.1.2)と同様に、学級全体の傾向を把握したり、他の児童の記述と比較したりしながらフィードバック内容を検討することが困難である。今回実装した

EPELL-S の「フィードバック自動入力機能」を活用することで、一覧表上で検討・入力したフィードバック内容を、各児童のシートへ自動で一括送信する作業が可能となる。具体的には、「feedback」シートの D 列～H 列に抽出された各児童の記述を参照しながら、C 列に返信したいフィードバック情報を入力する。その後、「コメント」ボタンをクリックすることで、入力した各内容がそれぞれの学習者のシートへ自動的に個別返信される。この処理を実行するためには、C 列へのフィードバック情報の入力に加え、セル A55 および B55 に「送信先となる各学習者用シートの特定のセル番地」を事前に設定しておく必要がある。下図の例であれば、C 列に入力した内容が、各児童の学習者用シートのセル「B8」へと自動的に転記（反映）される仕組みとなっている。

図 4 「feedback」シートの画面例その 2

	A	B	C	D
1	↓番号	↓シート名	↓フィードバック	
2	1	1くらた	●●が前回よりも良くなったと思います！	くらたの書き込み
3	2	2しん	△△を意識すればさらに良くなりますよー	しんの入力内容
4	3	3	3さんの■がとても魅力的でした。継続しましょう！	マイゴールを3が書いた内容
5	4			- no sheet -
52				
53				
54	フィードバックを返す列番号と行番号			
55	B	8	→	コメント
56	↑列番号 A-Z	↑行番号 1-100		
57				

2.2. GAS なし e ポートフォリオ汎用テンプレート (EPELL-N)

Can-Do 評価共有を目的とした「全体共有用」シートの画面例を図 5 に示す。2.1 で説明した EPELL-S は、単純作業の自動化により教員の業務負担軽減に大きく貢献する一方で、自治体や学校のセキュリティポリシー（運用ルール）によっては GAS が利用できない可能性が想定される。そこで、Google Workspace for Education 環境であれば原則として導入できるよう、GAS を用いない e ポートフォリオ汎用テンプレートも開発した。EPELL-S と比較すると手動での操作が一部発生するものの、Google スプレッドシートの標準関数等を駆使することで、指導と評価の一体化を効率的に支援し、教員の業務負担を可能な限り軽減する設計となっている。主な特徴として、「一覧表示機能」および「リンク作成機能」が挙げられる。なお、EPELL-S と同様に、本テンプレートにおいても児童が自身のマイゴールや学習成果物、振り返りの内容などを 1 つのシートに集約する形式の e ポートフォリオを想定している。さらに、EPELL-N では Can-Do 評価の組み込みを推奨しており、テンプレートの初期設定において、各単元の Can-Do 評価を学級全体で共有するためのシート「全体共有用」を設けている（ただし、同シートの使用は任意である）。

図5 「全体共有用」シートの画面例

	A	B	C	D	E	F	G	H
1								
2		Unit 1		Unit 2		Unit 3		Unit 4
3								
4								
5	目標		目標		目標		目標	
6	S		S		S		S	
7	A		A		A		A	
8	B		B		B		B	
9	C		C		C		C	
10								
11	お知らせ	・画像（がそう）・音声（おんせい）・動画（どうが）を共有するときは、いったん自分のGoogleドライブにデータをアップロードし、そのデータの共有URLを貼り付けましょう。そのとき、他の人が見られるように共有の設定をしておきましょう。	お知らせ		お知らせ		お知らせ	
12								

「tpl1」シートの画面例を図6に示す。初期のシート構成として、一覧表示機能およびリンク作成機能を利用するための「教師用」シートと、児童用シートである「1~40」がプリセットされている。「1~40」の名称は児童の出席番号を想定しており、関数の参照等への影響を考慮し、シート名は変更せずに運用する仕様となっている。また、付属シートとして、1年分のCan-Do評価を参照するための「全体共有用」、学習者用シートの雛形案を提示する「tpl1」、および教員が自由に雛形を作成できるよう準備された白紙シート「tpl2」が用意されている。「tpl1」の雛形案の一部を下図に示す。

図6 「tpl1」シートの画面例

	A	B	C	D	E
1	[なまえ]				
2	●●●	Unit 1			Unit 2
3					
4		まず名前を書かせるよう指示をしましょう!			
5	目標		Unitの内容とCan-Doリストの内容は、シート「全体共有用」からコピーしましょう。ぜひ児童自らにコピーさせましょう。		
6	S				
7	A				
8	B				
9	C				
10					
11	1	●●月●●日(●●) (日付を入力)		1	●●月●●日(●●) (日付を入力)
12		マイゴール			マイゴール
13			示されたCan-Doリストをふまえて、自分のゴールを入力させましょう。		
14		今日の成果 (データがある場合は、Googleドライブにデータを保存しURLを貼り付けてください)			今日の成果 (データがある場合は、Googleドライブにデータを保存しURLを貼り付けてください)
15			録音・録画したデータがあれば共有URL(設定に注意)を貼り付けましょう。タップ表示がスッキリすると思います。もちろんテキストもOKです。		
16		振り返ってみて気づいたこと (内容や学び方)			振り返ってみて気づいたこと (内容や学び方)
17			振り返りを書く場所です。学習内容だけでなく学び方についても振り返りましょう。		
18		先生からの連絡事項			先生からの連絡事項
19		▲ここは先生がコメントするところです。			▲ここは先生がコメントするところです。
20			先生はここにコメントを残しましょう。シート「教師用」からリンクで移動すると便利です。		
21	2	●●月●●日(●●) (日付を入力)		2	●●月●●日(●●) (日付を入力)
22		マイゴール			マイゴール
23					
24		今日の成果 (データがある場合は、Googleドライブにデータを保存しURLを貼り付けてください)			今日の成果 (データがある場合は、Googleドライブにデータを保存しURLを貼り付けてください)
25					
26		振り返ってみて気づいたこと (内容や学び方)			振り返ってみて気づいたこと (内容や学び方)
27					
28		先生からの連絡事項			先生からの連絡事項
29		▲ここは先生がコメントするところです。			▲ここは先生がコメントするところです。

2.2.1. 一覧表示機能

「教師用」シートの画面例の一部を以下の図7に示す。EPELL-S の項でも述べた通り、通常の運用ではデータが各シートに分散しているため、それらを俯瞰的に参照したり比較したりすることが困難である。また、EPELL-N は GAS を用いない仕様であるため、スクリプトによる各児童データの自動抽出処理を行うことができない。そこで、文字列として記述されたセル参照を実際のセル参照に変換し、動的なデータ参照を可能にする INDIRECT 関数を用いることで、各児童の情報を一覧表示できる「一覧表示機能」を実装した。具体的には、一覧表示させたいセル番地が「B13」である場合、列番号「B」をセル D3 に、行番号「13」をセル D4 に入力することで、6 行目以降にすべての学習者用シートのセル B13 に入力されている情報が自動で抽出・表示される仕組みとなっている。さらに、児童間の比較だけでなく、1 人の児童における時系列での前後比較を可能にするため、リスト表示欄を D 列から H 列までの計 5 列設けている。

図7 「教師用」シートの画面例その1

	B	C	D	E
1				
2	メモ→	氏名		
3	列番号→	A ▼	B ▼	
4	行番号→	2	13	
5	シート名↓	↓	↓	↓
6	1	●● 一郎	・・・を頑張る!	
7	2	●● 二郎	・・・が早く言えるようになる	
8	3	●● 三郎	・・・をがんばる!	
9	4	●● 史朗	・・・を意識して話せるようになる。	
10	5	●● 吾郎	相手が・・・と思ってもらえるように頑張る。	

2.2.2. リンク作成機能

「教師用」シートの画面例の一部を図8に示す。学級全体の傾向の把握や、他の児童との比較を通じたフィードバックの検討を支援するため、EPELL-S では、一覧表に入力したフィードバック内容を各児童のシートへ自動入力（転記）する機能を備えていた。しかし、GAS を用いない EPELL-N では、この自動入力処理を行うことができない。そこで代替策として、HYPERLINK 関数を用いることで、設定したセル番地へ直接遷移できるリンクを自動生成する機能を実装した。具体的には、一覧表示機能と同様に、フィードバックを入力したいセル番地が「B19」である場合、列番号「B」をセル I3 に、行番号「19」をセル I4 に入力する。これにより、J 列の 6 行目以降に、各児童の該当セルへ直接移動するためのリンクが表示される仕組みとなっている。このリンクをクリックするだけで各学習者用シートの目的のセルへ瞬時に移動できるため、シートを切り替えて入力先のセルをその都度探す手間を省くことができる。実際の運用としては、まず I 列の 6 行目以降に各児童へのフィードバック内容をまとめて入力しておき、そのテキストをコピーした上で隣接する J 列のリンクをクリックし、遷移先のセルにペースト（貼り付け）するという手順が想定される。EPELL-S の自動入力機能と比較すると手動でのコピー＆ペースト作業が発生するものの、すべての学習者用シートを個別に開き、特定のセル番地を目視で探しながら入力する従来の手法に比べれば、教員の業務負担は確実に軽減できると考えられる。

図8 「教師用」シートの画面例その2

	B	C	I	J	K	L
1						
2	メモ→	氏名	↓フィードバック先のセル番地			
3	列番号→	A	B			
4	行番号→	2	19	リンク		
5	シート名↓	↓	フィードバック (案)	↓		
6	1	●● 一郎	全体的によく頑張りました!!!!	▶▶▶シート1		
7	2	●● 二郎	●●●が成長したと思います!	▶▶		
8	3	●● 三郎	△△△があれば更に良くなりそうです!	▶▶		
9	4	●● 史朗	■●●がとっても印象的で良いです!	▶▶		
10	5	●● 吾郎	聞き手の○○○○が最高ですね!	▶▶▶シート5		

3. 今後の展望

本稿では、小学校英語教育における自律的な学びのための形成的評価を支援する e ポートフォリオ汎用テンプレートとして、GAS を活用した EPELL-S と、GAS を用いない EPELL-N の 2 種類を開発し、その構成と機能について報告した。今後は、これらのテンプレートを実際の授業実践で継続的に活用し、その教育的効果と運用上の実効性を実証的に検証していくことが必要である。

今後は、本研究を小学校英語教育における一単元・一学期間の活用にとどまらず、より長期的な視点からの検討へと発展させる必要がある。例えば、学年をまたいだ継続活用によって、児童が自らの成長をどのように認識するのか、また、小学校段階で育まれた自己調整的な学びが中学校以降の外国語学習にどのようにつながるのかを追跡的に検証することは、大きな研究課題である。こうした縦断的な検討を通して、本テンプレートが一時的な授業支援ツールにとどまらず、児童の学びの履歴を支える基盤として機能し得るかを明らかにしていきたい。

以上のように、今後は、本テンプレートの実践の有効性を多面的に検証しつつ、学校現場の実情に即した改善を重ねることで、小学校英語教育における自律的な学びを支える形成的評価のあり方をより具体的に示していくことを目指す。

参考文献

- 文部科学省(2018). 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版.
- 森本康彦(2015). e ポートフォリオとしての教育ビッグデータとラーニングアナリティクス. コンピュータ & エデュケーション, 38, 18-27.
- Ohta, A., Kurata, S., & Izumi, E. (in press). Advantages and considerations of e-portfolios using general-purpose cloud tools in elementary school English education. *The IAFOR International Conference on Education - Hawaii 2026 Official Conference Proceedings*.

プロジェクト報告

小学校英語の読み書き活動における Can-Do 評価

田縁眞弓（京都光華女子大学）
アレン玉井光江（青山学院大学）

1. はじめに

本報告書は、本科研において取り組んできた小学校英語の読み書き活動に関する Can-Do 評価の研究成果を報告することを目的とする。本報告書は、二名の研究者がそれぞれの研究サイトで実施してきた研究の報告から構成されており、前半をアレン玉井が、後半を田縁が担当する。

それぞれの研究を紹介する前に、外国語の教科化に伴い、「聞く」「話す（やり取り・発表）」「読む」「書く」の4技能5領域について学習目標が定められたことを確認しておきたい。本報告では、特に「読むこと」と「書くこと」に関する目標に焦点を当てる。まずは、「読むこと」の目標である。

- ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。
- イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。

これに従うと、アルファベットの文字を字形として認識し、さらにその名称を発音できることが最初の目標となっている。この目標における「読み方」とは音ではなく、文字の名称の読み方を指していることに留意する必要がある。

次の目標は、中学年の外国語活動における「聞くこと」「話すこと」の学習活動を通して、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにすることである。また、「日常生活に関する身近で簡単な事柄について、掲示、パンフレットなどから自分が必要とする情報を得たり、絵本などに書かれている簡単な語句や基本的な表現を識別したりするなど、言語外情報を伴って示された語句や表現を推測して読むようにすることを示している」（文部科学省『学習指導要領』p.78）とされている。さらに、イの目標については次のような説明が加えられている。「英語の文字には、名称と音がある。児童が語句や表現の意味が分かるようになるためには、当然のことながらその語句や表現を発音する必要があり、文字の音の読み方は、そのための手掛かりとなる。したがって、ここで示されている目標に関して指導する際には、児童の学習の段階に応じて、語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導することとする」（同p.78）。つまり、アルファベットの文字に関しては、その名称と音の両方の学習を小学校で行うことになっている。

次に、「書くこと」の目標であるが、次のような二つが示されている。

- ア 大文字、小文字を書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
- イ 自分のことや身近で簡単な事項について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

最初の目標では、特に小文字について、文字の高さの違いを意識させたり、文字の形の特徴を押さえたりするなど、指導上の工夫が必要であるとしている。また、「語順を意識して」とは、語の順番を入れ替えると意味が大きく異なってしまうことから、英語では意味の伝達において語順が重要な役割を担っていることを示している。したがって、語の配列といった特徴を日本語との比較の中で捉えて指導することが有効であるとされている。

次の目標については、「英語で書かれた文、またはまとまりのある文章を参考にして、その中の一部の語、あるいは一文を自分が表現したい内容のものと置き換えて文や文章を書くことができるようにすることを示している」（文部科学省『学習指導要領』p.82）。

2. 文字指導と音と文字との理解研究の研究について（アレン玉井光江）

ここでは、アレン玉井（2025）で紹介している、小学校児童を対象とした「読み書き」に関する三つの研究（以下、研究A・B・C）について報告する。

2.1 三つの研究に参加した児童の特徴

研究の対象となった児童は、すべて東京都内の公立小学校に在籍する児童であった。当該地域では、2003年度より「構造改革特別区域研究開発校」制度および「教育課程特例校」制度を適用し、教科としての英語教育を実施している。第1学年から英語の授業が行われており、当該小学校は、この地域の中でも特に積極的に英語教育に取り組んでいた学校であった。全員が、1・2年生の時に年間20回程度、3年生からは週1回、年間約35回の英語の授業を受けていた。1・2年生では学級担任と外国人ALTが、3年生以降は学級担任と日本人英語教師（JTE）がチーム・ティーチングの形態で英語の授業を行っていた。当該研究者は、当該小学校で実施されていた英語プログラムの開発者であり、学級担任とともに授業を行った。研究に参加した小学校教員は、全員が英語教育に対して高い関心と理解を示していた。

本研究に係るプログラムでは、アルファベット認識から始め、音韻認識能力を高め、文字と音の関連について教えるなど、体系的な指導を行った（アレン玉井，2022）。これらの活動は独自に作成したワークシートを用いて進められ、各授業の冒頭約10分間を使って実施された。

研究Aの参加者は、2011年から2014年に在籍していた6年生、計249名（男子112名、女子137名）であった。研究Bの参加者は、2022年度の6年生68名（男子32名、女子26名、不明10名）であった。研究Cの参加者は、2023年度の6年生93名（男子46名、女子47名）であり、教科化以降の対象者であったため研究Bの参加者とともに、高学年において週2回の外国語の授業を受けていた。

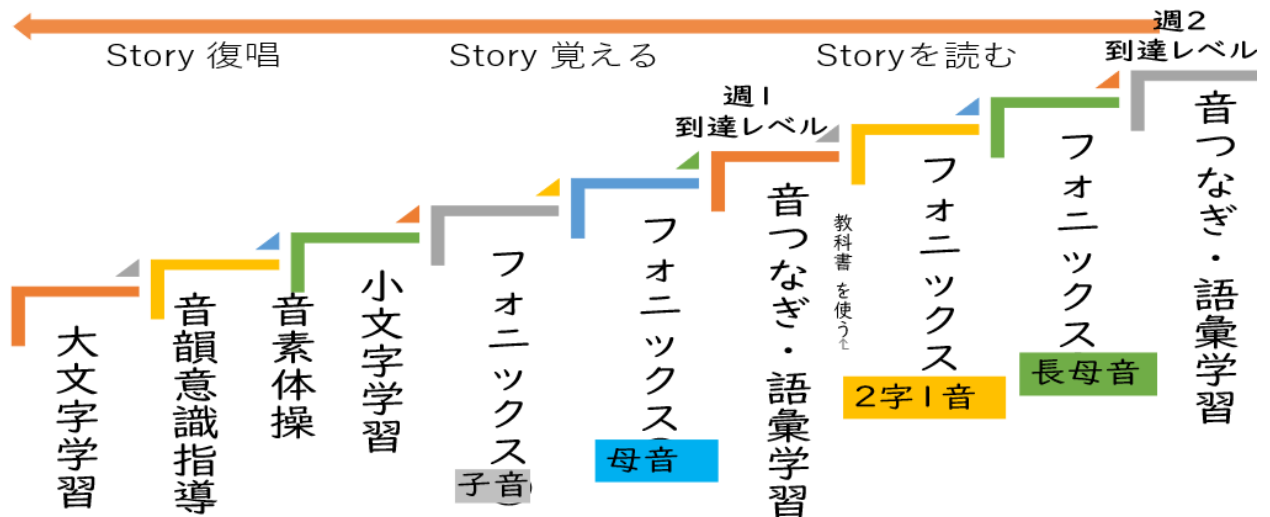
2.2 参加児童が体験した英語リタラシープログラム

当該地域では、図1に示すようなリタラシープログラムが実施されている。特に、外国語が教科化された2020年度以降は、高学年の授業が週2回に増加しただけでなく、リタラシー指導の開始学年が3年生へと拡張された。その結果、6年生の段階では、それまで定着が難しかった二字一音の子音字、長母音、二字一音の母音字の学習が進み、児童はより多くの単語を読む（音声化する）ことができるようになり、さらに書く力も身に付けている。

また、本稿では詳しく取り上げないが、図1に示すように、リタラシーのトップダウン的アプローチとして昔話を用いており、それを **recite（暗唱）** する活動を毎回7分程度行っている。特別に作成された物語の **recite** 用英文をすべて言えるようになった後、高学年ではその原稿を読む活動へと発展させている。

このプログラムの特徴の一つに、「音素体操」の導入がある。これは、大文字を理解し、ある程度の速さで書けるようになった頃に導入される活動であり、アルファベットの文字の名称を音素に分け、共通する音には同じジェスチャーを対応させるものである。これにより、児童は音素認識を深め、次段階の文字と音の対応関係の学習の礎を築くことができる。また、同時期に音韻認識を高める活動も多く取り入れている。さら他の特徴として、日本語の特徴を踏まえ、文字と音との関係を①子音、②母音、③二字一音、④長母音の順で導入し、単語をディコードできるよう指導を行っている。

図1 音を大切にしたりタラシープログラム



2.3 三つの研究の目的と使用した測定方法

それぞれの研究では、以下に示す研究目的を達成するため、対応する測定方法を開発した。自己評価に関する項目については、別のセクションで具体的に説明する。

(1) 研究Aの研究目的と測定方法

研究Aでは、参加児童がアルファベットの文字とその名称に関する読み書き能力をどのように自己評価しているのか、また、その自己評価が測定された実際の能力とどのように関連しているのかを調査した。測定方法としては、アルファベットの文字およびその名称に関する知識・技能、ならびに音に関する知識・技能を測定するテストを実施した。また、それぞれの技能に対する自己評価を測定するため、4段階のリッカート尺度を用いた質問項目を開発した。

(2) 研究Bの研究目的と測定方法

研究Bでは、研究Aと同様に、参加児童の文字・名称・音の理解および産出に関する自己評価と、実際の能力との関連を検討した。能力測定には研究Aと同様のテストを使用し、自己評価については、Can-Do評価尺度を用いたアンケートを実施した。

(3) 研究Cの研究目的と測定方法

研究Cにおいても、研究AおよびBと同様に、参加児童が文字・名称・音の理解および産出についてどのように自己評価しているのか、ならびにそれと実際の能力との関連を検討した。さらに研究Cでは、これらに加えて、単語ディコーディングに関する自己評価も行った。能力測定については、研究A・Bと同様の文字に関するテストに加え、単語およびリーディングのテストを実施した。自己評価については、リッカート尺度とCan-Do評価尺度を組み合わせた項目を用いた。

2.4 使用したリッカート尺度項目とCan-Do尺度項目について

(1) 研究Aで使用したリッカート尺度

表1が示すように、研究Aで使用したリッカート尺度はそれぞれの技能に対する能力を4段階で自己評価するものであった。

表1. 4段階のリッカート尺度による文字およびフォニックスに対する自己評価

技能	Can-Do Statements
アルファベット 大文字	アルファベット大文字を読むことができる 【1 全然できない・2 できない・3 まあできる・4 よくできる】
	アルファベット大文字を書くことができる 【1 全然できない・2 できない・3 まあできる・4 よくできる】
アルファベット 小文字	アルファベット小文字を読むことができる 【1 全然できない・2 できない・3 まあできる・4 よくできる】
	アルファベット小文字を書くことができる 【1 全然できない・2 できない・3 まあできる・4 よくできる】
フォニックス	アルファベットの文字と音の関係が理解できる。 【1 全然わからない・2 わからない・3 まあわかる・4 よくわかる】

(2) 研究Bで使用した Can-Do 評価尺度

研究Bでは、それぞれの技能について、指導した方法に合わせて4段階の Can-Do 尺度を作成した。

① 文字の名称を聞いてどの文字かわかる。



② 文字を見てその名称を言える。



③ 文字の名前を聞いて文字が書ける。



④ 文字の音を聞いてどの文字かわかる。



⑤ 文字の音を聞いて文字が書ける。



(3) 研究Cで使用したリッカート尺度と Can-Do 評価尺度

- ① 文字に関する自己評価は、研究Bの①～③の Can-Do 評価尺度を使用
- ② 文字とそれに対応する音についての自己評価は、表2のリッカート尺度を使用
- ③ 単語のディコーディングに関しては授業の進め方に合わせて図2の5段階評価を開発

表 2. 3段階のリックカート尺度による文字とそれに対応する音に関する自己評価

技能	Can-Do Statements
子音	音を聞いて、子音 (b, c, d, f など) の文字がわかる。 【1 全然わからない・2 まあわかる・3 とてもよくわかる】
子音 2重字	音を聞いて、2つの文字で1つの音を表す (sh, ch, th など) 文字がわかる。 【1 全然わからない・2 まあわかる・3 とてもよくわかる】
短母音	音を聞いて、cat, dog, pig などに含まれる短母音字がわかる。 【1 全然わからない・2 まあわかる・3 とてもよくわかる】
長母音	音を聞いて、cake, home, rice peach などに含まれる母音字がわかる 【1 全然わからない・2 まあわかる・3 とてもよくわかる】

図 2. ③単語のディコーディングに関する自己評価

どのレベルの単語を読むことができるのか適当なところに○をつけてください。



2.5 三つの研究の結果

(1) 研究 A の研究結果

本研究では、①大文字が読める、②大文字が書ける、③小文字が読める、④小文字が書ける、⑤文字と音の関係がわかる、の5項目について、「できる/できない」の2択ではなく、「全然できない」「できない」「まあできる」「よくできる」の4段階評価を用いた。測定は6年生の学年度末に実施したため、多くの児童が「まあできる」または「よくできる」と回答していた。そこで、これら2群に分け、テスト得点に差があるかどうかを Mann-Whitney のU検定により分析した。その結果、すべての項目において「まあできる」群と「よくできる」群の間に統計的に有意な差が認められた。これは、参加者が自身の能力を概ね適切に自己評価していることを示す結果である。

(2) 研究 B の研究結果

この研究においても、自己評価と実際に実施した文字理解テストの結果を比較し、自己評価の正確性について検証した。その結果、名称を聞いてアルファベットの大文字・小文字を書く技能については、児童が自らの文字に関する知識・技能を比較的正確に自己評価していることが明らかとなった。すなわち、自己評価の正確性と有用性が示唆されたといえる。児童は Can-Do 記述文を読みながら学習を振り返ることで、自身の能力を比較的的確に把握できていたと考えられる。

一方、音と文字の関係に関しては、音を聞いてその文字を書く技能については自己評価の正確性が確認されたものの、音を聞いて文字を選択する形式のテストにおいては、今回のデータからは十分な一致を確認することができなかった。この点については、使用した Can-Do 記述文および当該能力を測定するテスト項目の妥当性について、今後さらに検討する必要がある。

(3) 研究 C の研究結果

本研究では、文字と名称に関する知識および単語が読めることについては Can-Do 評価尺度を用い、文字と音の関係については、子音、2 字 1 音子音、短母音、長母音（2 字 1 音母音を含む）に区分し、それぞれ 3 段階のリッカート尺度によって参加児童に自己評価を求めた。さらに、参加児童には文字・名称・音に関するテスト、単語テスト、およびリーディングテストを実施した。まず、自己評価間の相関を分析した結果、①大文字と小文字、②子音と 2 字 1 音子音、③短母音と長母音の間に、それぞれ強い相関が認められた。次に、各能力を測定したテスト得点と自己評価との関連を検討したところ、アルファベット知識（名称を聞いて文字を書く）テストと最も強く関連していたのは、DECODE の自己評価であった。また、音と文字に関する知識・技能（音を聞いて文字を選択する、あるいは書く）を測定したテストとも、DECODE の自己評価が最も強い相関を示した。語彙知識テストにおいても最も強い相関を示したのは DECODE であり、リーディングテストとの相関も DECODE が最も高かった。したがって、すべてのテスト得点の合計との相関においても、DECODE の自己評価が最も強い関連を示した。

さらに、今回開発した単語読みに関する 5 段階の Can-Do 評価尺度による自己評価は、児童の単語知識やリーディング力を予測する指標となり得ること、またリタラシーの基礎的知識・技能であるアルファベット知識や文字と音の関係に関する知識・技能の習得度を測定する尺度となる可能性を示唆している。

2.6 まとめと考察

研究 A では、児童は文字と名称、また文字と音についての知識・技能をリッカート尺度で自己評価した。さらにそれぞれの能力を測定し、自己評価と比較した。その結果児童は自分の能力を正しく評価していることがわかり、文字の名前についての知識・技能を丁寧に、また適切な目標をもって指導することが重要である。

研究 B においては、リッカート尺度ではなく Can-Do 評価尺度を用いて自己評価を実施し、測定した技能との関連を検討した。その結果、本研究においても、文字とその名称に関する能力については、児童が自らの能力を比較的正確に評価していることが確認された。また、児童の学習の振り返りという観点からは、リッカート尺度よりも Can-Do 評価尺度を用いる方が有用である可能性が示唆された。

一方、文字と音に関する自己評価については、産出能力（音を聞いて対応する文字を書く）においては一定の正確性が認められたものの、受信能力（音を聞いて対応する文字を選択する）については、その正確性は確認されなかった。自己評価項目の内容や表現について改善を検討する必要があることがわかった。

研究 C では、それまでの研究結果を踏まえ、指導方法を反映させた自己評価方法を採用した。具体的には、文字と名称については Can-Do 評価尺度を、文字と音についてはリッカート尺度を、そして単語ディコーディングについてはベンチマーク的な 5 段階評価を用いた。その結果、測定された文字の名称および音に関する能力、単語力、さらにはリーディング能力のいずれとも最も強く関連していたのは、単語ディコーディングの自己評価であった。

児童の自己評価については、年齢が低いことから自らの能力を適切に評価できず、正確性に欠ける可能性があるとの指摘がある (Fallon & Schwab-Stone, 1994)。こうした問題は、往々にして評価項目の曖昧性が評価の正確性を左右することに起因していると考えられる。3 つの研究では、Can-Do 評価尺度、評価項目を明確にしたリッカート尺度、さらにベンチマーク的尺度を開発し、それらを用いることで、児童であっても自らの能力を比較的正確に評価できることを示した。ただし、その際に重要なのは、Ross (1998) が指摘するように、①自己評価の項目が実際の学習場面に即していること、②学習者が授業で実際に体験した内容に基づいていることである。本研究で紹介したすべての調査において、参加児童は通常の授業で実施している活動を基盤とし、同様の方法で自己評価アンケートに回答した。

また、Butler (2016) は、自己評価が小学生の英語学習者にとっても自己調整学習を促進するものであると提唱している。本研究においても、このような自己評価を通して、児童が次の学習目標をより明確に捉え、自らの学習を調整していく様子が観察された。

3. ストーリーテリングを使った音から文字への指導（田縁真弓）

ここでは、本科研で取り組んできたストーリーテリングを使った文字指導の研究を報告する。本研究では、2020年度から教科化された小学校外国語科の学習指導要領における「読むこと」の指導目標、とりわけ（イ）「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」という点に着目する。現在、学校現場では音声から文字へと結びつける指導が行われる一方、その前段階に不可欠な「語が個々の音素から成ることに対する気づき」である音韻認識育成については研究が十分に進んでいない。

そこで本研究では、①日本の小学生の言語的背景に適した音韻認識指導の方法を開発し、②絵本にその音韻認識の指導要素を取り入れた教材を作成し、③授業実践を通じてその成果や評価事例を検証することを試みた。こうした取り組みを通じて、小学校から中学校への学びを円滑につなぐ新しい「読むこと」指導のモデルを提示し、次期学習指導要領を見据えた具体的な教材開発と教育実践の提案を行いたいと考えた。

3.1 研究の背景

小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語活動・外国語編（文部科学省，2017）は、「児童の学習の段階に応じて、語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導すること」（p. 78）と述べている。この方針を受け学校現場では、文字と音の対応を知識として提示し、未知語であっても文字から音声化（decoding）し、さらに意味理解につなぐ指導法であるフォニックスが注目されている（National Reading Panel, 2000; Ehri, 2005）。英語圏の、音声言語がある程度完成した子どもにとってフォニックスは読み書き技能習得に不可欠とされ（National Reading Panel, 2000; Department for Education and Skills, 2007）、その有効性が理論的に確立している。しかしながら、日本の小学校における英語教育は、学習時間や英語インプット量が限定的であり、母語の音韻体系とも大きく異なるため、英語圏の方法論をそのまま適用することには課題があると考えられる。実際、学習指導要領も「小学校では音声と文字を関連付ける指導に留める」ことを求め（文部科学省，2017，p. 78）、「発音と綴りの規則まで指導することを意味しない」（p. 100）と明示している。つまり、フォニックスの安易な早期導入には慎重であるべきとの立場が示されている。

一方、音韻認識が読字習得の基盤として重要であることは多くの研究で明らかにされている（Ehri *et al.*, 2001; Gillon, 2004）。音韻認識は語の音声的構造への気づきを促し、その後の読字指導の効果を高めることが報告されている。日本の小学生を対象とした研究においても、音韻認識指導が効果を示すことは一定程度明らかにされている。（池田，2015）

しかし、既存研究の多くは音声操作を中心に据えており、児童が既に文字に接触している状況を前提とした指導の枠組みについては十分に検討されていない。また、意味ある文脈と結びついた活動の中で音韻認識を育成する実践研究は限られている。さらに読み指導の言語活動例として、文部科学省（2017）は、小学校高学年の外国語科において、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」を「絵本などの中から識別する活動」を「読むこと」の典型的な言語活動として明記しているにも関わらず、その絵本指導自体もまだまだ指導現場に認知されていない。英語圏においては、就学前に音韻認識を育て、文字導入をスムーズに行うが、すでに小学校3年生でローマ字指導を受け、年齢的に十分文字の存在を意識している日本の小学生相手ではこの順序を再現することは出来ない。このような状況の中で、日本の教育文脈に適した新たなアプローチを見出すことは、今後の小学校の英語指導および小中接続においての課題である。さらに、絵本のストーリーという「意味ある文脈」を媒介として、絵本を通して音韻認識を指導する試みを行うことに意味があると考えた。英語絵本は児童の関心を高め、言語的気づきを自然に促す教育的資源であり、従来のボトムアップの練習とは異なり、理解・表現・音声操作を統合的に経験させることが可能である。

3.2 研究の目的

以下3点を具体的な研究目的とした。

- ① 小学生を対象に、音韻認識を反映した絵本教材を開発・作成すること。
- ② 絵本教材を用いた指導実践を通して、音声と言語の対応関係に気づかせる指導法を設計・検

証すること。

③ トップダウン・ボトムアップの指導が自己評価できる指標と段階設計を作成すること。

これらの目的は、日本の小学生が「英語の文字に親しんでいる」という特有の状況に着目し、その中で音韻認識をどのように育成できるかを問うこと、また文字に親しみのある学習者であるからこそテキスト（文字）を伴った絵本をその教材として開発することにある。

3.3 絵本教材の作成とめあて

音韻認識を高める要素を組み込み独自に作成した英語絵本は、すでに共同研究によって開発し2025年小学校英語教育学会秋田大会ではそのプレ・ポストテスト〔＝音韻認識における音の取り出し〕の結果と分析とともに発表した。（オーガスティン・池田・田縁）その教材の内容は以下のようなものである。

ストーリーの内容

男の子と犬のラッキーのある夏の一日が、表紙を含めた7ページの物語で展開される。7種のCVC語（※下線の語）がリズムカルに繰り返される。

Lucky the Dog is under the sun.

Lucky the Dog takes a nap under the sun.

Lucky the Dog is very hot.

“Lucky the Dog, sit by the fan.”

It's so cool!!

They take a nap by the fan. (39 words) 作・絵 オーガスティン真智

（訳）

犬のラッキー 太陽の下

犬のラッキー お昼寝 太陽の下

犬のラッキー 暑さに溶けちゃうよ

「ラッキー 扇風機のところへおいでよ」

ああ なんて涼しい

お昼寝は 扇風機のおとなり

このお話を使って、指導する対象は小学校中学年から高学年と幅広く設定したが、これは1年生からたくさんの英語の音声に触れる機会を持つ私立小学校か、3年生から週1回外国語活動を行う一般的な公立小学校かによって異なる。しかし、4技能の目標は以下のように設定している。

目標

読むこと	絵や音声をたよりに、書かれた英語を読もうとしている。
書くこと	音声で慣れ親しんだ英語を選ぼうとしている。
話すこと	お話の内容などについて簡単な英語で話せる。
聞くこと	お話を聞いて、絵や読み方で内容が理解できる。

3.4 ストーリー構成

ストーリーは、子どもたちの音韻認識向上を目指して、CVC語を集めて書かれた。CVCとはConsonant-Vowel-Consonantの略で、英語の音の並びが「子音+母音+子音」になっている3文字語（例：cat, dog, sun, bedなど）をここでは指す。このCVC語が、英語を外国語として学ぶ子どもにとってはわかりやすく、特に日本の小学生は3年生から国語でローマ字を習っているの、それ以降の学年にこの本を読み聞かせると、自ら読もうとしたり、読めた気持ちになったりする様子が広く観察された。

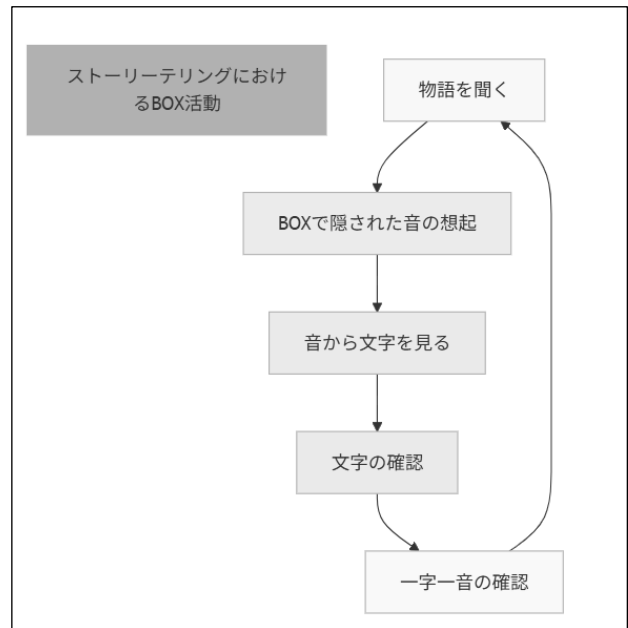
ストーリーの中で CVC 語を何度も登場させることで、①音から文字への気づきが生まれ、②物語の文脈が支えとなり内容理解への興味が持続し、③「登場人物・出来事」と結びついた英語は記憶に残りやすいのでそこで出てくる単語を使っての音の操作にも挑戦しやすいと考える。

3.5 指導実践

これまでの研究から「読むこと」の系統的な指導をさらに進めるため、次のような単元計画を作り、私立小学校の4年生28名を対象に指導実践を行った。各時15分ほどの時間を使い、また番外編のエルコニンカード活動は、ストーリーに出てきた7つの CVC 語からなるフラッシュカードを用いて、5分ほどの活動とした。

(1) 第1時 読み聞かせ（内容理解を促すトップダウン的指導）

(2) 第2時 BOXでCVC語を隠して読む活動①（音から文字へのボトムアップ的指導）
記憶から隠された CVC 語を音声で言わせたとともに、文字をみせる。



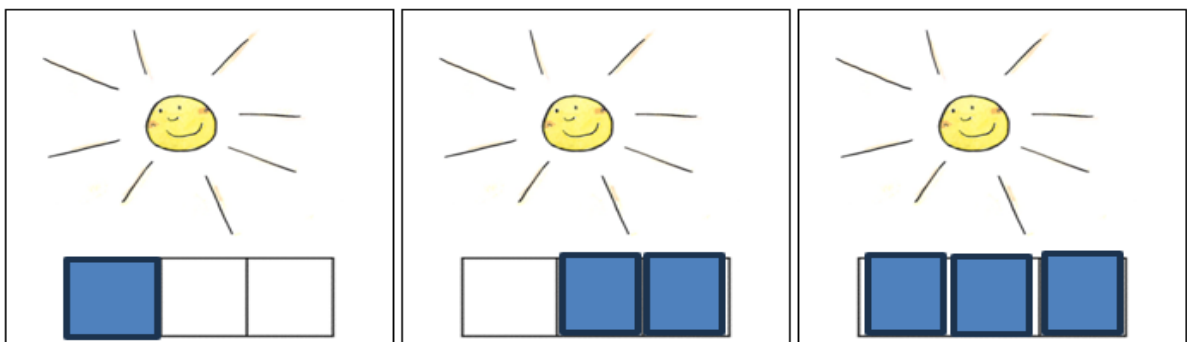
(3) 第3時 BOXでCVC語を隠して読む活動②（エルコニンカードを使って音から文字へのボトムアップ的指導）

CVC 語の意味を表わすイラストと、その下に Elkonin boxes (Elkonin, 1973) と呼ばれる3つの□（四角）が1列に繋がったものを提示する。1つが太い枠線で囲まれており、児童はその位置にある音素を分割して発音し、さらに取り出した3つの音素を順番に混成してできる語を発音する。

(4) 第4時 ワークシートを使っての振り返り
ストーリーの中に出てきた CVC 語を使って、一字一音の確認を行う。また、ストーリーの中に出てきた文を用いて、正しい単語を選ばせるといったワークシートを使いゆるやかに書く活動へとつなげる。

例) Lucky the Dog takes a (map / nap). *正しい単語を選び○をしなさい。

(5) 番外編 短時間を使って、エルコニンボックスカードを使ってハイライトの音を考える。



(振り返り)

児童の振り返りは、必ず、内容理解を問うものと音と文字の関係への理解を問うものの2つを、以下のように段階設計をして実施した。

① お話の内容がわかりますか。(内容理解)



② 英語の音と文字の関係がわかりますか。(音から文字・文字から音)



3.6 まとめと考察

本研究から、英語絵本を用いた指導において、従来の「読み聞かせ」とどまらない学習の可能性が示唆された。一般に、小学校における英語絵本の活用は、物語の理解や英語への親しみを目的とした読み聞かせ活動に重点が置かれることが多い。しかし本研究では、音声と文字の関係に着目させ音韻認識を向上させるボトムアップ型のアプローチを意図的に組み合わせて指導を行った。その結果、児童の振り返りの自由記述からは、これらの学習過程をある程度自覚的に捉えていることがうかがえた。

例えば、「だいたい発音がわかればどう書くかわかると思った」という記述があり、それは、音声情報を手がかりとして文字を推測するエンコーディングへの気づきや、音と文字の対応に対する理解が形成されつつある可能性を示している。

また、多数見られた「ストーリーが楽しいのでいっぱい英語がわかった」という記述からは、物語という意味的文脈が理解を支え促進していることが読み取れる。これらは、物語理解を基盤としたトップダウン指導と、音声や文字に着目したボトムアップ指導が相互に機能していることを示唆するものであると考えられる。

英語絵本を活用した指導においては、物語の理解を中心とした意味的アプローチと、音声・文字への気づきを促す言語的アプローチを統合的に設計することが有効である可能性が示唆された。ただし、その効果を十分に引き出すためには、児童の発達段階や英語習熟度に適合した教材選定また作成が不可欠である。特に、本研究で扱ったような三文字の CVC 語を中心とした構成の英語絵本は、音韻認識と文字理解の橋渡しとして一定の有効性を持つと考えられる。

英語を母語とする子どもたち対象の、こういった decoding books はよく見られるものの、そこに物語としての魅力が伴わなかったり、対象年齢がかなり低かったりすることから、日本の小学生にふさわしい絵本教材の開発には、語彙の選定や、物語としての魅力や内容理解の楽しさを損なわないよう配慮すべきであろう。さらには、第1時で行うような内容理解を取り付け児童の興味を高めるような読み手のスキル向上も必要となる。

今後は、児童の発達段階や興味関心を踏まえながら、文字指導と内容理解のバランスを考慮した教材開発を進めるとともに、ストーリーを活用したリテラシー指導の具体的な指導手順の精緻化を図っていきたい。

引用文献

- Butler, Y. G. (2016). Self-assessment of and for young learners' foreign language learning. I Nikolov, J. (Ed.) *Assessing young learners of English: Global and local perspectives* (pp. 291-315). Switzerland, Springer International Publishing
- Ehri, L. C. (2005). Learning to read words: Theory, findings, and issues. *Scientific Studies of Reading*, 9(2), 167-188. https://doi.org/10.1207/s1532799xssr0902_4
- Ehri, L. C., Nunes, S. R., Stahl, S. A., & Willows, D. M. (2001). Systematic phonics

instruction helps students learn to read: Evidence from the National Reading Panel's meta-analysis. *Review of Educational Research*, 71(3), 393-447. <https://doi.org/10.3102/00346543071003393>

Elkonin, D. B. (1973). *U.S.S.R.* In J. Downing (Ed.), *Comparative reading: Cross-national studies of behavior and processes in reading and writing* (pp. 551-579). New York, NY: Macmillan.

Fallon, T. Jr., & Schwab-Stone, M. (1994). *Determinants of reliability in psychiatric surveys of children aged 6-12.* *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 35(8), 1391-1408. <https://doi.org/10.1111/j.1469-7610.1994.tb01282.x>

Gillon, G. T. (2004). *Phonological awareness: From research to practice.* New York: Guilford Press.

National Reading Panel. (2000). *Teaching children to read: An evidence-based assessment of the scientific research literature on reading and its implications for reading instruction.* Washington, DC: National Institute of Child Health and Human Development.

Ross, J. A. (2006). *The reliability, validity, and utility of self-assessment.* *Practical Assessment, Research & Evaluation*, 11(10), 1-13. <https://doi.org/10.7275/9wph-vv65>

アレン玉井光江 (2022). 「公立小学校における読み書きプログラムの検証—文字知識から語彙知識への体系的な指導—」『日本児童英語教育学会紀要』第41号. 19-38.

アレン玉井光江 (2025). 『幼児・児童を対象とした早期英語教育におけるリタラシー指導：21世紀型リタラシー獲得を目指した英語プログラムの理論と検証』. 学文社.

池田周 (2015). 『Introducing Phonological Awareness and Early Literacy Instruction into Japanese Elementary School English Education — Its Significance and Feasibility —』, 開拓社.

文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』

実践報告

探究の学習過程をもとにした小学校外国語科の授業づくり —デジタル（情報活用能力）Can-Doの作成と関連付けて—

奥平明香（豊見城市立ゆたか小学校）

1. はじめに

1.1 実践の背景

予測困難な時代を生きる子どもたちにとって必要となる資質・能力として、「言語能力」や「問題発見・解決能力」と共に「情報活用能力」の育成が必要不可欠であるとされている。学習指導要領においては、情報活用能力とは、「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」と定義づけられている。これらを踏まえ、私たち教員は、各教科の特質に応じて、子どもたちに資質・能力を育むことを要請されており、これからの目指す授業の姿として、学習者中心の探究的な学びが実現できるような授業設計力が必要であることがわかる。

このことを踏まえ、小学校外国語科における探究的な学習過程のあり方とはどのような過程が考えられるかについて探るため、情報活用能力ベーシック（中川ら、2020）に示されている学習過程をもとに単元計画の立案と、毎時間ごとの授業設計も行い、授業を実施した。

また、児童は小学校外国語科で初めて英語を学習する。初学者であることから、学習方法や学習方略を持ち合わせていないことが考えられる。さらに、情報活用能力ベーシックでは、小学校外国語科では、「情報の整理・分析」に合致する内容が記載されていない。実際、多くの現場でも「整理・分析」の段階に着目した指導や評価が行われていないことも考えられる。しかしながら、多くの教科では「情報の収集」を行った後の「情報の整理・分析」が重要だとされており、その際に思考力・判断力を育成している。

以上を踏まえ、小学校外国語科の授業で、「整理・分析」における学習過程ではどのような指導が可能であり、その指導を通して教師はどのような指導性が必要であるか、また、児童の発話にはどのような変容が起こるかについて実態を探ることとした。

1.2 研究の目的とデジタル（情報活用能力）Can-Doとの関連

先述した学習過程における「整理・分析」の過程は、「情報の収集」の後に行われる。このことから、この二つの段階は、授業設計の中で一体的に構想し、見取っていく必要がある。小学校段階では、英語を用いた文字の読み書きを、全ての児童に一律に求めることができない学習段階にいることを踏まえると、小学校外国語科における「情報の収集」とは、「音声情報の収集」であることが分かる。このことは、音声中心で行われている小学校外国語科においては、「当たり前」のことだが、その「当たり前」をどのような視点をもって教師が指導しているかについては、あまり共有されていない。小学校の指導者は、「聞くこと」の指導が大切であることは分かっているが、リスニング教材を活用して内容理解の正誤を判定する活動で終わっていることが要因の一つである。つまり、「聞くこと」の活動を通して、児童の思考や発話に、どのような変容がもたらされたのかについて、意識して指導をするものは少ない。しかしながら、獲得した情報（音声情報）を、児童がどのように「整理・分析」したのかを教師も把握

することで、「聞くこと」を通じた児童の思考過程を見取ることができ、今後の指導改善につながる可能性がある。

以上の考えから、本実践では、長沼（2024）が提案している「デジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度」をもとに、実践単元で活用できそうなデジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度を作成し、「聞くこと」と児童の発話の実態把握を行い、指導改善に生かすことにした。

「デジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度」には、インプット型とアウトプット型の両方がある。インプット型を参考にすることで、児童が音声聞く際に、どのような目的で、どのような音声を、どのようなタイミング（状況）で情報の収集を行えば、入手した音声情報を整理・分析を行うことにつながるのかについて、思考の過程をたどることが可能となる。また同様に、アウトプット型を参考にすることで、入手した音声情報を整理・分析するとどのように発話につながったのかについて、抽出児童の発話内容と振り返りを分析することとした。

以上の理由から、本実践では、「デジタル（情報活用能力）Can-Do 尺度」を参考に、インプット（情報の収集と整理・分析）とアウトプット（まとめ・表現）の段階での思考力を、教師が把握することで、今後の指導改善の示唆を得ることを目的とする。

2. 授業実践

実践は、光村図書の *Here We Go!* の Unit6 “This is my Town.” の単元で行った。本単元は、教科書の配列では Unit8 であるが、年間指導計画を変更して行っているため、Unit6 として指導した。単元の指導過程は「話すこと【やり取り】」を通して行いが、単元末のゴール活動は、「話すこと【発表】」とした。

2.1 実施学年および児童の実態

本実践は、沖縄県公立小学校第5学年（計31名）を対象に実施した。実施時期は、12月である。本単元は、他教科や領域等と関連付けて行ってきた。総合的な学習の時間においては、一つ目に、12月中旬の集団宿泊学習に向けて、宿泊先の特徴を調べて地域の特徴と比較し、共通点や相違点を見つけながら地域性の大切さについて考え、思いを深めてきた。二つ目に、アイデンティティ教育の一環として、自分の身近な地域について、思い入れのある場所について考え、家族との思い出などを伝え合い、生まれ育った地域の大切さについて思いを膨らませてきた。また、特別の教科道徳では、『幸せのバケツ』を読み聞かせし、言葉で人とつながることの大切さについて学んだ。自分の行動で誰かを幸せにすることができ、その行動が広がれば、まち全体が幸せになるという考えに触れてきた。このことが、外国語科では自分のまちに対する考えや思いを膨らませる土台となり、目指す言語活動につながると考えている。

2.2 実際の授業

(1) 単元の概要

単元名：This is my town.

学級の児童とつくった本単元のゴールの活動

★Mana,他県に住むおじいちゃんたち,家族,地域の方々に、豊見城市の魅力を発信しながら、まちへの思いを伝えることができる。

児童が立てたマイ・ミッションを集約して画像生成を行ったポスター

- 児童の立てたマイ・ミッション(なりたい自分像 :Be ゴール)抜粋
- ・豊見城市に対する自分の思いが100%伝わるように言葉や表現・発信方法を考え、工夫して自分達らしく表現する。
- ・自分の地域の良いところや魅力を伝えて、自分の地域を今よりも、もっと好きに大切にすることができる。



(2) ラーニング・マウンテンを用いたe-ポートフォリオ(単元計画表兼、振り返りシート)

Unit 6 This is my town.【8】(自分たちのまちのみを発信する)

分かることとできること

①自分の思いや魅力を伝えるために、英語の発音や表現を練習して、お気に入りの場所を紹介できる力を伸ばす。

②自分の地域の良いところや魅力を伝えて、自分の地域を今よりも、もっと好きに大切にすることができる。

工夫して自分らしく表現すること

自分の思いや魅力を伝えるために、英語の発音や表現を練習して、お気に入りの場所を紹介できる力を伸ばす。

②自分の地域の良いところや魅力を伝えて、自分の地域を今よりも、もっと好きに大切にすることができる。

レベルアップしながら学ぶこと

自分の思いや魅力を伝えるために、英語の発音や表現を練習して、お気に入りの場所を紹介できる力を伸ばす。

②自分の地域の良いところや魅力を伝えて、自分の地域を今よりも、もっと好きに大切にすることができる。

単元ゴールのコミュニケーション活動

①改善・表現【レベルアップ調整・練習】
★まちの魅力を伝え合うために、レベルアップ調整のための練習ができる。

②まとめ・表現【リハーサル】
★まちの魅力を伝え合い、レベルアップのためのアドバイスを伝え合う。

③整理・分析【内容整理・発表練習】
★ルーブリックをつくり、伝えたいまちの魅力を再整理し、友だちとアドバイスをしながら発表練習ができる。

④整理・分析【やりとり】
★お互いの考えるまちの魅力について伝え合うことができる。

⑤情報収集【やりとり】 ●リスニングP94
★まちに対するお互いの考えや思いを知るために、豊見城市の紹介したい場所や魅力を伝え合うことができる。

⑥情報収集【やりとり】
★友達のことについて理解を深めるために、豊見城市にある「自分のお気に入りの場所とその理由」を伝え合うことができる。

⑦情報収集【やりとり】 ●リスニング P92
★友だちのことについて知るために、豊見城市にある「自分のお気に入りの場所と感想」を伝え合うことができる。

本時

⑧聞くこと・目標設定・対話立て
①発表のトークやアニメを視聴して、課題の大体の内容を知り、身につける方について確認する。
②課題に合った単元末のゴール設定と単元計画を確認し、マイ・ミッションを立てることができる。

先生の願い

単元の最後になってほしいみんなの姿
自分の育ってきたまちの魅力を再発見し、誇りをもって地元の魅力を伝えることができるワナナチンチンになってほしい。また、他地域・海外からの魅力も知って、平和な世の中の一助として貢献できたらいい。

マイ・ミッション

この単元の最後になりたい自分の姿

(3) 教材観

本単元では、自分達の住むまちの魅力を紹介するために、まちにある(ない)施設や建物、そこでできることを伝える表現を学習する。児童は豊見城市について、自分の考えや思いを込めて自分のお気に入りの場所(My favorite place is ~.)や市内にある紹介したい場所(We have ~.)、そこでできること(We/You can~.)などについて、やり取りを通して言葉を獲得していくことができる題材である。

先述したように、自分の考えや思いをもって伝え合う言語活動の充実を図り、総合的な学習の時間にはアイデンティティ教育等と関連させたり、道徳科の授業でも扱ってきた。そのため、今回は、紹介する範囲を、子どもたちが育ってきた・お世話になっているまちである豊見城市内に限定した。お互いのまちに対する考え方や感じ方から、地域の魅力を再発見したり、未来の豊見城市に対する思いを深めたりして、今後の社会生活の充実につなげていくことが期待できる。

(4) 児童観

本学級の児童は、自己表現することに消極的な児童が多く、外国語の学習においてもその傾向が現れる場面が見られる。自己表現に対する自信のなさを和らげるために、語彙や表現が不十分であっても、自分の考えや思いを工夫して伝え合うことの良さを味わうことができるように励ましながら支援して

いるところである。また、自己肯定感や自己効力感を育む観点として、学習改善を行う時間には、外国語学習における自分の好きな学び方を見つけ、増やしながら学ぶ機会を設定している。

(5) 指導観

自分のまちの魅力を伝え合う言語活動を通して、自己理解・他者理解・地域理解への深まりが感じられるように単元構成を行いたい。そのため道徳や総合的な学習の時間などとの関連も図りながら、まちに対する自分の考えや思いを自覚させる機会も大切にしてきた。言語活動の充実を図る視点として、お互いに伝え合う場所が同じでも、伝えたい理由には、共通点や相違点があることを知り、他者理解と地域理解を深めてほしいという願いがある。単元の最後は、保護者参観日に学級内での発表を行うが、その後は児童の挑戦したい表現方法でまちの魅力を発信していく。伝えたい相手は、一学期にアメリカからやってきた女の子（Manaさん）や、他県に住む祖父母、学校中の先生や先輩・後輩たち、地域の人々に伝えたいという声があがっている。

本校では自律した学習者育成のために自己調整力の育成を目指した授業改善を研究テーマとしており、外国語科でも探究的な学習過程を基本としている。外国語科では、自分のことを表す表現を探し、相手に伝えることができるようになるために「学習調整タイム」の時間を設定している。そのことが、【情報の整理・分析】の過程となると考える。学習調整タイムには、児童自身が自己課題を把握し、自己目標に近づく目的を持って学習改善をすることができるよう、目的に応じた調整メニューを提示して支援を行っている。また、必要な場面では、教師による一斉指導などの介入も適宜行い学習過程を支援することも大切にしている。

(6) 関連する学習指導要領における領域目標 ※下線部は指導者による加筆。 (ゆたか小 CAN DO リストより)

話すこと	やり取り ※本時	ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、 <u>自分らしく</u> 伝え合うことができる。
	発表 ※ 単元末	ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて <u>自分らしく</u> 話すことができる。

(7) 本時の授業 4/8 時間目

- ◆ 困り感の強い児童へは個別の支援を行う。
- ◆ 児童が自分で学習を進めることができるように学習の流れを確認・提示する。

学習過程	配分	児童の学習活動	教師の支援〈*自己調整学習の視点〉
課題	2分	・あいさつと YUNTAKU time をする。	◇授業開始の雰囲気を作る。

設定	課題設定	5分	<p>★Doゴール(本時のめあて)【整理・分析】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> <p>お互いの考えるまちの魅力について 伝え合うことができる。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・Doゴールを確認し、やり取り(1)行う ・Can-Do尺度で自己目標を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇本時のめあてを確認する。 ◇やり取りの機会を設定し、自己課題を把握できるようにする。 ◇4段階のCan-Do評価尺度を提示し、自己目標を設定する機会を設定する。
情報収集	情報収集	4分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のリスニング問題を活かして言葉や表現に着目して聞き直す。 <p>★What's good about your town? ★We have ~. You/We can ~.</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇内容理解の後なので、分析的に聞くことができるように声をかける。
	表現	4分	<ul style="list-style-type: none"> ・やり取り(2)を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇やり取りの場面を設定し、自己課題を把握する機会を設定する。
整理・分析	整理・分析	4分	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の中間評価を聞き、自分の発話と比べて改善ポイントを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇やり取りを観察し、全体的な課題を把握した上で中間評価を行う。
	表現	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・やり取り(3)を行い、自己課題を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇やり取りの場面を設定して、改善点を明確にする機会を設定する。
情報再収集	情報再収集	3分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の目的をもって、自分のめあてを立てて必要な個所の音声を聞く。 	
再整理・再分析	整理・再分析	4分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の目的をもって、学習方法を選択し、学習改善に繋がる活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇児童が自分の実態を把握し、自己課題のズレの修正を行うように支援する。 *援助要請：学習を調整するために他者に相談していたか。 *実行調節：方法・方略を調整していたか。
まとめ・表現	まとめ・表現	8分	<ul style="list-style-type: none"> ・やり取り(4)を行う。 ・友だちのやり取りを見て良さを見つける。 ・やり取り(5)を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇やり取りの場面を設定して、到達度を把握する機会を設定する。 ◇モデリングの場面を設定し、友達の姿から取り入れて学ぶ機会を設定する。
振り		6分	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションと自己調整学習の視点 	<ul style="list-style-type: none"> ◇振りを行う時間を設定する。 *自己記録：学んだことを記録したか。


返 り ・ 改 善	振 り 返 り	<p>の両方から振り返りを行う。</p> <p>① 音声を記録する。やり取り(6)</p> <p>② 相手や自分自身のことで分かったこと</p> <p>③ 学習方法でうまくいったこと/いかなかったこと・理由と改善点</p> <p>④ 次時への抱負や目標設定</p>	*自己評価：うまくいったこと/うまくいかなかったことが何かを考えているか。
-----------------------	------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------

2.3 振り返りによる考察

(1) デジタル教科書のリスニング課題を選択した児童の本時の振り返り

授業では、児童が学習を調整するための「学習調整タイム」を設けている。教師は、調整方法を提示しているが、どのように調整するかは、児童自身が選択・決定している。以下の児童A、児童Bは、デジタル教科書のリスニング課題を活用して学習の調整を行った児童である。

① 児童Aの振り返りと使用したベン図



※メニューから選び、振り返りをする。どの活動を、どんな目的で行うか？

学習調整タイムの自分のめあて※メニューから選びレベルアップ改善を目指す。めあて：◇◇を克服してレベルアップするために、〇〇を使って～～をする。

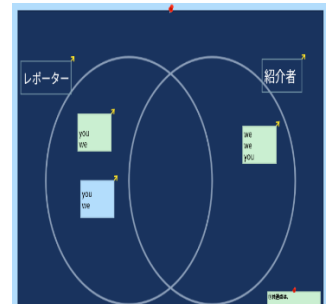
ベン図で比べながら聞いて、話し方の共通点や違いを見つける

学習調整タイムのふりかえり ※めあて達成のために取り組んだ方法で、レベルアップできたか？


①うまく調整できたことは、リスニング問題を使って紹介者とレポーターが何を言っているかしっかり聞いたこと。その理由は、紹介者が何をどんな順番で魅力を紹介しているかを聞いて伝え方の参考にしたから。

②まだできなかったことは、言い方とかは分かったけど、魅力だと思ふことをまだ詳しく言い足りない。

③次の調整タイムは、友達とアドバイスし合いながら、魅力を詳しく言えるようにしたい。



② 児童B



※メニューから選び、振り返りをする。どの活動を、どんな目的で行うか？

学習調整タイムの自分のめあて※メニューから選びレベルアップ改善を目指す。めあて：◇◇を克服してレベルアップするために、〇〇を使って～～をする。

話している内容を参考にする

学習調整タイムのふりかえり ※めあて達成のために取り組んだ方法で、レベルアップできたか？

①うまく調整できたことは、weとyou使う順番がわかった
その理由は、レポーターと紹介者がweとyouを言ってる順番を気をつけて聞いたから

②まだできなかったことは、どういときにweやyouを使うかちゃんとわからなかった
考えられる原因は、意味を考えながら聞くことができなかったからだと思う

③次の調整タイムは、どういときに使うのか簡単メモとかで、考えながら聞くことができるようにしたい。

2名の児童は、デジタル教科書の同じリスニング問題を聞いて学習調整を行ったが、目的が異なっている。また、児童Aは、思考ツールを活用して、簡単な比較を行いながら発話の特徴を捉えており、伝え方が分かったと振り返っている。児童Bは、話されていることを注意深く聞いて、やり取りがうまくいったが、意味を考えながら聞けなかったことを課題と考えている。次の改善策として、メモを取りながら聞けば、考えながら聞くことができそうだと書いていることが興味深い。このことから、音声情報を聞いて、思考の整理や分析を行う際は、文字カードや絵カード等を使用して、思考ツールと組み合わせるなど、思考を可視化する活動を取り入れるようにする必要がある。

(2) 本時の振り返り（内容面：コミュニケーションの振り返り）

以下は、抽出児童2名の学習内容（コミュニケーション）の振り返りである。

① 児童 A

コミュニケーション活動のふりかえり ※ひまわりめあてシート・やりとりについて※

①やりとりをした相手のことで分かったことは、 さんは、シティプールでウォータースライダーができることが魅力と思っていることがわかった。あと、最後に先生たちと話して、 先生は、ピンク色が好きで誕生日は4月19日とわかった！

②もっと知りたくなったことは、海もあるのに、なんでプールのウォータースライダーがいいかと詳しくききたくなった。あと、他の先生達にもいろいろなトークをしたかった！

③次は、 さんに海とプールとどっちが好きか聞いてみようと思った。最初に先生たちにトークをしにいくときに自分から言うことができなかった。最後には先生たちに話かけに行けたけど最初から先生たちにも話に行けるように、友達とアドバイスしながらもっとうまくなれるように練習したい。

② 児童 B

コミュニケーション活動のふりかえり ※ひまわりめあてシート・やりとりについて※

①やりとりをした相手のことで分かったことは、

 さんのグットな場所は、ゆたか小と言っていて、意外だった。

②もっと知りたくなったことは、他の人のおすすめの場所なども知りたいし、 さんは、ゆたか小が楽しいからと言っていて、どんなことが楽しいかも詳しく知りたい。

③次の時間は、スラスラ言えるようになってもっと会話が進められるようにしたい。

児童 A は、海ではなく、プールでウォータースライダーができることを魅力と話した友達のことをもっと深く知りたくなったようだ。また、本時はゲスト・ティーチャーも多く参観していたので友達以外の先生とのやり取りについても記述している。うまくいかなさを感じながら児童 B は、自分の学校を魅力と話した友達のことをもっと知りたくなり、さらには他の友達の考えも知りたくなっている。二人とも、やり取りのうまくいかなさを感じながら、もっと上達したいと次への期待をもっていることが分かる。

(3) 単元末の児童の振り返り（抜粋）

単元の最後には、ラーニング・マウンテンに蓄積してきた音声記録を聞き返したり、振り返りを読み直したりして単元全体の振り返りを行った。以下は、学習内容と学習方法の2つの視点から抜粋した振り返りである。

① 学習方法について

・この単元で、一番成長したことは得意な学び方をみつけたことです。チャンツで言い方の細かいところを直して、言い方や言葉の順番がよくわかったからです。

・一番成長した所は自分にあった学習方法を自分で見つけ出す力だと思います。自分にあった学習方法で学んで、全員がまちの魅力を伝えることが出来たからです。

② 内容等について

・豊見城市には、すごいパークなどはないけど、みんなの思い出がこの豊見城市に詰まってるんだと分かりました。私も思い出が詰まってる場所を正直に伝えました。

・久しぶりに、自分の思い出の場所を思い出して、なんだか懐かしくなりました。自分の地域の良いところを皆で伝え合えたし、まちのことをもっと好きになれました。

児童は、やり取り等を通して、自分のまちに対する思いが深まったことだけでなく、自分の得意な学び方や自分に合った学び方を見つけることができたことを実感したことについても記述している。振り返りの内容や児童の観察を通して、言語活動が深まるにつれ、自分ならではのエピソードを伝えるために、より詳しく伝えたくなったり、話す順番にも工夫して伝えたいことがうかがえる。

3. 実践の成果と課題

本実践の成果として、「まち紹介」の単元におけるデジタル Can-Do 尺度の作成を通して、「聞くこと」の活動における発話の実態を確認することができた。今後は、児童が「しっかり聞く」「注意して聞く」などの活動を行う際に、教師がインプット型のデジタル Can-Do 尺度を基準に持つことで「しっかり」などの曖昧さを避け、「注意して」はどこに注意して聞くのかなど、発話につなげるのに有効な部分にフォーカスして聞かせることができる。このことは、児童のやり取りに対する中間指導の場面で、「多くの児童にとって必要な指導内容であるか」「教師の発話を通して改善点に気付かせる方がよいか」「児童同士のやり取りのモデリングを通して捉えさせる方がよいか」「明示的に日本語で指導したほうがよいか」など、教師の指導改善を検討する上で重要な視点となる。

課題としては、「学習調整タイム」のような個別最適な方法を選択して授業をすすめる際、単元のどの時間に、全員の児童に「聞き方」の指導を確保すべきかである。また、本来ならばデジタル Can-Do 尺度は、授業で児童と共有しながら「聞き方の方略」を身につけていくための手段として活用していくことが望ましい。

今後は、さらに、年間指導計画とその過程を踏まえた単元構想力、一時間ごとの授業設計力の向上と各学年、各単元におけるデジタル Can-Do の開発に努め、指導改善を行う。

参考文献

EASEL 小学校英語評価研究会「デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル～学びを支援する単元をつなぐ Can-Do 評価試案～」(2023 年度).

中川一史・小林祐紀・佐藤幸江・岩崎有朋「情報活用能力ベーシック活用ガイドブック」東洋館,2025.
佐藤和紀・三井一希・泰山裕「デジタル学習基盤と情報活用能力」東洋館,2025.

I 「自己調整能力」育成の視点から

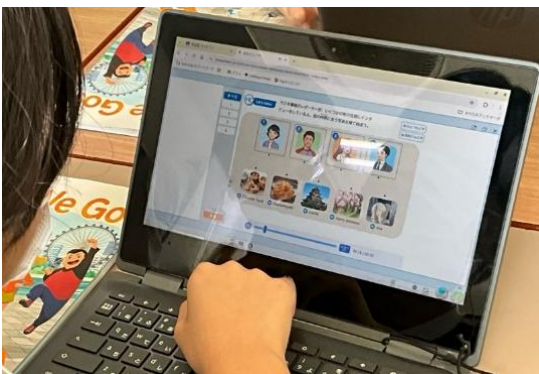
児童が主体的に外国語学習に取り組みながら、自己調整能力を発揮し、粘り強く学びに取り組むためのしかけが多数見られた。

(予見：一つの単元や、1時間の授業における「見通し」を児童と教師が共有する)



大妻女子大学教授の樺山氏が考案したラーニングマウンテンを活用し、教師が児童と共に学びの「見通し」を協創する。単元のゴールも、一人一人の児童の「なりたい自分像」を集約して作成したオリジナル単元目標を設定している。

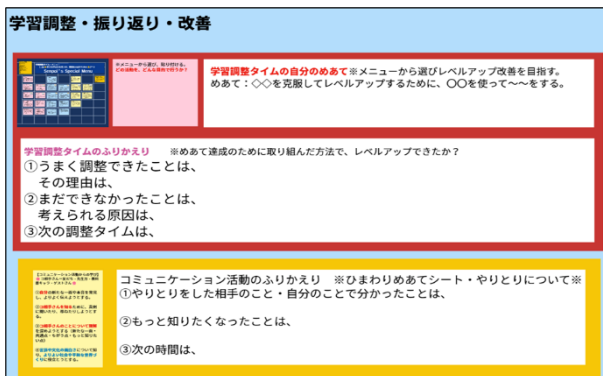
(実行：自分に合った学び方や、学ぶ相手を自己選択、実行、修正しながら学ぶ)



実行段階では、一人一人の児童が、自分に合った学びの方法を選択する。学習者用デジタル教科書を使い一人で学んだり、友達とやり取りをしたりして、自らの学びを確認・調整しながら学習に取り組む。

また、一緒に学ぶ相手も、児童が自分で選択・決定する。学習方略を児童自らが選択することが主体的に学習する態度を育成する。

(省察：Can-do 評価尺度や、自分が立てた目当てに立ちかえり、具体的に省察する)







省察の段階では、Can-do 尺度を用いて、授業開始時の学びと、授業終了時の学びの変化を自己評価し、成長を確認する。また、学習調整タイムで立てた学習方略が妥当であったかを具体的な根拠をもって振り返り、次時の学習方法の改善や学習目標設定につなげている。

2 「情報活用能力」育成の視点から

情報活用能力ベーシックに掲げられた、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現、⑤振り返り・改善の「5つの学習プロセス」に沿って、授業の中で効果的にICTを活用し、情報活用能力を育成している。(本時は主に①、②、③を活用した)

(① 課題の設定：Can-do 評価尺度を使って、友達とやりとりし、自己目標を設定する)

目標設定		
第4時間目 今の自分に近いところを○でかこもう!!【やりとり】		
お互いの考えるまちの魅力を伝え合うために		
④	まちの魅力について尋ねることができ、自分の紹介したい場所や感想、魅力(そこできなこと)について、詳しく答えることができる。	
③	まちの魅力について尋ねることができ、自分の紹介したい場所や感想、魅力(そこできなこと)について、たいたい言うことができる。	
②	相手に自分のことを伝えるために、質問をされれば、ヘルプ(先輩・友達)ありなら、紹介したい場所と魅力(できなこと)について、なんどか言うことができる。	
①	相手に尋ねられても、紹介したい場所について言うことは、今はまだ難しい。	

授業の最初に、英語でやり取りをさせてみて、自分の学びの段階を Can-do 尺度で確認させる。本時では、児童が「自分の力がよく判断できない」と発言したので、教師は、実際に英語でやり取りをさせてみて、Can-do 尺度を示しながら、今の自分がどんなことが言えているのかを実感させて児童に記入させていた。

(② 情報の収集：先生の Small Talk やデジタル教科書を活用して表現を確認する)



児童のゴール活動のモデルとなるよう、最初に教師が自分の家族や、家庭の中で好きな場所について Small Talk を行った。児童は、教師の話に興味深く聞き、自然と良質な英語のインプットを受けることができた。また、デジタル教科書の Let's Listen にも取り組ませ、教科書の表現からもインプットさせる工夫が見られた。

(③ 整理・分析：Senpai's Special Menuなどを参照し、学習方略を自ら選び、試す)



②の良質なインプットを繰り返し受けた後は、③の「情報の整理・分析」を行う。ここでは、先輩たちが取り組んでみて効果のあった学習方略の一覧(Senpai's Special Menu)を示し、児童がそこから選んで、自分の表現について、情報の整理・分析をする。この時の学習方略も、各自の学習スタイルに合わせ、デジタルやアナログを適宜組み合わせ、自分に合った方法を自己選択する姿が確認できた。

3 「学習環境調整」の視点から

「個別最適な学びと共同的な学びの一体的な充実」をはかるために、児童の学びを活性化させるための学習環境が十分に整えられている。

(① これまでの単元で用いた学習方略を累積掲示して、既習事項を想起しやすくする)



前単元で使用したラーニングマウンテンや、学習の成果物としてのポスターなどが常に児童の目に触れる場所に掲示されている。

これにより、児童は前単元までに、自分たちがどのような方法で学んできたか、どんな表現を学んできたかを、自然と振り返り、本単元の学習に活かすことができる。

(② 掲示物にも、児童の手書きの文字が添えられ、文字に自然に触れる環境がある)



子供たちが、学習した表現や、お気に入りの英語などを書いた掲示物が、教室に掲示されている。写真は、児童が fish という単語を、色とりどりの4線紙に書いて、ステンドグラスのようにガラス窓に掲示したものである。

小学校の読み書き指導で重要なのは、音声で十分に慣れ親しんだ言葉や表現を、児童が「書いてみたい」「読んでみたい」と思えるような工夫をすることである。

(③ 児童一人一人の存在を大切にした、安心・安全な学級経営の理念が学びを支える)



外国語の授業では、言語活動を通じて、児童が互いの存在を大切に思う、豊かな関係性を築くことが重要である。写真は、授業で誕生日についてやり取りした後に、自分の名前をろうそくに書き Birthday Calendar を作成したものである。このように、一人一人が大切にされた学習環境だからこそ、児童は安心してコミュニケーション活動に取り組むことができる。

4 授業検討会（参加者：泉、奥平、大江、加藤、黒川、田縁、森本）敬称略

- (泉) ・児童が、主体的に学習に取り組む姿勢が見られ、自分たちでスムーズに学習活動に取り組んでいる。
- ・語順に気付かせる立体物（箱や筒）は、児童が少しずつ語順や、文字に慣れ親しめる。小学生の認知スタイルにも合っていて、記憶に残りやすい工夫がある。
 - ・教室内の掲示物は、児童が自然に文字に慣れ親しむことができるよう、計画的に整備されている。
 - ・授業中の座席は、児童が自分で決めるのか？
 - ➡ペアや3人組などの組み合わせは、基本的に児童が自由に選択する。各ペアやグループの座席をどう配置するかは、教師が意図的に組むこともある。
 - ・本時は第4時間目だが、単元のゴールではどのような活動を行うのか？
 - ➡ゴール活動では、「自分たちの街のよいところ」を、総合的な学習の時間と絡めて発表させる。児童はチャンツに乗せてダンスで表現したり、ミニ・ガイドブックを作成し、それを使ってみんなの前で発表したりする予定。
 - ・文字の指導は、ふだんどのように行っているのか？
 - ➡5年生の現時点では、文字よりも、音声でやり取りすることを重視している。ただ、文字による学びを好む児童は、文字を使って学ぶ子もいる。
 - ・定型表現などは、文字にして掲示し、児童の記憶に残せるようにしてあげてもよいのではないか。
 - ・自己調整タイムで、児童が主体的に学びに向かっている姿が印象的であった。
- (田縁) ・教室の学習環境が ESL の教室に似ており、奥平先生が一人一人の児童の存在を大切にしていることが感じられた。
- ・重要な表現などは、文字にして示してあげることでもよいのではないかと。
 - ・教師による Small Talk の指導がすぐれている。この Small Talk を聞くことが、児童への良質な Input になっている。
- (森本) ・児童に対する教師の働きかけが、とてもきめ細やかで、授業のテンポがよい。児童の学びも、「静」と「動」の切り替えが早い。
- ・児童は「先輩スペシャルメニュー」で、どんなことを学んでいたのか？
 - ➡児童は、先輩たちが考案した外国語の「学び方の例」を参考に、各自で学習方略を選んで実行していた。
- (黒川) ・場面緘黙と思われる児童が、授業に意欲的に参加し、発話をしている様子が、たいへんすばらしかった。

以上（記録：岐阜聖徳学園大学 加藤拓由）

実践報告

「デジタル Can-Do を活用した小学校英語授業の実践 —「聞くこと」から「話すこと」への学びの可視化を通して—

幡井理恵(聖学院大学 非常勤講師)

1. はじめに

1.1 実践の背景

私立小学校における英語教育への期待は、公立小学校での外国語教科化を受けてさらに高まりを見せている。とりわけ、子どもを私立小学校に通わせる保護者の中には、学校教育を通して児童の英語力を高めてほしいという期待が強く見られる。また、学校運営の観点からも、英語検定試験などの資格取得を通して児童の英語力を可視化し、その成果を教育実績として対外的に示したいという意向が存在する。こうした結果は学校広報や入学希望者の増加にも影響することから、教育活動の一つの指標として重視される傾向にある。しかしながら、小学校段階の外国語教育においては、資格取得そのものを目的とするのではなく、児童が将来的に外国語学習への興味を持ち続けたり、学習そのものに主体的に向き合う姿勢を育成したりすることが重要である。外国語学習は短期的な成果だけで測ることが難しく、言語活動を通して培われるコミュニケーションへの態度や学びに向かう力など、長期的視点での資質・能力の育成が求められる。そのためには、児童自身が自らの学習過程を振り返り、学びの変化や成長を実感できるような評価の在り方が必要である。

また、私立小学校では外国人教員が授業を主導する場合も多いが、日本語を母語とし英語を外国語として学んできた日本人教員の役割も依然として大きいと考えられる。第二言語学習者としての経験を持つ教員は、児童がつまづきやすい点や理解の過程を想定しやすく、児童一人一人の強みや弱み、学習スタイルに応じた支援を行いやすい。こうした支援をより効果的に行うためには、教師が児童の学習状況を把握するだけでなく、児童自身が学習を振り返り、自分の学びを可視化できる仕組みが重要となる。本実践では、このような評価の在り方に着目し、デジタル環境を活用した学習の可視化の可能性について検討することとした。なお、本実践は外国人教員が授業を主導し、筆者は授業参観およびデジタル Can-Do の設計・助言を担当する立場で関わった、通常とは異なる体制で実施されたものである。

1.2 デジタル Can-Do 導入の必要性

小学校外国語教育においては、言語活動を中心とした授業が重視される一方で、児童の学習過程をどのように評価し可視化するかが課題となっている。特に、コミュニケーションを目的とした活動では、知識量やテスト結果のみでは学習の成果を十分に捉えることが難しく、児童がどのように理解を深め、どのような気づきを得ながら表現へとつなげているのかを把握する視点が求められる。

この点において、Can-Do 評価は「何ができるようになったか」を具体的に示すことができる評価方法として有効であり、児童自身が学習の到達状況を実感しやすいという利点がある。しかし、紙媒体での記録のみでは継続的な振り返りや学習過程の蓄積が難しく、教師による見取りにも限界がある。そこで本実践では、デジタル環境を活用した Can-Do 評価、すなわちデジタル Can-Do を導入した。デジタル化することで、児童の振り返りを継続的に記録できるだけでなく、音声記録やコメントの蓄積を通して学習の変化をより具体的に把握することが可能となる。また、児童自身が自分の学習過程を客観的に捉える機会にもなり、主体的に学習へ向かう態度の育

成にもつながると考えられる。このような背景を踏まえ、デジタル Can-Do を活用した授業実践の検討を行うこととした。

1.3 本実践の目的

本実践の目的は、デジタル Can-Do を活用して児童の学習過程を可視化することが、「聞くこと」から「話すこと」への接続にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。特に、児童の振り返りや自己評価の内容に着目し、学習の気づきや方略の変化がどのように表現活動へとつながるのかを整理する。また、教師が児童一人一人の学習状況を見取り、支援する手立てとしてデジタル Can-Do がどのように機能するのかを検討することを目的とする。さらに、単に英語を聞き取ったり発話したりする知識・技能の習得にとどまらず、聞き取った内容を自分の経験や考えと関連付けて捉えたり、「自分ならどのように表現するか」を考えながら言語活動に取り組んだりできるようにするための授業構成や教師の働きかけの在り方についても検討することを目的とする。

2. 実践概要

本実践において参考にした単元は、4年生 *Let's Try!*2の Unit4 “What time is it?” および光村図書 *Here We Go!*6 の Unit3の “What time do you get up?” である。小学校低学年から教科とし英語学習を実施している強みを生かし、3年生の段階で自分の一日の生活を英語で伝えることや、その中で自分の一日の生活が先生や友達と同じなのか、違うところがあるかを知る学習を行う。評価領域は、「聞くこと」及び「話すこと【発表】」である。

2.1 実施学年および児童の実態

本実践は、私立小学校第3学年3学級（計103名）を対象に実施した。児童は、低学年から週2時間の英語学習に加え、音楽・図工・体育の各週1時間を各専科教員1名と英語教員1名のチームティーチングにより実施している他教科×英語の授業を各3時間、計5時間英語に触れている。英語を聞き取ることに慣れている児童ではあるが、低学年のうち聞き取れたことから学習を進めていけば良いため、英語を使って意思表示をする必要性が少ないという難点も抱えている。また、英語を聞いて慣れることに焦点を当てていたため、自分の生活と比較しながら聞く・話すという視点を今まで明言化してこなかった背景もある。

3年生以降は他教科×英語の時間は設けていないことから、週2時間の英語学習のみとなっている。従って、英語学習を通して自分の意見を伝えるという活動の中で既習表現を自分の生活と関連付けて用いる経験を増やしていく必要がある。さらに、自己評価や振り返りに関しても、十分な時間を確保してこなかったことから、3年生の英語学習においても、設問を読んで深く考えずに回答する傾向があり、言語的な Can-Do 記述の意味を十分に咀嚼できているかについて課題が見られた。したがって、本実践では、母語による補助説明を適宜行いながら、児童が「何のために聞き、何のために話すのか」を意識できる授業設計を行う必要があった。

2.2 単元構成とパフォーマンス課題

(1) 単元の概要

単元名：Time and Routine（時刻と日課）

単元目標：自分らしさを友達に伝えるために、自分の一日の生活を整理し、一日の生活を表す語句や表現を用いて、冬休みの一日の生活を紹介することができる。

<単元評価規準>

	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	一日の生活を表す語句や表現を聞いて理解することができる。	先生と自分の生活スタイルの違いを知ったり、自分の生活スタイルを見直したりするために、日課を表す語句や表現を使って、相手の日課とその時刻を聞き取っている。	先生と自分の生活スタイルの違いを知ったり、自分の生活スタイルを見直したりするために、日課を表す語句や表現を使って、相手の日課とその時刻を聞き取ろうとしている。
話すこと (発表)	一日の生活を表す語句や表現を使って話すことができる。	自分らしさを伝えるために、冬休みの一日の生活を整理し、工夫して紹介している。	自分らしさを伝えるために、冬休みの一日の生活を整理し、工夫して紹介しようとしている。

<単元の流れ>

時間	5つの学習プロセスを観点とした学習過程	主な言語活動
1 時間目		<ul style="list-style-type: none"> ● 数字の復習(1~20) ● 数字のゲーム活動(21~59)
2~5 時間目	課題設定・情報収集 (インプット段階)	<p>*「自分との違いを見つける」という目的を明示しながら聞く活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 数・時刻の復習 ● 教師の生活紹介を聞き取る活動 ● 教師・友達との生活時間の比較
6~7時間目	整理・分析 (インプット深化段階)	<p>*一日の生活を表す語句や表現に慣れ親しみながら、「何が自分らしい生活なのか」を選択する視点を見つけながら聞く活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ロイロノート上で生活カードを使って、一日の生活を表す語句や表現を練習 ● 自分の生活順に再構成 ● 中間デジタル Can-Do 実施
9~12時間目	まとめ・表現 (アウトプット段階)	<p>*それぞれ異なる生活をしていた冬休みの生活を振り返って、友達に伝えたい「自分らしい生活」の動画を作成する活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インプット段階の振り返りも兼ねて、先生の冬休みの生活について聞き取る活動 ● ロイロノートの生活カードを使ったり、自宅での写真を使ったりして、冬休みの一日を再現 ● 動画(音声入り)を作成

13~14	振り返り・改善 (アウトプット深化段階)	<p>* 友達動画を視聴して、さらに自分らしさを伝えるために、改善したい場所を見つけて修正する活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ロイロノートに提出された友達動画を視聴し、自分らしさを伝えるために、入れたいものや除きたいものを修正 ● 最終パフォーマンス“A Day in My Winter Vacation”動画提出 ● 単元末デジタル Can-Do 実施
-------	-------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(2) 単元末のパフォーマンス課題

インプット段階での活動では、平日の一日の生活を取り上げ、教師と児童で一日の生活にどのような違いがあるのか気づくことができるように進めていった。その上で、本単元末のパフォーマンス課題として、児童によって生活が異なる冬休みの一日について、英語で紹介する動画を作成する活動を設定した。課題名は「A Day in My Winter Vacation」とし、児童が選択した一日の生活を時系列で整理し、少なくとも5つ以上の活動を時刻とともに英語で表現することとした。

本課題では、単に既習表現を用いて日課を述べることにとどまらず、聞き取り活動で得た情報や教師の生活と自分の生活との比較を踏まえ、「自分らしさ」を意識して内容を選択・構成することを重視した。そのため、動画作成前には教師の平日の生活を聞き取ったり、友達との生活を比較したりする活動を行い、児童が表現内容を主体的に検討できるようにした。

動画制作にはタブレット端末を使用し、音声録音・画像や動画撮影を通して発話を記録した。中間段階でデジタル Can-Do による自己評価を実施し、児童が自分の理解度や単元後半で行う自己表現の到達状況を確認しながら改善できるようにした。完成した動画は相互視聴を行い、良い点や改善点について共有した上で再編集の機会を設けた。このように、本パフォーマンス課題は、聞く活動で得た情報を整理し、自己の経験と関連付けながら発話へとつなげる一連の学習過程を可視化することを意識して設計した。

2.3 デジタル Can-Do の設計⇒デジタル Can-Do 参照

(1) インプット段階のデジタル Can-Do

教師の平日の生活を、自分の生活との違いを見つけるように聞いたり、どこが自分らしい生活になるのかを考えながら聞いたりできているかを評価する。なお、評価尺度は、「問題解決・探究における情報活用のレベル」(文科省、2024)及び「中学校版言語能力 Can-do Statements の提案と妥当性の検証」(泰山・小野田、2022)の言語能力 Can-do Statements の項目を参考に段階化した。以下に、「問題解決・探究における情報活用のレベル」を LO、言語能力 Can-do Statements の項目を #○として段階を示す。

【課題設定】【情報収集】【整理・分析】インプット段階のデジタル Can-Do 尺度

「先生と自分の生活の違いを知るために、先生の日課を聞いて、その中から自分の特徴を表す日課を考えながら聞くことができる。」

評価尺度

- ① 話されている情報を聞いても、内容を理解することはまだむずかしい。
- ② 話されている情報を聞き、示された情報から教師の日課を理解することができる。【L1】【#5】
- ③ 話されている複数の情報を聞き、教師の特徴を表す日課を見つけることができる。【L2】【#6・#9】
- ④ 話されている複数の情報を聞き、教師の日課の特徴を見つけ、自分らしさを伝えるために必要な情報とそうでない情報に分類し、必要な情報を抜き出すことができる。【L3】【#13・#15】

(2) アウトプット段階のデジタル Can-Do

自分の冬休みの一日の生活を、自分らしさが伝わるように考えて伝えたり、友達の動画を視聴して、より自分らしさを伝えるために改善したりできているかを評価する。

【まとめ・表現】【振り返り・改善】アウトプット段階のデジタル Can-Do 尺度

「自分のことを友達に知ってもらうために、より自分らしさが伝わるように、自分の日課を伝えることができる。」

評価尺度

- ① 自分らしさが伝わるように、スライドを作成することはまだむずかしい。【L5】
- ② 自分らしさが伝わるように、スライドを作成することならできる。(自分の日課を英語で正確に伝えることはまだむずかしい。)【L6】【#20】
- ③ 自分らしさが伝わるように、一日の流れから選択して日課を伝えることができる。【L8】【#21】
- ④ 自分らしさが伝わるように、一日の流れに沿って複数の情報を伝えたいので、他者の発表を参考にして自分らしさを強調して伝えられる。【L9】【#23】

アウトプット段階で工夫した点としては、次の2点が挙げられる。1つ目は、アウトプット段階のデジタル Can-Do においても、インプット段階で使用した同じ設問を再掲したことである。その理由は、インプット段階の活動終了後の Can-Do と比べて、児童自身が自分の成長に気付くことを狙ったためである。2つ目は、デジタル Can-Do を実施するタイミングである。自分の動画が作成できた段階ではなく、【振り返り・改善】が完了してから実施した。その理由は、ピアラーニングを通じて、より自分らしさを示すために自己調整したところの可視化を狙ったためである。また、これにより、聞き方の変化、情報選択の変化、表現の深化を児童自身が自覚できると考えた。

3. 授業実践の実際

時刻を聞いたり表現したりする場合には、数字が必要となるため、1~59の数字の復習ができるゲーム的な活動も必要となる。従って、単元の中では、「聞くこと」の学習と並行して毎回数字の復習ができる活動や、帯活動として行っている Alphabet の学習、本単元が実施された時期の行事であるクリスマスの歌なども行った。単元の総時間数は14時間と長い時間を要したが、45分間すべてを本単元の学習に費やしたわけではない。そこで、本節では、主に2時間目から7時間目に行った「聞くこと」の活動と、9時間目から14時間目に行った「話すこと」の活動で実施した内容について、情報活用能力5つの学習過程に沿って紹介する。

3.1 【課題設定】最終課題の設定と児童との共有(2時間目)

一日の生活をテーマにした場合、小学生の平日の生活は学校にいる間ほぼ同じ時間で行動しているため、友達に紹介できる部分が限定されやすい。そこで、児童の個性がより現れる題材として、「冬休みの一日の生活を英語で紹介する動画を作成し、友達と共有すること」とした。

課題設定にあたっては、まず教師の平日の生活をモデルとして提示し、児童に「先生の生活のどんなところが印象に残ったか」「自分と同じところ・違うところはどこか」と問い掛けた。これにより、単に時刻や日課を聞き取るのではなく、相手の生活の特徴に着目して聞く視点をもたせた。その上で最終課題の到達像を具体的にイメージさせた。すなわち、「ただ英語で言えればよいのではなく、聞く人にとって分かりやすいこと」「自分らしさが伝わる内容になっていること」が大切であることを共有した。このように、「聞くこと」と「話すこと」を分断せず、目的を持った一連の学習活動として構造化することを意図した。

3.2 【情報収集】「聞くこと」における工夫(3~5時間目)

教師の平日の一日について話を聞き取り、自分の生活との共通点や相違点を見つける活動を設定した。具体的には、図1のようなスライドを児童に配布し、教師の起床時刻や出勤時刻などを聞きながらメモさせる活動を行ったり、児童に「自分と比べてどうか」「なぜその時刻なのか」などと問いかけたりして何度か聞かせた。さらに、自分との生活時間の比較を行うことで、聞き取った情報を整理し、自分の生活を捉え直す視点を持たせた。このような活動を通して、児童が単に時刻を理解するだけでなく、後の発話活動を意識して情報を選択しながら聞く姿が徐々に見られるようになった。

図1 聞くことの言語活動において、児童に配布したスライドの一例



3.3 【情報の整理・分析】学習支援アプリのスライドとデジタル Can-Do(インプット段階)の活用(6~7時間目)

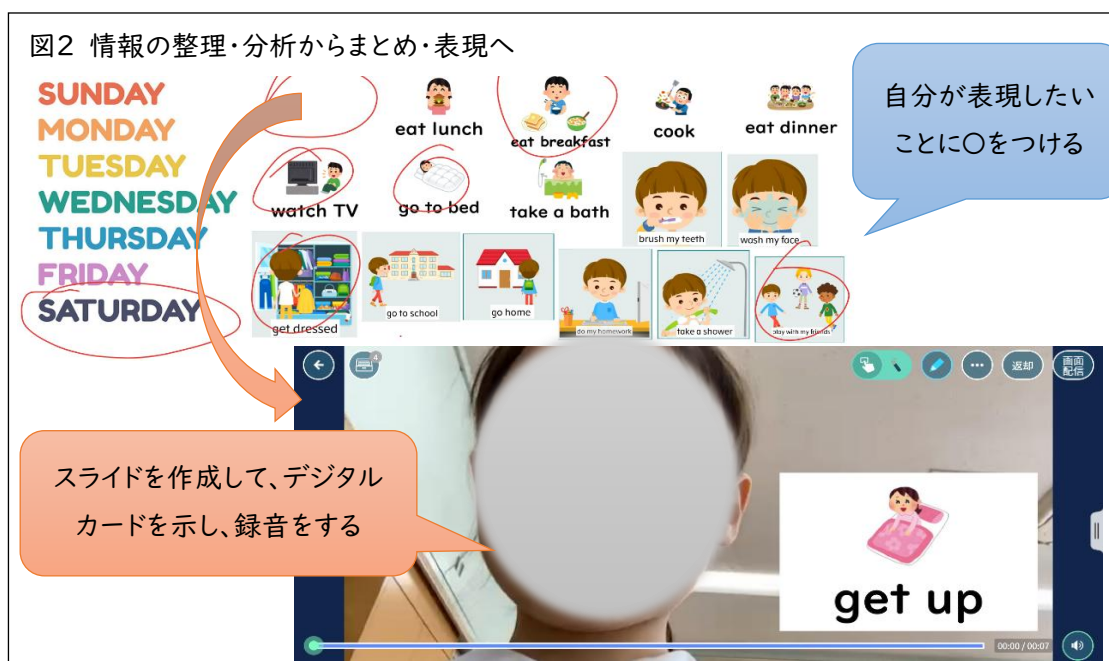
教師の日課と時刻の話聞く活動を複数回行った後には、7時間目の最後にデジタル Can-Do を活用した振り返りを行い、児童自身が理解度や気づきを言語化する機会を設けた。Can-Do 記述は、教師の日課を理解できる段階から、自分らしさを伝えるために必要な情報を選択して聞ける段階までの4段階を設定し、児童が自分の学習の現状を把握できるようにした。

また、学習支援アプリ上で日課カードを並べ替えたり、自分の生活に合わせて時刻を書き込んだりする活動を行い、聞いた情報を整理・再構成する過程を可視化した。この過程で児童は、「先生は自分より早く起きている」「生活リズムが違う」「やる事が違う」などの気づきを得て、情報を比較・分析する視点を持つようになった。児童は教師の生活の中から、自分の生活を紹介する際に参考になる活動を選びながら聞く姿も見られた。デジタル Can-Do は単なる評価ではなく、次の表現活動に向けて何を意識すればよいかを明確にする役割も果たしたといえる。

3.4 【まとめ・表現】「話すこと」への接続と表現活動(9~12時間目)

冬休みを挟んで単元の後半のアウトプット段階では、まず先生の一日の生活を聞き取る活動で整理した情報をもとに、児童には自分の平日の生活を英語で表現する活動を前時までの学習の振り返りとして実施した。そのうえで、単元末のパフォーマンス課題として「A Day in My Winter Vacation」をテーマに、冬休みの一日の生活を英語で紹介する動画制作を実施した。動画制作前には、教師の冬休みの一日の生活紹介動画を視聴させ、

単語の使用・発話の明瞭さなどの知識・技能の観点、日課の順序性・内容の具体性などの思考・判断・表現の観点について児童自身に考えさせた。



3.5 【振り返り・改善】ピアラーニングによる表現の改善とデジタル Can-Do (アウトプット段階) および自由記述による振り返り(13~14時間目)

動画制作が終わりに近づいた段階で、友達の動画との比較を通して、「自分らしさが伝わる内容になっているか」と問いかけて、児童同士で動画を視聴し合うように声掛けを行った。そして、お互いに良い点や改善点を共有する機会を設けた。教師は直接評価を示すのではなく、児童が自ら気づけるように声掛けや問い掛けを行った。このような過程を通して、児童の発話内容は単なる時刻説明から、自分の経験や頭の中で考えていることを含めた表現へと広がっていったと考える。

単元末活動の終了後には、デジタル Can-Do を用いた自己評価を実施した。その際には、児童が学習の中で感じたことや考えたことを言語化できるようにするため、自由記述による振り返りを行った。児童には、デジタル Can-Do によって自分の理解度や表現の達成度を回答するとともに、動画制作を通して感じたことや考えたこと、それによって改善した点を振り返る自由記述欄を設けた。

また、友達の動画視聴後には再制作の時間を設け、振り返り結果を実際の表現改善に結び付けることを重視した。このように情報を選択・構成して表現を改善していく過程は、情報活用能力のうち情報の整理・表現(L5)および条件に応じた情報選択(L8)、他者を参考にした改善(L9)に対応すると考えられる。この振り返りをしたことにより、主にインプット段階からアウトプット段階へのつながりの中で、児童が自分の学びの変化を実感しやすくなったり、単元末活動では自己表現に主体的に取り組む姿勢が見られるようになったりしたと考える。

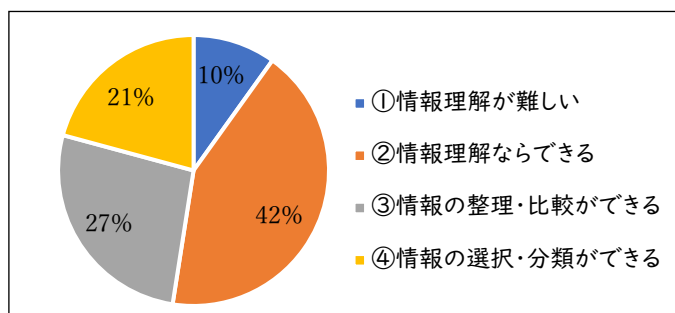
4. デジタル Can-Do 結果

児童の学習過程の可視化を目的として、インプット段階の活動が終了した単元の中間、およびアウトプット段階の活動が終了した最終段階でデジタル Can-Do による自己評価を実施した。また、インプット段階では、活動での気づきと、アウトプット段階に向けてのめあて、アウトプット段階では、インプット段階と同じ設問を再掲載した上で、学びに向かう力の工夫が確認できるように、友達の発表動画を参照して自分が修正した点について自由

記述を求めた。以下では、その結果を基に、「聞くこと」で得た気づきがどのように「話すこと」の表現活動へとつながったのか、児童の振り返りや自己評価の記述を手掛かりに検討する。

4.1 インプット段階のデジタル Can-Do 結果

(1) 先生と自分の生活のちがいを知るために、先生のお話を聞いて、自分の一日の生活やその特ちょう(自分らしい生活)を考えながら聞くことができましたか？



(2) 先生の一日の生活と、自分の一日の生活をくらべて、気づいたことはありましたか？先生の一日のようすと、じぶんの一日のようすと、同じだと思ったことやちがうと思ったことなどを書きましょう。(児童の自由記述を原文のまま抜粋)

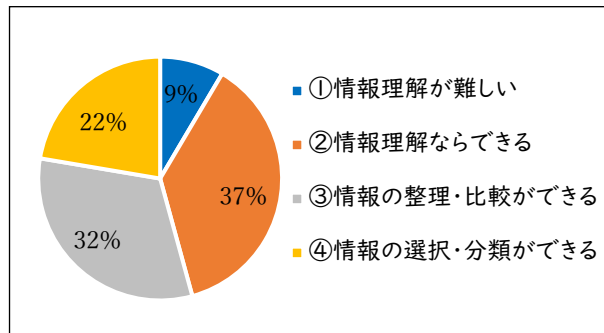
- 先生はとても朝早く起きていたけれど、私は2時間くらい遅いのですごいなあと考えた。ちなみに私は6時に起きています。
- 自分で家を掃除しているところが違う。
- 私も猫を飼っているのでも猫と猫じゃらしで遊ぶなどしているても多かった。
- 起きる時間は、違ったけれどゲームの時間は同じだった。
- 私は朝お風呂に入らないが、先生はシャワーに入っていた。
- 先生の生活は少し僕の生活よりものんびりで羨ましいと思いました。
- 先生は、家のことをやっていてしっかりしているけどわたしは、もっとしっかりしないといけない。

(3) 次の学習からは、冬休みの一日の生活のはっぴょうに向けて、じゅんびをします。友だちに自分の冬休みの一日のとくちょう(自分らしさ)がたつたわるように、目あてを書きましょう。どのようなことをしょうかいいですか。(児童の自由記述を原文のまま抜粋)

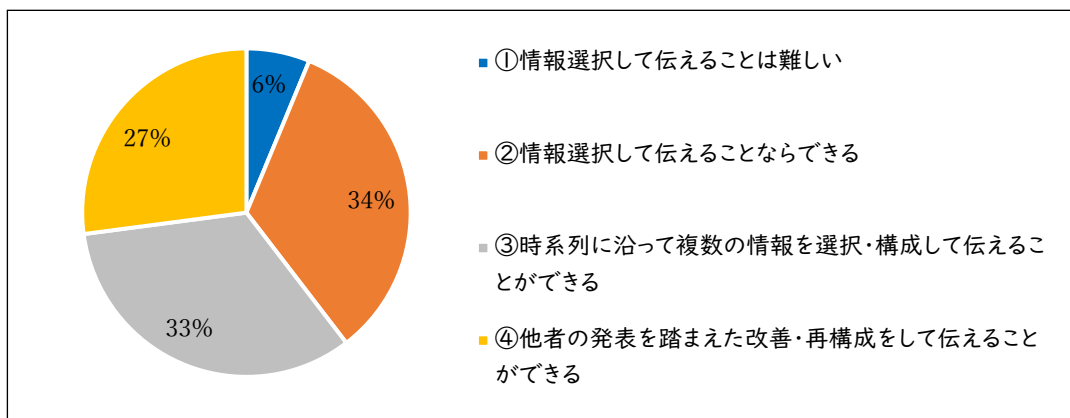
- みんながわかるようにハキハキ スラスラ言えることを目あてにしたいです。(言語面)
- しっかりとメリハリをつけて発表する。(言語面)
- 自分は、家族を助けているところが知ってほしい。(内容面)
- 健康的な生活をしているということを張り切っていうのと、友達がどんな生活をしているのかを予想して比較したいと思う。(内容面)
- 毎日ニュースを見て感想を書いていることを紹介したいです。(内容面)
- 自分が毎日やっていることやお友達がいんしょうにのこるものを伝えたい。(内容面)

4.2 アウトプット段階のデジタルCan-do結果

(1) 先生と自分の生活のちがいを知るために、先生のお話を聞いて、自分の一日の生活やその特ちょう(自分らしい生活)を考えながら聞くことができましたか？



(2) 自分のことを友だちに知ってもらうために、より自分らしさが伝わるように、自分の冬休みの一日の生活を整理して、工夫して伝えることができましたか？



(3) 友だちの作ったスライドを見たり、聞いたりして、気づいたことはありましたか？自分らしさをつたえるために、自分のスライドや英語を直したり、つけ加えたりところはありますか？(児童の自由記述を原文のまま抜粋し、< >で補足。)

- みんなのをみたら迷ったりしてなくてあってるかな～、あってないかな～と思わないで頭からすぐに出して、I do hoomwork<homework>at～と言うのとかも言うのが遅くない<隙間が開かない>のでいいと思いました。(言語面)
- 自分のスライドの間違いを友達のパビデオを見て見つけられた。(言語面)
- 友達は表現力がすごかった。発音がネイティブみたいで、自分らしさを出していた。自分らしさを出すために大好きな読書を取り入れた。(言語面・内容面)
- 表にのっているところだけではなく自分のしていることを英語にしていますとすごいと思いました。(内容面)
- 友達は習い事や、髪を乾かすなど、動画に自分の考えたオリジナルの動画を作っていて、すごいなと思いました。(内容面)

(4) 「一日の生活」の学習で、自分ががんばったことやできるようになったことを教えてください。(児童の自由記述を原文のまま抜粋)

- 自分が頑張った事は上手に英語で時間を言う事です。PM や AM を間違ったりして大変だったけど何回も撮り直していたらなれてきてできる範囲頑張っ取り組んだ。
- 前は「at」をわすれていたけれどじゅうぎょうをすすめていくうちに先生が at はわすれないでビデオをとってねと言っていたからいしきするようになって楽しくじゅうぎょうがおわれて今日もがんばったなと思いました。
- 自分の学校ではやっていない事を知ってもらえる様に、工夫して作りました。
- 前よりもせんせいはなしをきちんとききとることができるようになった。もったききとれるようになりたいです。
- PM や AM を間違えずに出来ました。起きる時間などが遅い人も、早い人もいたので「みんな一人ずつ個性があるんだな」と改めて思いました。

5. 考察

5.1 「聞くこと」が「話すこと」に及ぼす影響

インプット段階におけるデジタル Can-Do の結果では、「②理解できる」と回答した児童が全体の約 43% であり、「③特徴を見つけられる」「④必要な情報を選択できる」に該当する児童は合計で約 47% であった。これは、多くの児童が教師の日課を理解する段階には到達していたものの、自分との比較や情報選択といったより高次の聞き取りに至っている児童は半数程度にとどまっていたことを示している。一方、単元末活動後に再度インプット段階の Can-Do を問うた結果では、「②理解できる」は約 37% へと減少し、「③+④」の合計は約 54% へと増加した。すなわち、単なる理解段階にとどまる児童が減少し、「特徴を見つける」「必要な情報を選択する」といった段階に到達した児童が増加したことが確認された。このことから、アウトプット段階に進んでも聞き取る活動を常に取り入れていたことで、「聞くこと」を繰り返す中で単元末活動の目的を認識する児童が増え、より主体的な情報収集へとつながった可能性が示唆された。

さらに、アウトプット段階におけるデジタル Can-Do の結果では、「①情報選択して伝えることは難しい」と回答した児童は 6% にとどまり、「②情報を選択して伝えることならできる」が 34%、「③時系列に沿って複数の情報を選択・構成して伝えられる」が 33%、「④他者の発表を踏まえて改善・再構成して伝えられる」が 27% という結果であった。すなわち、約 6 割の児童が複数情報の構成や再構成といった比較的高次の表現段階に到達しており、単なる表現再生を超えた思考を伴う言語活動が一定程度成立していたと考えられる。

これらの結果は、表現活動を見据えた聞き取り活動の設計が、聞き方そのものの質を変化させる可能性を示している。動画制作において「自分らしさを伝える」ことを意識した児童は、他者の話を聞く際にも「何がその人らしさか」「自分とどう違うか」といった観点から情報を捉えるようになったと考えられる。すなわち、「聞くこと」と「話すこと」は個別の技能としてではなく、相互に影響し合う統合的な学習過程として機能していたといえる。また、自由記述には、「友達の生活を予想して比較したい」「みんな一人ずつ個性があると分かった」といった記述も見られ、他者理解を通して自己理解を深める姿勢が確認された。これは、言語活動を通してメタ認知的な学びが促進されていることを示唆している。

以上の結果から、本実践においては、デジタル Can-Do による学習の可視化と表現活動を組み合わせた授業設計が、児童の聞き取りの質を高めるとともに、自己の考えや経験を踏まえた表現活動へとつなげる一因となった可能性が示された。

5.2 学習の可視化とメタ認知の促進

自由記述を分析すると、児童が単に英語表現の習得状況を述べるだけでなく、聞き取った内容と自分の生活を比較しながら理解を深めている様子が確認された。例えば、「先生はとても朝早く起きていたけれど、私は 2 時

間くらい遅い」「ゲームの時間は同じだった」などの記述からは、聞き取った情報を自己の経験と関連付けて整理する姿が見られる。また、「先生は家のことをやっていてしっかりしている。自分ももっとしっかりしないといけない」といった記述には、他者理解を通して自己認識が深まる様子もうかがえる。さらに、アウトプット段階では、「みんなが分かるようにハキハキ言いたい」「発表ではメリハリをつけたい」といった言語面の目標設定に加え、「家族を助けていることを知ってほしい」「健康的な生活をしていることを伝えたい」といった内容面への意識も確認された。これは、表現の正確さだけでなく、「何を伝えたいか」を主体的に考える姿勢が形成されつつあることを示していると考えられる。また、最終的な振り返りでは、「友達の動画を見て間違いに気付いた」「何回も撮り直して慣れてきた」「先生の『at を忘れないで』という助言を意識するようになった」といった記述が見られ、学習方略の自覚や自己調整の萌芽が確認された。加えて、「みんな一人ずつ個性がある」「自分らしさを出したい」といった記述からは、言語活動を通して他者理解や自己理解が促進されていることもうかがえる。

これらの結果から、デジタル Can-Do による学習の可視化は、児童が自らの理解や表現を客観的に捉える契機となり、メタ認知的な学習態度の形成に寄与している可能性が示唆された。

5.3 振り返りコメントに見られる気づき

デジタル Can-Do による振り返りの自由記述の分析から、児童が学習過程を客観的に捉え、聞き取った内容と自己の生活を比較しながら理解を深め、表現活動に取り組んだ様子が確認された。また、言語活動を通じた他者理解と自己理解の深化も示唆された。これは、学習の過程を言語化する機会が与えられたことにより、児童が自らの思考や気づきを整理する契機となったためであると考えられる。

一方で、振り返りの自由記述が「特にない」「楽しかった」「みんな上手だった」といった簡潔な感想にとどまる児童や、学習内容との関連が不明確な語句のみを記述する児童も一定数見られた。この背景には、児童の発達段階や言語化能力の差に加え、本実践では外国人教員が主導して授業を進めており、活動そのものへの集中が優先される中で、振り返りの視点や問い掛けの意図に十分注意が向かなかった可能性も考えられる。また、授業時間内に十分な振り返りの時間を確保できなかったクラスもあり、記入が不十分になってしまった児童も見受けられた。したがって、振り返り活動を効果的に機能させるためには、日本人教員が児童の現状に合わせ働きかけと学習の目的意識の共有をより丁寧に行い、それに向けた母語による継続的な支援が必要であると考えられる。

6. 成果と課題

6.1 実践の成果

本実践を通して、デジタル Can-Do を活用した学習の可視化は、小学校外国語教育において一定の実践的意義を持つことが示唆された。第一に、児童自身が学習過程を振り返る契機となり、聞き取った内容と自己の生活を比較しながら理解を深める姿や、自分らしさを意識して表現活動に取り組む姿が確認された。単に「聞けた」「言えた」という技能面の達成にとどまらず、学習の意味や目的を意識した言語活動へとつながっていた点は、本実践の大きな成果である。

第二に、デジタル Can-Do による継続的な振り返りは、児童のメタ認知的な学習態度の形成にも寄与したと考えられる。自由記述からは、他者との比較を通して自己理解を深める様子や、自分の発話を改善しようとする姿勢が見られ、「聞くこと」で得た気づきが「話すこと」の表現活動へ接続される過程が確認された。これは、技能を個別に習得するのではなく、言語活動を統合的に捉える小学校外国語教育の方向性とも合致する結果である。

第三に、教師にとってもデジタル Can-Do は児童の学習状況を把握する有効な手立てとなった。児童の振り返り記述や音声・動画記録を通して、理解の程度や表現の変化だけでなく、学習への意識や課題も具体的に把握することが可能となり、その後の指導の調整や問い掛けの改善につなげることができた。以上のことから、デジタル Can-Do は評価のためのツールにとどまらず、児童の学習過程を可視化し、メタ認知を促進しながら授業改善にも資する実践的な教育手法として位置付けられる可能性があると考えられる。

6.2 今後の課題

本実践を通して、デジタル Can-Do による学習の可視化は児童の気づきや自己理解を促進する有効な手立てであることが示唆された。一方で、振り返りの内容が簡潔な感想にとどまる児童や、学習過程を十分に言語化できない児童も見られ、メタ認知的な振り返りの質をどのように高めていくかが今後の課題として浮かび上がった。特に、振り返りの問いの提示方法や時間配分、具体例の示し方など、振り返りを支える指導上の手立ての精緻化が求められる。

また、外国人教員が指導する場合には、児童が言語活動に意識を集中する一方で、学習の視点や振り返りの観点が十分に共有されない場合、学びの可視化が難しくなる可能性がある。活動の楽しさやコミュニケーションの自然さは外国人教員の強みであるが、それを振り返りやメタ認知へ結び付けるためには、授業のねらいや視点を明確に示す必要がある。この点で、英語を第二言語として学んできた日本人教員の関わりは重要であると考えられる。学習者としての経験を踏まえ、児童の理解過程やつまずきを想定しながら学習の視点を整理し、日本語を適切に用いて振り返りを支援する役割は、学びの可視化を進める上で意義深い。今後は、外国人教員と日本人教員がそれぞれの専門性を生かし、活動と振り返りを往還させる指導体制の在り方を検討していく必要がある。

7. おわりに

本実践では、デジタル Can-Do を活用し、「聞くこと」から「話すこと」へと至る学習過程を構造化することを意図して単元を設計した。その結果、児童が聞き取った情報を自己の経験と関連付け、他者との比較を通して再構成しながら表現へとつなげる学習の流れが具体化された。デジタル Can-Do による振り返りは、学習過程の可視化を促し、児童のメタ認知を支える手立てとして機能した。文部科学省外国語ワーキンググループ(第6回)配付資料に示された「内容の一層の構造化」が示すように、理解・整理・発信を往還する学習過程の構築が重要である。本実践は、この構造を単元レベルで具体化した試みの一例である。以上より、デジタル Can-Do は評価手法にとどまらず、小学校外国語教育における学習の構造化を支える手立てとなり得ることが示唆された。今後は、多様な学校現場での実践を通して、その有効性と課題をさらに検証していく必要がある。

参考文献

文部科学省(2024). 『情報活用能力育成のためのアイデア集 —「情報活用能力調査」の結果から見る指導改善のポイント』(2025年3月改訂). 文部科学省.

泰山 裕・小野塚 若菜(2022). 「中学校版言語能力 Can-do Statements の提案と妥当性の検証」日本教育工学会研究報告集, JSET 研究報告 22-3A1, pp.1-5

文部科学省 教育課程部会 外国語ワーキンググループ(第6回)配付資料(2025)

https://www.mext.go.jp/content/20251224-mxt_kyoiku01-000046560_00000003.pdf

実践報告

小学校特別支援学級における外国語授業 —児童の情報活用能力を高める指導者や担任の働きかけの一例—

大江 太津志・安丸 香織(京都市立開晴小中学校)

1. はじめに

小学校外国語活動・外国語科の必修化によって、外国語活動・外国語科の実践が数多く紹介されるようになった。筆者(大江)は今年度(令和7年度)初めて特別支援学級を担当し、率直に小学校の特別支援学級ではどのような外国語授業が展開されるのだろうかという疑問をもった。小学校特別支援学級での外国語授業は、通常学級の外国語授業とどのような共通点・相違点があるのだろうか。どんな点に留意することが児童の言語能力を伸ばすことにつながるだろうか。また、言語能力と相補的に働くと思われている情報活用能力(文部科学省 2026)についても、特別支援学級での外国語授業の中でどのように育ていけばよいのか。特別支援学級の指導に携わるうちに、担当する学級での外国語授業の実践と、児童の様々な反応に出会うことができた。本論では、特別支援学級における外国語授業がどのようなものか一例を示すとともに、指導者や担任が児童に授業の中でどのように関わると児童が情報活用能力を高めることができるのかについて焦点を当てて記述する。

2. 実施学級・授業体制について

筆者(大江・安丸)が勤務する小中学校は、施設一体型の小中一貫校で、1年生から9年生(中学3年生)までが同じ施設内で過ごしている。児童生徒の学年によって3つのステージに分かれており、1~4年生を1stステージ、5~7年生を2ndステージ、8・9年生を3rdステージと呼んでいる。本校の特別支援学級は、この3つのステージごとに学級を編成している。本実践は本校の特別支援学級の1stステージ(1~4年生)で行った。

今年度、1stステージの特別支援学級には5人の児童が在籍している(A・B・C・D・E 児)。児童によって困りや課題は様々で、児童がそれぞれの課題に合わせて個別に取り組むこともあれば、同じテーマの活動にみんなで参加して学びを深めることもある。本学級では、日によって変わるが大江を含む2人か3人の担任が日々指導を行っている。

英語活動(1・2年生)・外国語活動(3・4年生)について、本学級では基本的に5人全員が一斉に同じ活動に取り組んでいる。指導者は、後期課程(中学校籍)の英語科教員(安丸)がT1として乗り入れ、週に1度(年間約35時間)授業を実施している。授業の構成・実施・評価まで安丸が行い、大江は特別支援学級(1stステージ)の担任として主にT2として授業の補助を行った。本実践報告は、主にT2の視点から記述する。また、児童は、交流クラスでの交流学习の実施・欠席等の理由で、必ずしも毎時間に5人のメンバーがそろって学習しているわけではない。

3. 授業実践の概要

3.1. 単元計画と授業構成

今回取り上げる単元は、2学期に実施した「アイスクリームやさんごっこをしよう」で、アイスクリーム屋さんになりきってお客さんに来てもらい、大きさや味も様々なアイスクリームカードをお客さんに渡し、お客さんにオリジナルのアイスクリームを作ってもらおうという活動だった。学習内容や単元の流れは指導者(安丸)が作成し児童に提示した。表1は、本単元のおおまかな学習内容と参加児童を示している。また、毎回の授業の構成はほぼ固定されて

おり、3つのルーティン活動[①あいさつの歌・あいさつ②歌(曜日・月)③ダンス(“7 steps” “Head shoulders knees and toes”)]を一通り行った後(表2)、表1に挙げた単元内容に移る(アイスクリーム屋さんプレオープンや本番など、やり取りにある程度の時間が必要な場合は、指導者が児童と話をしながらルーティン活動の長さを調整してやり取り活動のための時間を捻出した)。

表1. 単元「アイスクリームやさんごっこをしよう」学習内容

	実施日(R7)	学習内容	参加児童
1	9月9日	新しい単元の導入・「店員さんのことば 話し合い」	A・B・C児
2	9月16日	単元計画の紹介・「店員さんのことば 練習」	A・B・C児
3	10月7日	「店員さんのことば・お客さんのことば 練習」 オリジナルメニューづくり	A・B・C・D児
4	10月14日	オリジナルメニューづくり	A・B児
5	11月4日	「店員さんのことば・お客さんのことば 練習」	A・B・C・D児
6	11月11日	指導者・担任とお店屋さんごっこ(やり取りの練習)	A・C児
7	11月18日	アイスクリーム屋さんプレオープン	A・B・D児
8	11月25日	アイスクリーム屋さん本番	A・B・C・D児

※E児は本単元に参加していない。

表2. 毎回の授業構成とルーティン活動

	ルーティン活動	活動内容
1	あいさつ	・あいさつの歌(“Hello song”) ・あいさつ(“How are you?”)
2	歌	・“Days of the week” ・“Months of the year”
3	ダンス	・“7 steps” ・“Head shoulders knees and toes”
4	<u>単元の内容</u>	★毎時間変わる★
5	あいさつ	・あいさつの歌(“Good bye song”) ・あいさつ(“Good bye.”)

3.2. 毎時間の単元での活動内容

ここでは、本単元の学習内容(表2、灰色の箇所)について取り上げ、本単元の学習が実際にどのように進んだかをおおまかに紹介する。

第1時(9/9)、学習のテーマ「アイスクリーム屋さん」を指導者が示し、児童に期待と見通しをもたせた。その後、アイスクリーム屋さんの店員をするためにどんな表現が必要か指導者と児童で確かめ、ホワイトボードに考えたことを残して次回からアイスクリーム屋さんの学習を進めることを児童と確認した。

第2時(9/16)、学習の見通しを立てるため、指導者は単元のテーマにちなみアイスクリーム型の単元計画(図1)を児童に提示した。アイスクリームのコーンに単元のおおまかな目標と、本単元の流れ(その上のアイスクリームに書かれた活動内容を1段階ずつ進めていく)を児童と教員で共有した。加えて、前時に児童と指導者で話し合ったアイスクリーム屋さんの店員をするのに必要な表現を、英語で何というか指導者の手本を聞いてまねして声に出して練習した。

第3時(10/7)、アイスクリーム屋さんの店員が使う表現を練習した。最初は指導者と児童の1対1でやり取りをしながら練習していたが、メニュー表をもって児童同士で店員とお客さんに分かれてやり取りを交代しながら何度も楽しんだ。その後、児童は一人一人がオリジナルアイスを開発して本番に売り出すことにし、児童はデジタル端末のお絵描きツールや検索ツールで自分のオリジナルアイスを考えて作った。

第4時(10/14)、欠席者が多かったことと、出席者が2人ともオリジナルアイスが出来上がっていないだったので、オリジナルアイス商品開発に時間を費やした。

第5時(11/4)、店員の表現とお客さんの表現を練習した。この時間には、指導者が作成したアイスクリーム型単元計画を担任(大江)がロイロノートでカード化・デジタル化し、eポートフォリオとして活用した。第3時はやり取りを楽しんだが、第5時では、児童がデジタル端末に向かってこれまでに聞いて覚えた表現を吹き込むことに集中し、吹き込んだ自分の音声を聞いたり、繰り返し録音したりして楽しんだ。

第6時(11/11)、児童は次回にプレオープンの活動があることを知り、仕上げの活動として指導者・担任とお店屋さんごっこを楽しんだ。店員さんとお客さんが使う表現を確かめて練習した後、サイズ3種類×15種類の味のアイスクリームカードを机の上に並べてアイスクリーム屋さんを準備した。児童は店員役、指導者と担任はお客さん役になってやり取りを行った。やり取りの際、指導者と担任は、お客さんの役に加え、児童が言葉を忘れたときなどに支援する役も同時に行った。

第7時(11/18)、プレオープンとして職員室から教頭先生を迎え入れた。児童は店員役として、お客さん(教頭先生)にアイスクリームを売るやり取りを1人ずつ行った。指導者と担任は、児童の支援と児童のやり取りの様子の記録(写真・動画の撮影)を行った。次回の本番の活動につながるように、指導者や担任以外の教職員とのやり取りの経験を積むようにした。

図1. 本単元の単元計画

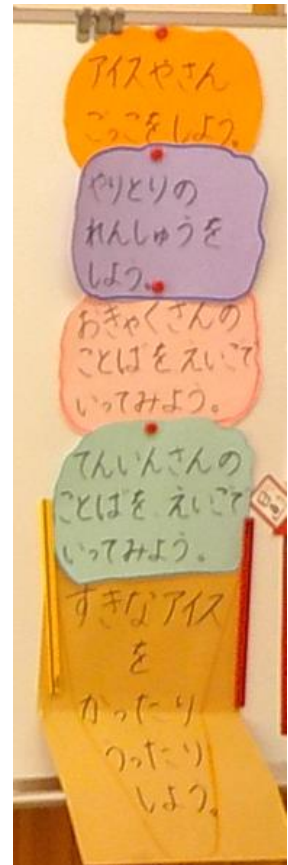


図2. 本単元用 e ポートフォリオ



第8時(11/25)、アイスクリーム屋さん本番の活動を行った。職員室から5名程度の教職員が代わる代わる来室し、お客さんとしての協力を得た。児童は店員役としてお客さん(様々な教職員)にアイスクリームを売るやり取りを行った。指導者と担任は第7時同様、児童の支援と記録を行った。

4. 児童の様子

本単元での児童の学習の様子を特に欠席の少なかった2名(A・B児)にしぼって紹介する。

4.1. A児に焦点を当てる

A児は8回全ての授業に参加した(表3参照)。夏休み明け間もない第1時では、まだ声を出したり体を動かしたりして表現することに抵抗があり、参加が難しい様子だった。聞くことは行っていた。

第2時以降、少しずつ表現できることが増えていった。例えば、あいさつの時に両手を挙げて“Happy!”を表すことができたり、ダンス(“Head shoulders knees and toes”)で頭や肩をさわり始めるなど、身体を使った表現が目立ち始めた。

第5時には、指導者(安丸)と同時になら店員さんの言葉を言うことができ、eポートフォリオに自分のがんばりを指導者と一緒に録音することができた。また、次の第6時には、初めて曜日の歌を口ずさみ始めた。同じ歌を4月からずっと聞いてきて、半年間たまってきたインプットがあふれ出すように口ずさみ始めたことを指導者と担任で非常に喜び合っていた。指導者は「今日は記念日!」とその喜びをA児に伝え、A児も自信がついたのか、どんだん歌を口ずさんでいた。

第7時でも勢いは止まらず、歌を口ずさみ、教頭先生とのやり取りでは指導者の助けがあれば“May I help you?”とたずねたり、その後のやり取りを行うこともできた。第8時の本番でも、指導者の助け(手本を聞くこと)があれば“Here you are.”などの表現を言うことができた。

表3. 本単元でのA児に関する特記情報(担任メモより抜粋)

	実施日	学習内容
1	9/9	・ダンスのときに参加するのはまだ難しい
2	9/16	・“How are you?”と聞かれてすぐに両手をあげて“Happy!”を表す ・めあての文(ひらがな)を上手に読み上げたことで指導者にほめられる ・店員さんの言葉は、指導者が近くで手本を聞かせてもまねることはまだ難しい
3	10/7	・“How are you?”と聞かれてすぐに両手をあげて“Happy!”を表す ・前に出てお店屋さんやお客さんになるのは気が進まない様子だが、友達のやり取りを集中して聞いている ・iPadで黄色いアイスをお絵描き
4	10/14	・ダンス、ちょっと頭と肩をさわられた ・オリジナルアイスに名前を付けることができた
5	11/4	・指導者の助け(同時に言う)があれば、“May I help you?” “What do you want?” 言えた(eポートフォリオにも録音できた)
6	11/11	・初めて歌を口ずさむ→ほめられて次々口ずさむ ・指導者の助けがあれば“May I help you?” “What do you want?” 言えた
7	11/18	・今日も曜日の歌を歌えた ・指導者の助けがあれば、教頭先生に、“May I help you?”とたずねられる

8	11/25	・指導者の助け(手本を聞くこと)があれば 小さな声で“Here you are.”と言いながらアイスクリームカードを渡せた
---	-------	---------------------------------------------------------------

4.2. B 児に焦点を当てる

B 児は、第6時以外の7回の授業に参加した(表4参照)。夏休み以前から、知っている英語の表現を使おうとする様子が見られ、第1時では指導者の代わりに先生役として“How are you?”と友達に調子をたずねたり、本日の曜日を伝えたりすることができた。

第2時以降も前向きな参加が多く、デモンストレーションでどんどん前に出て発表していた。道徳の授業でも役割演技を非常に好み、「演じる」ことが本人の学びにつながりやすい。これまでに習った表現を自然にやり取りに取り入れることもできていた(第3時)。また、第5時の e ポートフォリオへの録音も、デジタル端末の操作が得意ということもあり、とてもスムーズに自分で記録できた。

第7・8時のプレオープンと本番の活動では、この単元の学習への意欲の高さからか、お客さんを職員室に行き呼び込みを始めるくらい積極的だった。本人は意識していなかったかもしれないが、お客さんを積極的に呼び込むことは、本人の学習をより豊かにする環境を整えることにつながったのではないかと考える。また、言われなくても声に出して練習するところにも積極性が表れているように感じる。本人は、アイスクリーム屋さんになりきることを楽しんでいるので、お客さんでサイズについてよくわかっていない人がいたら、きちんと“S, M, L”と言いながらアイスクリームカードを指差し、相手に分かってもらおうと自分の言葉を尽くそうとしていることがわかる。

表4. 本単元での B 児に関する特記情報(担任メモより抜粋)

	実施日	学習内容
1	9/9	・指導者の代わりに“How are you?”と調子をたずねたり、本日の曜日を英語で友達に知らせたりできた
2	9/16	・積極的に前に出てきて、指導者とデモンストレーションができた(店員役)
3	10/7	・店員役になって D 児に接客、“～, please.”や“Ok.”など使える表現をアドリブで追加。お客さん役でも前向きに参加
4	10/14	・あいさつ・ダンス・歌◎
5	11/4	・助けがなくても“May I help you?”言えた(e ポートフォリオにも録音できた)
6	11/11	※欠席
7	11/18	・教頭先生にアイスクリームを売るやり取りができ、おすすめを聞かれて自分がオリジナルで作った不思議な味?のアイスクリームをおすすめすることができた
8	11/25	・職員室に呼び込みに行く ・“May I help you?”を勝手に1人で練習 ・様々な教職員にアイスクリームを売ることができた。サイズについて分からないお客さんには、“S, M, L”とアイスクリームカードを指差しながら即興的に分かりやすく説明を追加していた。

5. 情報活用能力と関わる指導者・担任の支援や働きかけ

ここまで本単元のおおまかな流れと児童の様子を例を示してきた。それらを踏まえ、指導者や担任の働きかけや支援がどのように本学級の児童の情報活用能力に作用しているかについて論じる。

5.1. 言語によらない表現(身体を使った表現)を引き出す場の創出

A 児の例が顕著だったが、A 児が少しずつ声を出せるようになるまでに、身ぶりによる表現が先に表出され始めた。指導者は言語的な表現が苦手な児童でも、身体的に表現できるような活動を授業構成の中に常に取り入れていた(例:ルーティン活動のダンス・How are you?と聞かれた時の答え)。A 児にとっては身体的な表現を行うことが足場となり、少しずつ自信をつけ、言語的な表現ができる段階へと進んでいったのではないかと考える。

情報活用能力の体系例(文部科学省 2019)からであれば、「A 知識及び技能 2問題解決・探究における情報活用の方法の理解 ①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ステップ1h 相手に伝わるようなプレゼンテーションの方法」に関わっていると考える。身体的な表現も我々にとって重要な表現方法であり、時には身体的な表現方法が相手に情報を伝える上で重要な役割を担うこともあるだろう。一つの表現方法として知ることは、他の表現方法を手に入れる一つの足がかり・足場になるのではないだろうか。指導者が4月から毎時間指導し続けていた歌やダンスは、何度も繰り返すことで児童が自分で使える表現方法を学ぶ貴重な機会となっていたと考える。

5.2. 手本の提示

A 児は、まだ自分で声に出して表現することに自信がない段階にあるようだが、指導者は一貫して A 児のそばで直接声を出して手本を提示している。担任(大江)は、児童が自分で情報を選んで学習できるようになればよいと考え、指導者の手本(店員版)をいくつか撮影し、ロイロノートで児童が使える(視聴してまねできる)ようにしようと計画した。しかし、結局指導者の動画の手本は使用せずにこの単元を終えている。なぜなら、A 児にとって動画の手本よりもそばにいる指導者からの声の方が圧倒的に手本(支援)として分かりやすいからではないか。自分が情報を探さなくても、目を合わせて助けを求めれば必要な情報を教えてもらえる。そばで適切な支援してくれる人がいるという、少人数での授業ならではの理由だと言える。

情報活用能力の体系例(文部科学省 2019)からであれば、「A 知識及び技能 2問題解決・探究における情報活用の方法の理解 ①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ステップ1a 身近なところから様々な情報を収集する方法」に関わる能力ではないかと考える。自分から情報を探するのが難しい児童については、ステップ1の前段階として「身近な情報源を信頼して情報を受け入れる」という段階を想定する。A 児は、最初はいくら手本を提示しても、促されても、まねることを渋っていたが、本単元の第5時では指導者の促しによって指導者と同時に声を出すことができた。本活動のデジタル Can-Do(pp.17-21)の尺度で言えば、②の補助的な段階にたどりついたことになる。そして、第8時では、A 児は指導者に促されるのではなく、横についた指導者の方を見て目で助けを求め、指導者の手本を聞いて自分からまねして“Here you are.”とすることができた。これは上記の尺度の③のおおむね満足できる段階にあたる。A 児は、学習を重ねる中で情報を自分から取り入れようという姿勢が芽生えつつあるのではないかと考える。児童の実態や学級の実態に合わせて、情報の取り入れ方も様々な形を想定できるのではないだろうか。

5.3. 様々な他者との関わりの設定

B 児の例で顕著だったことは、プレオープンや本番で自分の思いを前面に出し、活動を心底楽しんでいたことだった。プレオープンで、教頭先生にはおすすめのアイスを聞かれて、自分の創作したオリジナルアイスを紹介す

ることができた。本番には、お客さんとして来られた司書の先生がアイスの3種類のサイズについてB児に首をかしげて“Size?”と返したとき、B児は機転を利かせて、“S, M and L”と机の上のアイスクリームカードを指差しながらスムーズに返答することができ、司書の先生がアイスのサイズを選べるようにしていた。このようなB児のアドリブを引き出すようなやり取りは、指導者と担任だけではなかなか引き出しきれない。普段関わらない多様な他者と関わるからこそB児の力が発揮されたのではないか。

B児が発揮していた力は、情報活用能力の体系例(文部科学省 2019)の、「B 思考力・判断力及び表現力等 | 問題解決・探究における情報を活用する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力のステップ1「相手を意識し、わかりやすく表現する」」に関わる能力だと考えられる。指導者は、本校が施設一体型の小中学校である利点を生かし、前期・後期課程関わらず様々な教職員をに協力を求め、実際に何人もの教職員が5人の児童の学習のために時間に都合をつけて協力してくれている。特別支援学級だからこそ可能な面かもしれないが、学校にある様々な資源(人的資源も含む)を上手に活用できる力が、指導者や担任には求められていると考える。

5.4. デジタルツールを活用した振り返り

指導者と担任が協力して、児童の学習の成果を記録することができるような e ポートフォリオを作成し活用を試みた。A・B児はとても集中して自分の声を記録し、A児については自分が声を出すきっかけとなる活動になった。B児にとっては自分が得意とするデジタルメディアを使っただけの学習だったことで本人の積極性を引き出すことにつながった。加えて、ここではC児が e ポートフォリオに自分の学んだ表現を吹き込んだときのエピソードについても追記したい。C児は指導者の助けを借りて無事自分の学んだ表現を録音することができた。本人はその出来映えにとっても納得がいったようで、何度も何度も自分の声を再生して聞いていた。言語を介した内省にはなっていないかもしれないけれど、デジタルツールを使うことでしかこの経験を得ることはできないと考えると、自分で納得のいく音声を録音できることには筆者(大江)がこれまで考えていた以上に、子どもたちにとって価値のあることだと感じた。

C児の行っていたことは、情報活用能力の体系例(文部科学省 2019)の、「A 知識及び技能 2問題解決・探究における情報活用の方法の理解 ②情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解 ステップ1 b 情報の活用を振り返り、良さを確かめること」に関わる能力だと考える。指導者・及び担任は、児童が自分の声を録音してうまくいったことに満足して何度も聞いている姿も、なんだかうまくいなくて何度も消しては録音、消しては録音する児童の姿も、子どもたちが情報から何かしらの価値を引き出そうとしていることの流れだと捉えることができる。英語活動・外国語活動では、音声中心の学習が展開されることを考えると、音声を残すことができる内省のためのシステムを指導者や担任が構築しておくことは、言語能力を高めたりメタ認知能力を高めたりするだけでなく、情報活用能力を高めることにもつながるのではないだろうか。

6. まとめ

本論では、特別支援学級における外国語授業の一例として「アイスクリーム屋さんごっこ」の実践を紹介し、特別支援学級児童が見せる様々な学習の様子を基に、指導者や担任が行っている授業上の支援や働きかけの中にある特別支援学級児童の情報活用能力を高める契機として、①身体表現を引き出す場の創出②手本の提示③様々な他者との関わりの設定④デジタルツールを活用した振り返り、の少なくとも4つを見いだせることを述べてきた。ここで取り上げている内容は、児童の情報活用能力を高めるための授業上の支援や工夫の中のほんの一部に過ぎない。さらなる実践の中で、ここに挙がっていない、情報活用能力を高めるための別の契機についても探っていく必要があると考える。

参考文献

文部科学省(2019)「【情報活用能力の体系表例(IE-Schoolにおける指導計画を基にステップ別に整理したもの)】(令和元年度版)全体版」

https://www.mext.go.jp/content/20201014-mxt_jogai01-100003163_005.pdf
[fieldfile/2019/05/16/1416859_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/2019/05/16/1416859_02.pdf)

文部科学省(2026)「「AIを含むデジタル学習基盤の活用の在り方」について」(令和8年2月20日教育課程部会外国語ワーキンググループ資料1)

https://www.mext.go.jp/content/20260220-mxt_kyoiku01-000047536_03.pdf

研究論文

新中学校第 1 学年検定教科書の振り返り単元にみられる 小中接続への工夫を活かした外国語科接続期の指導

黒川愛子（帝塚山大学）

1. 研究の背景

文部科学省（2017a）による小学校外国語活動・外国語の完全実施から6年が経過しようとしている。2024年度には令和6年版文部科学省小学校外国語検定教科書（新小学校教科書）が、2025年度からは令和7年度版文部科学省中学校外国語検定教科書（以下、新中学校教科書）の使用が始まった。2024年度からは全国全ての小学校・中学校（以下、小中）等を対象に学習者用デジタル教科書が段階的に導入されている。文部科学省（2017b）では、外国語活動における「聞くこと」を起点とした言語活動の充実から、総合的・系統的な外国語科での学習を行い、「中学校への接続を図ることへの重視」を掲げ、文部科学省（2017c）でも「小・中学校の接続（以下、小中接続）を重視するとともに学びの連続性を意識した指導（文部科学省、2017a）」を強調している。小中教員ともに、小中接続を意識しての指導が重要課題である。

文部科学省（2024）では、「令和5年度『英語教育実施状況調査』」において、回答した中学校の82.5%が「小学校と連携した」と回答しているものの、17.2%の中学校は「連携しなかった」と回答したことも報告している。文部科学省（2025）では、小中の連携に関わって、「前年度までに近隣等の中学校（小学校）と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組をどの程度行いましたか」という質問に対して、経年比較では増えてきているものの、令和7年度において、「よく行った」と回答した小学校は20.4%、中学校が27.7%であり、3割に満たないことも報告している。小中連携に依然、課題があることは明らかであると考えられる。

文部科学省（2024）では、中学校第3学年（以下、中3）を対象とした令和5年度全国学力・学習状況調査英語の結果分析において、英語力中間層も基本的な文法事項・文構造の習得に課題が見られ、基本的な英語の理解を促しながら言語活動につなげる継続的な活動を掲げ、「授業の内容がよくわかる・英語が好きである」ことも英語力向上に有効であること、を報告している。

文部科学省（2023）は児童への質問紙調査において、「英語の学習が好きか」という質問に対して、小学校第6学年（以下、小6）の64.3%が「好きだ」「どちらかと言えば好きだ」と肯定的な回答を行っているが、「どちらかと言えば好きではない」「好きではない」と回答した割合がそれぞれ17.7%、12.3%で、「わからない」と回答した割合が5.8%であり、否定的な回答を行っている児童が3割いることを報告している。「英語の授業がどの程度わかりますか」という質問に対しても「わかることとわからないことが半分くらいずつある」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」と回答した割合は、それぞれ、19.5%、6.1%、2.6%であることも報告しており、約3割の児童が「わからない」という思いを抱いて英語授業を受けていることがわかる。

全国の小学生各学年男女各100名計1200名を対象とした調査を行った学研教育研究所(2024a)及び、全国の中学第1学年（以下、中1）から中3までの男女学年各100名計600名を対象とした調査を行った学研教育研究所(2024b)では、「英語が一番好き」と回答している割合が小6で2.5%、

中1で11.5%，中学第2学年（以下，中2）で14.5%，中3で17.2%と徐々に増えているが、「英語が一番嫌い」と回答している割合も小6で5%，中1で13.5%，中2で15.5%，中3で18%と増えていき，全教科内の順位はそれぞれ5位，3位，2位，2位であることを報告している。つまり，英語の好き嫌いは2極化しており，小6段階から中3段階までで，「英語が一番嫌い」とする生徒が増えていることは確かである。中学校英語教師はこれらの現状を受け止めつつ，授業を行う必要がある。

文部科学省（2023）は「今後もっと，英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり，英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようになりたいか」という質問に対して，「そう思う」と回答した小6生の割合は全体の60.6%，「どちらかと言えばそう思う」の回答割合は26.9%で，合計87.5%の小6生が英語で自身の考えや気持ちを伝えることに肯定的であることも報告している。英語が嫌いだと回答していても，英語で自己の思いを伝えることができるようになりたいという児童の思いを小中教員が大切に，授業改善を進める必要があると言えよう。

文部科学省（2025）では，学習者用デジタル教科書の効果・影響等の報告において，「子供たちの学力差への対応は重要なポイントで，教師による『課題の設定の仕方』は，学力差に対応する重要な働きかけの一つであることから，具体的な教師の役割や指導も意識しながら，授業改善を行う必要があること」とする有識者（WG委員）の意見も紹介している。学習者用デジタル教科書の活用と並行して，教師がどのような授業改善を行うかが最重要課題であると考えられる。

金谷他（2009）は「授業のよりどころは教科書である」とし，鈴木（2024）も「本文を大切にフル活用すること」の重要性を掲げている。筆者はこれまで，黒川（2023）で令和2年度版及び令和3年度版小中教科書指導者用デジタル教科書の特徴を調べ，その特徴を活かす小6及び中1段階の指導の提案を，黒川（2025）では新小学校学習者用デジタル教科書及び指導者用デジタル教科書の特徴を調べ，それらを活かす小中外国語科指導の提案を行い，黒川・アレン玉井・加藤・長沼・泉（2026）では，6社のホームページ内の資料をもとに，新中1教科書（以下，新教科書）内の小中接続に関わる特徴と工夫について報告を行った。

本研究では，新教科書の冒頭に設定され，中学校段階の本格的な学びの単元に入る前に，小学校での学びを活かし復習することを意図した単元（以下，「振り返り単元」）の分析に焦点を置く。小中接続及び，生徒の4技能5領域の向上に向け，この「振り返り単元」（以下，括弧を省く）において，どのような特徴や工夫が凝らされているかを調べ，中1の1学期前半の時期（以下，接続期）の指導について考察を行う。

2. 先行研究

教科書分析に関わる研究として，赤沢（2021）は3社の令和2年度版小学校外国語教科書（以下，旧小学校教科書）及び指導書におけるパフォーマンス課題について調べ，授業づくりや評価において求められる工夫を提案している。沢田他（2025）では，7社の旧小学校教科書の活動種とコミュニケーション活動のタスクを調べ，（1）教科書に掲載されている活動数は教科書間で差があり，活動数が多いグループと標準的なグループとに2極化している可能性があること，（2）活動の使用技能は，全体的な傾向としてListeningが多い傾向にあり，ReadingやWriting，Formの扱いが少ない傾向であること，（3）Speaking InteractionとSpeaking Speechについては，教科書間での配当割合に差が見られ，教科書の編集方針の違いが要因と考えられること，を報告している。沢田他はこれらの特徴を知ることにより，より効果的な外国語科の授業が展開できるのではないかとしている。

小中接続を意識しての研究として，三河（2021）では，中1生徒が成功期待感を高め，成功経験を

持てるように、校区の小学校で使用されている視覚教材を用いて、小学校で扱った教材を活用した指導、及び小学校で学んだ表現を使ってやり取りを行う Small Talk の取組を行っている。その結果、三河は生徒に「小学校で学んでいるからできそうだ」と自信を持たせる効果があったことや、7月に行ったアンケート調査の結果から、小学校で扱った教材を活用する意義を報告している。

小中の旧教科書分析及び小学校授業観察を行い、小中の英文法指導の接続について論じている渡慶次（2024）では、小中の英文法指導の示唆として、教員が（1）身近な話題や目的を中心に表現・文型を提示している小学校に対して、文型や用法の複雑さや困難さ、学年枠で文法項目の配置をしている中学校との根本的な特徴の違いを理解すること、（2）学習者の心理面を配慮しながら、音声に慣れ親しんできた小学校英語学習の背景を理解し、明示的知識導入の滞りない接続を行うこと、の重要性を強調している。

本研究では6社の中1新教科書（以下、6社教科書）内の振り返り単元における小中接続に関わる特徴と工夫を調べ、それらを活かす中学校外国語科指導についての一提案を行う。

3. 研究の目的

本研究では、小中接続及び、生徒の4技能5領域の向上に向けて、6社教科書内の振り返り単元において、小中接続に向けて、どのような特徴や工夫が凝らされているかについて調べ、考察を行い、その特徴や工夫を活かす接続期の指導についての提案を行うことである。

4. 研究の方法

本研究で分析に用いた6社教科書は、令和7年度版 *BLUU SKY English Course 1*（以下、*BL*）、*Here We Go! ENGLISH COURSE 1*（以下、*HWG*）、*NEW CROWN English Series 1*（以下、*NC*）、*NEW HORIZON English Course 1*（以下、*NH1*）、*ONE WORLD English Course 1*（以下、*OW*）、*Sunshine English Course 1*（以下、*SE*）である。分析を行った振り返り単元は、*BS*のLet's Start!、*HWG*のLet's Be Friends!、*NC*のStarter、*OW*のSpring Board、*SE*のGet Readyである。*NH*はUnit 0からUnit 4までを「小学校で学んだ英語を復習しよう!」とし、頁数が他社教科書と比較して非常に多いことから、本稿ではUnit 0を振り返り単元として捉えることとする。また、6社教科書とも教科書全体に小中接続への工夫が観察される（黒川・アレン玉井・加藤・長沼・泉,2026）ことから振り返り単元の頁数は言及しない。

分析方法は、6社教科書の振り返り単元内で、生徒が各領域に関わる学びをどう進めていくのかを、教科書内の記載、及び教科書内の二次元コードから生徒が視聴できる動画や音声をもとに調べる。生徒がそれらを用いて、いかなる学びを行うことができるかを調べ、小中接続及び生徒の4技能5領域向上の視点から、各教科書の振り返り単元内の小学校での既習語彙表現（以下、既習語彙表現）の復習とアルファベット学習の復習（以下、アルファベット復習）に分け、その特徴や工夫について考察する。

5. 分析結果と考察

5.1 6社教科書内の振り返り単元の状況と考察

5.1.1 6社教科書の振り返り単元内の既習語彙表現の復習（以下、既習語彙表現復習）の特徴と工夫及びその考察

表1から表6に、6社教科書の既習語彙表現復習としての活動概要と関連する領域（以下、関連領

域)を示す。教科書名をアルファベット順に並べることとし、表1に *BS*、表2に *HWG*、表3に *NC*、表4に *NH*、表5に *OW*、表6に *SE*について示す。各表の括弧内のLは「聞くこと」、SIは「話すこと[やり取り]」(以下、「やりとり」、SPは「話すこと[発表]」(以下、「発表」)、Rは「読むこと」、Wは「書くこと」を示し、以下同様とする。表1から表6までの表内の丸数字は振り返り単元内の項目を示す。

表1 *BS*の振り返り単元 Let's Start! 内の既習語彙表現復習の活動概要と関連領域

<i>BS</i> の振り返り単元 Let's Start! 内の既習語彙表現復習の活動概要と関連領域
①「必要な情報やおおまかな内容を捉える」を「目標」とし、学校生活の思い出・学校内の案内・時間割・学校行事・部活動等の5～10文の対話を絵を見て聞き、その内容に適する絵を選ぶ。(L)
②5文構成の好きな食べ物に関わる対話を聞き、話題である食べ物の絵を選ぶ。次に、誌面上のWhat foodを用いた好きな食べ物に関わる対話文例を参考にやり取りする。続いて、表内の別の5種類の語を用いて好きなもの(色、スポーツ等)についてやり取りする。(L, SI, R)
③6文構成のcanを用いた対話を聞き、その内容に適する絵を選ぶ。次に誌面上のcanを用いた対話文例を参考にやり取りし、別の2つの動詞も用いてやり取りする。(L, R, SI)
④4文構成のHow many～?を含んだ対話を聞き、その内容に適する絵を選ぶ。続いて記載されている2文のHow many～?を用いた例文を参考にやり取りする。(L, SI, R)
⑤5文構成の誕生日に関わる対話を聞き、適する絵を選ぶ。続いて、記載されている対話文を参考に誕生日をたずね合う。(L, SI, R)

表1から、*BS*では視覚情報をヒントに対話を聞き概要をつかむ・絵を選ぶ「聞くこと」から始まり、5文構成の既習語彙表現を含む対話を聞き、誌面上の例文を参考に2文の「やり取り」を行う設定があることから、「聞くこと」「やり取り」ともに平易な活動にしようとする意図が観察される。

表2 *HWG*の振り返り単元 Let's Be Friends 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

<i>HWG</i> の振り返り単元 Let's Be Friends 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域
①8文～10文構成の4名の自己紹介を速度(6段階)を選んで、Listenでは音声のみを聞き、Watchでは、字幕あり・なしを選択し、ヒントとなる写真が英語と同時に登場する動画を見て聞く。聞き取った内容の中の一部のイラスト(住んでいる国、好きな食べ物)を選ぶ。(L, R)
②Smile, Eye Contact, Clear Voice, Responseが写真とともに掲載されているKey to Communicationを参考に、speakで名前を伝え、誌面上の8語を用いて気持ちや状態をやり取りする。次に3～6文構成のやり取りを聞き、4枚の絵からどの場面の対話かを選ぶ。(SI, R, L)
③誕生日をたずね合う12文構成の対話を聞いた後、好きな色をたずね合う10文の対話を、アニメを見て聞き、各人物が何色が好きかを誌面の英語付きの絵から選ぶ。Listen and Pointで教師の言う英語を聞き、誌面上の色やものを指さす。Speakで絵と例文を参考に誕生日や好きなものについてやり取りし、互いの共通点を見つける。春休みにしたことを、頁に記載されている巻末のActive Wordsを参考に発表する。(L, R, SI, SP)
④春休みの出来事を話す7文構成の英文を聞き、行った場所と楽しんだことを誌面の英語付きの絵から選ぶ。誌面上のI want to～. I enjoyed～. It was fun.の記載を参考に聞き、「感想も言える

といいね。」という記載を見つつ、やり取りする。(L, R, SI)

⑤中学校でしたいことを伝える 9 文構成の英文を聞き、できること・したいことについて誌面上の英語付きの絵から選ぶ。Speak で、Active Words や「友達の話の話を聞いたら、ひと言返してみよう」という記載を参考に「できること・したいこと」についてやり取りする。(L, SI)

⑥二次元コードから登場するルーレットを回してマスを進み、止まったマスの数字を英語で言う。絵のあるマスに止まった際や、各テーマ(birthday, sports, colors, foods and fruits 春休みの出来事等)で自分に関係のある語や文を言うか、友達に質問する。誌面上の I can play baseball. と What food do you like? をヒントにやり取りする。(SP, SI, R)。

⑦誌面上の Sports, Foods, Activities 等の 6 つの話題と I like ~. I can ~. I want to ~. の記載を参考にクラスやグループで自己紹介を行う。「他に、次のようなことをつけ加えてもいいね。」と My birthday is ~. I went to ~. I enjoyed ~. It was ~. I like ~, too. と Let' s enjoy ~ together. の記載を参考にやり取りする。「友達の素敵な一面を見つけよう」欄に書き込み、「ふり返り」に工夫したこと、友達から学んだことを書く。(SI, L, R)

表 2 から、HWG でも BS と同様に、聞き取った情報から一部を答えればよい平易な「聞くこと」を設定していることがわかる。生徒は、動画上の英文を見つつ音声を聞くことができるため、徐々に中学校段階の「読むこと」に慣れていくための支援の工夫であると考えられる。表 2 の②からは、誌面上の既習語彙を用いて、既習の「やり取り」の復習をするための支援が観察され、表 2 の③からは、まず既習語彙である「色や食べ物」を聞いてわかるかを確認し、やり取りを聞くための平易な入口にしようとする工夫が観察される。表 2 の④からも「聞くこと」から平易な「やり取り」につなげようとする工夫や、生徒が思考を広げつつ、やり取りするための支援が観察される。表 2 の⑤では小学校でも行っていたリアクションを含めたやり取りを行うための促しがあり、表 6 の⑥のルーレット機能は生徒が楽しく発話を行っていくための工夫であると考えられる。さらに、表 2 の⑦からは、生徒の思考を促し、生徒が相手意識を持って、より多くの情報をやり取りできるよう支援するための工夫が観察される。

表 3 NC の振り返り単元 Starter 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

NC の振り返り単元 Starter 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

①Scene で 2 人の人物の 10 文構成の自己紹介の対話を聞く。「アニメーション (以下、アニメ) を見る」をクリックし、どちらの人物が話しているかわかるように提示されるアニメを見つつ聞く。「音声を聞く」をクリックし、絵を見つつ、1 文再生か連続再生かの選択をし、音声の速度を調節して、音声を聞く。「スクリプト」をクリックすると、対話の英文が登場し、再生されている箇所が赤字、これから再生される箇所は青字となるのを見つつ聞く。次に、My dictionary を見て、既習の教科名から 9 つ選び、誌面にある 4 線上の Bingo 欄に英語を書く。誌面上の What subject do you like? I like English. How about you? を参考にクラスメイトに好きな教科をたずねビンゴを行う。続いて、Let' s Play でサイコロをふって出た目に書かれたテーマについて、同ページ内にある「つなぎことばを使おう」にある 3 語や、「リアクションをしよう」欄にあるリアクションの語 (9 語) を参考に 1 分間でやり取りする。(L, R, W, SI)

②Scene で①と同様に、別の 2 名の人物による「好きなキャラクター」に関わる 9 文構成のやり取

りを聞く。Let's Talk で自分の好きなキャラクター名を英語で誌面の 4 線上に書く。誌面上の Who is your favorite character? I like Mario. How About you? を参考にやり取りし、相手の名前と好きなキャラクターを 4 線上に 4 つ書く。サイコロトークは①と同様の活動を行う。(L, W, R, SI)

③10 文構成の 3 名の人物のやり取りをアニメを見つつ聞く Let's Talk で「日曜日の過ごし方」「朝食に食べるもの」「起床時間」について、書かれた英文を使ってグループでやり取りし、1 つテーマを選び、ランキングを作り、4 線上に書く。(L, R, SI, W)

④3 名の登場人物による 9 文構成の「修学旅行でいきたい場所」についての会話をアニメを見て聞く。資料動画の屋久島の映像を見て、8 文構成の英文を聞く。誌面上の Where do you want to go? I want to go to Kyoto. I want to go to Yakushima. を参考に、グループで「行ってみたい国や地域」についてやり取りし、ランキングを書く。(L, R, SI, W)

表 3 から、NC では、8 文以上の会話を動画で視聴する際に、生徒は誰が話しているかを把握しながら聞くことができ、内容理解への支援であると考えられる。また、英文原稿を見ながら音声を聞くことができることは、生徒の「読むこと」への負荷を小さくしようとする工夫であると考えられる。

表 4 NH の振り返り単元 Unit 0 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

NH の振り返り単元 Unit 0 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

①教科書を閉じて英文の音声のみを聞く。誌面上の絵を見ながら 7 文構成のやり取りと 9 文構成のやり取りを聞き、どの場面のやり取りかを考える。聞いた英文中の 2 文及び 3 文を誌面上で読む。既習語彙表現の復習を行う。(L, SI, R)

②Your Turn にある例文と本文を参考に名前と好きなものについてのやり取りを行う。(L, R, SI)

表 4 から、NH において、生徒が聞く英文内の全てを英文として提示するのではなく、「やり取り」に必要な英文のみが記載されており、生徒の「読むこと」への負担を軽減しようとする意図や、「読むこと」から「やり取り」につなげる支援があると観察される。

表 1、表 2、表 3 及び表 4 からわかるように、BS, HWG, NC, NH の各振り返り単元において、生徒が聞く英文は小学校段階で用いていたリアクションやつなぎ言葉が含まれた 8 文構成以上から 10 文を超えるものである。しかしながら、各誌面上に記載されている英文は、続く活動において生徒がやり取りするための 2 文または 3 文だけであり、生徒は最初に聞いたやり取りと誌面上の英文を参考に小学校で行ったやり取りを思い出して行う平易な活動に取り組めばよい活動となっている。この生徒の「やり取り」における負荷を小さくしようとする配慮は 4 社の共通点と考えられる。

表 5 OW の振り返り単元 Spring Board 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

OW の振り返り単元 Spring Board 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

①Nice to meet you. では 6 人の登場人物から 6 文構成の自己紹介（名前・呼び方・好きな教科・スポーツ）を聞く。「どんなことを言っているのか聞いてみよう。」という設問に対して、生徒はどの点について聞き取るか・答えるかを自身で選択し考え、答える。(L)

②4 好きな教科をたずねるやり取り (2 文)・レストランでの注文のやり取り 4 文・入りたい部活動と得意なことのやり取り (5 文)・過去形を用いての今日の出来事 (3 文) と 4 つのやり取りを聞

き、どんな会話なのかを聞き取る。次に再度、それらのやり取りを聞いて絵の中のどの場面の会話なのかを考える。「絵の中に他に英語で言えるものがあるかな」と聞いた会話の内容以外で、絵の場面からやり取りができるかをたずねる工夫がある。(L, SI)

⑥「日付や教科の表し方を確かめよう」では月の名前、日付・曜日・中学校の教科名を聞く。二次元コードから活動用ワークシートを用いて、生徒は自分の名前を書く・誕生日をたずねるやり取りを行い、33名の友達の名前と誕生日を4線上に書く。「理想の時間割を考えて言い合おう」では上記活動シート上及び誌面上の英文を参考にしてやり取りを行う。(L, W, SI, R)

表5から、OWでは生徒が自身で聞き取るべきポイントを選ぶ・答えたい内容を選ぶことができる設定があり、生徒が思考を働かせ「聞くこと」に取り組む個別最適な学びへの支援であると考えられる。二次元コードから使用できる活動用ワークシートを用いてやり取りする支援があることもわかる。

表6 SEの振り返り単元 Get Ready 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

SEの振り返り単元 Get Ready 内の既習語彙表現復習としての活動概要と関連領域

①4文構成の対話文1つを聞き、町の中のどの箇所での対話であるかを聞き取る。(L)

②「英語すごろく」で小学校での既習表現を用いて、相手に伝えたり、やり取りする。(SI, SP)

③好きな教科、できること、誕生日、出身地、なりたいものについてたずねる8文構成のインタビューでの対話文を聞き、その内容に合う日本語を選ぶ。次に「なりきりインタビュー」として、誌面にある4名の人物についての日本語の情報や、「質問カード」に「好きなもの Do you like~?」のように掲載されたものをヒントにやり取りする。続いて、友達にインタビューを行い、聞き取った内容を表に記入する。(L, SI) ④クラブ活動の紹介文を聞き、4枚の絵から、その内容に合う絵を選ぶ。4枚の絵の下にはそれら4文構成の英文が4種類、記載されており、生徒はそれらを見ながら英文を聞くこともできる。次に、「入りたいクラブ活動の入会届」を書くための3文構成の例文が提示されており、その例文と欄外にあるWord Box内のいろいろなクラブ名を参考にMy name is ..., I want to join the ~ I ~をなぞり書きし、入部届を書く。「自己PRではできることは好きなことなどを書いてみよう」という記載をヒントに「自己PR」も書く。(L, R, W)

表6内③の「質問カード」は生徒が小学校で行ったやり取りを思い出して活動できるための支援であると考えられる。表6の④で示した4文構成の英文4種類の提示は、生徒が英語を聞きながら、どの英文であるかを考え、音声と英文の一致を徐々に行い、中学校段階の「読むこと」に進んでいくための支援であると考えられる。表6から、SEにおいて、小学校で学習した内容を用いて「聞くこと」「読むこと」に取り組むにつれ、「書くこと」につなげていく段階的かつ統合的な活動の意図が観察される。

5.1.2 6社教科書の振り返り単元内のアルファベット復習における特徴と工夫及びその考察

表7、表8、表9、表10、表11及び表12に6社教科書の振り返り単元内のアルファベット復習の概要と関連領域を示す。各表内の丸数字は活動の順番を示す。

6社教科書ともアルファベット復習のための多様な活動設計があり小学校段階の「読むこと」の復習を丁寧に行う意図が観察される。

表7 BSの振り返り単元 Let' s Start! 内のアルファベット復習の概要と関連領域

BSの振り返り単元 Let' s Start! 内のアルファベット復習の概要と関連領域
①アルファベットの発音を聞きつつ大文字・小文字が書かれた箇所を見て指差しを行う。(L, R) ②アルファベットの歌を聞き、一緒に歌う。(L, R) ③アルファベットの名前を聞き、続いて発音する。(L, R, S) ④アルファベットの名前と音を聞き、続いて発音する。(L, R) ⑤文字の形に気を付けてアルファベットの名前を聞き、文字を指差しする。(L, R) ⑥文字と絵を見ながら、文字の音と名前を聞き、続いて発音する。(L, R) ⑦単語を聞いて、語の最初に入る文字を書く。(L, R, W) ⑧単語を聞き、読まれた語を示す絵と文字を選ぶ。(L, R) ⑨絵と語を見て、同じ文字の音の違いに注意して聞き、発音する。(L, R, S) ⑩絵と語を見て、2つの文字で1つの音を表す音声を聞き、発音する。(L, R)

表8 HWGの振り返り単元 Let' s Be Friends 内のアルファベット復習の概要と関連領域

HWGの振り返り単元 Let' s Be Friends 内のアルファベット復習の概要と関連領域
①Listen and Read 1 ではアルファベットの名前読み・音読み・そのアルファベットから始まる英語を聞いて発音する。②Listen and Read 2 で1と同様に英語を聞き、その単語を聞き取る。③Listen and Write で同様に音声を聞き、その単語の最初の文字を書き込む。(L, R, W) ④Sounds and Letters 1 では Step 1 で単語の初頭音(子音)を意識し、音に合わせて繰り返す。⑤Step 2 で2つの音を聞いて、どちらの文字かを選ぶ。Step 3 で綴りを見て発音する。(L, R) Check で音を聞いて初めの文字を書き、声に出して読む。(L, W, R) 各2つの文字のところに Extra 欄があり、pig, big であれば、My pig is big. It' s a very big pig. のような英文を聞く。⑥Sounds and Letters 2 での母音字も同様の流れで学び、母音字の Check には英文を聞き、読まれた単語を2つから選ぶ。(L, R) ⑦Let' s Try では誌面上の各子音の発音の仕方を参考に、単語を読み、適する絵を探す。単語を見て発音し、その意味を表す絵を探す。(R) ⑧Sounds and Letters 3 では「母音字の異なる読み方」として、cat, name のように名前読みと音読みの復習を行う。Step 1 で音に合わせて繰り返し、Step 2 で各組の単語から下線部の母音の発音が異なるものと探す。Step 3 で綴りを見て声に出して読む。Check ではイラストを見て、絵に合う単語になるよう母音字を書き込み発音する。(R) ⑨Sounds and Letters 4 では2文字の子音字を含む単語を見て Step 1 で音に合わせて繰り返し、Step 2 で綴りを見て、声に出して読む。Check では音を聞いて、最初の2文字を書き、声に出して読む。(L, R, W)

表8の②から、HWGにおけるExtra欄は英文を聞き取ることに慣れていくことが意図され、応用力を持つ生徒も個別最適な学びが行えるための支援であると考えられる。表8の⑨からは「読むこと」から「書くこと」につなげる工夫も観察される。

表9から、NCにおいても、「読むこと」から「書くこと」への段階的な支援が観察される。NCには、表9で示した内容の後に、My dictionary という項目があり、小学校で学んだ語句や表現が掲載され、重要な語句は太字で示され、「話したり書いたりして活用できるようになろう」と記載されている。誌面内の二次元コードで、生徒はその絵をクリックすれば単語ごとに音声を聞くことができ、教科、食べ物のようにカテゴリー別になっている箇所をクリックし、その語彙を復習できる。既習語

彙表現の定着に向けての支援であると考えられる。

表 10 からは、NH では誌面上の記載と二次元コードを用いて行える活動が多様であり、児童が楽しい動画を見つつ音声を聞き、「読むこと」「書くこと」に触れることができるための工夫が凝らされていることがわかる。二次元コードで音声を聞く際に、項目別にわかりやすくなっており、生徒は自分が取り組みたいものを簡単に選択できることから生徒が個別最適な学びを楽しく行える支援があることがわかる。

表 9 NC の振り返り単元 Starter 内のアルファベット復習の概要と関連領域

NC の振り返り単元 Starter 内のアルファベット復習の概要と関連領域

① Starter 5 の「英語の音と文字を確認しよう」ではアルファベットの大文字と小文字が書かれ、apple April のようにアルファベットの音読みと名前読みの単語が記載され、それらが描かれている絵カードが並んだ紙面を見て、発音を聞き、聞こえた文字や単語を指さす。絵の中に、それぞれの文字から始まる単語をさがす・文字で提示されている語をさがす。(R) ② Sounds 1 では音声を聞いて、抜けている子音の文字をアルファベットから探し、指指しする。(L, R) ③ Sounds 2 では 5 つの単語と同じ音である母音が含まれる単語を選ぶ。(R) ④ Starter 6 では、国旗と動物の絵を見て、教科書内のキャラクターの出身国コード 3 文字と好きな動物を英語で書く。資料動画で、アルファベットの書き順を見る。(W) ⑤ Starter 1 ~ 4 で話した内容を思い出し、「単語や文を書く時のルールを覚えているかな？」を参考に、誌面上の英文の質問に自分の答えを英語で書く。(R, W)

表 10 NH の振り返り単元 Unit 0 に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

NH の振り返り単元 Unit 0 に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

① 「アルファベットの名前と音を確認しよう」で誌面上のアルファベットの大文字・小文字を見ながらアルファベットの名前読みだけを聞く・リピートする。(L, R) ② 動画を見ながらアルファベットの音読みを a a apple のように聞き、りんごの絵の上の小文字を見ながら聞く。(L, R) ③ 「アルファベットの名前と音を確認しよう」アニメ “Letter Images” では b, b, b, bat のような音声を動画内の動くイラストを見ながら聞き、動画内で文字の書き順も見る。(L, R, W) ④ 「読み方の違いを確認しよう」で誌面上のアルファベット小文字と単語・イラストを見ながら a, apple, apron のような音声を聞く。(L, R) ⑤ Check では音声を聞いて聞こえた小文字をノートに書く。(L, W) ⑥ 音声を uv, ohm のように音声を聞き、聞こえた音声を誌面上の文字を指さす。(L, R) ⑦ 「単語の中の音を聞き取ろう」では、イラストがあり、音声を聞いて最初に入る文字を書く。fan であれば、f と an を分けた音声を聞き、単語を書き込む。(L, W) ⑧ 「単語の中の音を聞き取ろう (クイズ)」では、pen の真ん中の文字を答えから選択すると正しい音をクリックするとピンポンと、誤った文字をクリックするとブーと音が出る仕掛けから生徒は答えを確認する。(L, R) ⑨ 「音声チャンツ」で音源を聞く。(L) ⑩ 「単語を読もう」では身の回りのものを表す単語を読み、イラストから当てはまる語を○で囲み、イラストにない単語に線を引く。(L, R, W)

表 11 OW の振り返り単元 Spring Board 内に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

OW の振り返り単元 Spring Board 内に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

① 「アルファベットの形を確かめよう」では、大文字・小文字をなぞって書く。次に文字の読み方

を聞いて発音する。(音声は名前読み)次に 12 カ所に大文字が書かれた絵を見て、大文字を探す。生徒は最低、3つは見つけて書き写す。1階建て・2階建て・地下1階建ての文字例の掲載を参考に、大文字と小文字の両方を用いて4字以上のメールアドレスを作って書く。友だちが考えたメールアドレスを聞いて書く。(L, W)

②「アルファベットに親しもう」では紙面上の大文字と小文字・絵を見て、E(名前読み) egg, eraser のような発音を聞き、絵を指さし、発音する。(L, R)

③「音と文字をつなげよう」では、4つのどちらの文字で始まる単語か、pizza と聞いて、下の b, p のどちらで始まるかを選ぶ。2 (4単語) egg と聞いて、下にある5文字から選び、e を選ぶ。3 音声を聞いて読まれた文字を聞いて 子音を選ぶ cup cap かを選ぶ。2枚のカードから1つのカードを選び、小文字で書かれた16個の単語から自分で単語を選んでおき bigo をする。(L, R, W)

表 11 の①から、絵の中の 12 箇所到大文字があっても、生徒は 3 カ所から大文字を見つければよいという平易な活動が設定されている。これも接続期に平易な活動を設定することで生徒の「読むこと」への負荷を減らそうとする支援であると考えられる。

表 12 SEの振り返り単元 Get Ready 内に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

SEの振り返り単元 Get Ready 内に設定されているアルファベット復習の概要と関連領域

①英語を聞いてアルファベットの名前読み、音読み、単語の発音を確認する。②英語を聞いて読まれたものを絵の中から探して指さす。③対話を聞いて、話している友達・ペット・好きな歌手の名前を4本線上に書く。④音声を聞いて、4線上の単語の最初の文字を書き、単語を完成させる。⑤ Challenge で文字を組み合わせて単語を作り、各文字に書かれたポイントを合計する。(L, R, W)

表 12 から、アルファベット復習から、文字を組み合わせて単語を作るゲームにつなげ、文字に慣れ親しみつつ楽しむことの意図があると考えられる。

表 13 に SE の振り返り単元にある語順に関わる活動の概要とその領域を示す。

表 13 SEの振り返り単元 Get Ready 内の語順に関わる活動概要と関連領域

SEの振り返り単元 Get Ready 内の語順に関わる活動概要と関連領域

①4枚の絵と各の下に絵を説明する日本語があり、絵の横に英文が2つあり、「片方は英語として正しくない英文だよ。」という記載がある。生徒は正しい語順で書かれている4文を選ぶ。(R)

②絵と絵の下の日本語を見て、「誰が」「～しました」「何を」と書かれた表の中に、例を参考に表の下にある語彙から適する語を選び、表に入れた英文を言う。(R, SP)

③like, want が含まれる例文を参考に、自分が好きなものやほしいものを書く。(R, W)

④単語の書き方(4線に適度な感覚で書く・人名や地名の最初は大文字)や文の書き方に関わる説明を読み理解する。(R, W)

表 13 から、SEには語順に関わる活動があり、他社にない特徴があることがわかる。生徒が中学校段階での語順の学びを徐々に進めていくことができるための支援であると考えられる。

6. 結論とまとめ

本研究では小中接続及び、生徒の4技能5領域の向上に向けて、6社教科書の振り返り単元において、小中接続に向けて、どのような特徴や工夫が凝らされているかについて調べ、考察を行った。5で述べたように、6社教科書内には豊富な小中接続への工夫が凝らされている。中学校英語科教師は用いる教科書内の特徴や工夫に気づき、それらを活かす指導を行う必要がある。生徒にとって中学校での接続期が易しい入り口となるように、教科書内に意図的に設定されている平易な活動を大切に、丁寧かつ楽しく開始し、生徒とともに楽しむことで、生徒が小学校の学びを思い出せるよう支援を行い、自信を持たせたい。振り返り単元には段階的に中学校での学びに慣れていくための支援の工夫がある。それらを活かすためには、目の前の生徒が、小学校での既習語彙表現をどの程度、身に付けているのかを十分に把握する必要がある。身に付けてきたことはどのような力であり、どのような点が定着には至っていないか、生徒は何に苦手意識を持っているのかを、生徒とのやり取りの中で見出し、可能な限り、少ない負荷の中で、生徒が中学校での学びに入っていけるよう支援を行いたい。本研究が生徒のための授業改善及び小中接続を考える一提案となれば幸いである。

参考文献

- 赤沢真世(2021)。「小学校外国語科教科書におけるパフォーマンス 課題の検討と求められる評価の工夫」『佛教大学教育学部学会紀要』 20, 11-26.
- 阿野幸一・アレン玉井光江他(2025). *NEW HORIZON English Course 1*. 東京書籍.
- 卯城祐司・大塚謙二・手島良・西垣知佳子他(2025). *Sunshine English Course 1*. 開隆堂.
- 太田洋・小泉仁他(2025). *Here We GO! ENGLISH COURSE 1*. 光村図書.
- 金谷憲他(2009).『教科書だけで大学入試は突破できる』大修館書店.
- 学研教育研究所(2024a)「小学生白書 Web 版中学生の日常生活・学習に関わる調査」
<https://www.gakken.jp/kyouikusouken/whitepaper/202411/chapter8/01.html>.
- 学研教育研究所(2024b)「中学生白書 Web 版中学生の日常生活・学習に関わる調査」
<https://www.gakken.jp/kyouikusouken/whitepaper/j202310/chapter8/01.html>.
- 工藤洋路・今井裕之・酒井英樹・津久井貴之・白倉美里他(2025). *NEW CROWN English Series 1*. 三省堂.
- 黒川愛子(2023)。「小中接続に向けての小中学校外国語科における指導の工夫—指導用デジタル教科書分析からの考察と提案—」『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル～教育のDXを志向した指導・学習・評価に向けて～2023年度～2026年度 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果中間報告書』 1, 112-121.
- 黒川愛子(2025)。「小中接続に向けての小中『外国語科』における学習者用・指導者用デジタル教科書の活用の工夫」『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル～学びを支援する単元をつなぐ Can-Do 評価試案～2022年度～2025年度 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果中間報告書』 3, 104-113.
- 黒川愛子・アレン玉井・加藤拓由・長沼君主・泉恵美子(2026)。「中学校英語検定教科書に見る小中接続」言語エキスポート発表資料.
- 渡慶次正則(2024)。「小学校と中学校の英語教育接続に関する実践的研究」ひつじ書房.
- 馬場哲生他(2025). *BLUE SKY English Course 1*. 新興出版啓林館.
- 本多敏幸・金森強・松本茂他(2025). *ONE WORLD English Course 1*. 教育出版.

- 文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』 文部科学省.
- 文部科学省 (2017b). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語活動・外国語編』 文部科学省.
- 文部科学省 (2017c). 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編』 文部科学省.
- 文部科学省 (2023). 「令和 4 年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点 (小学校外国語活動【質問調査】)」 https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_r04/pdf/4_13_r4bunseki_gaikokugokatsudou.pdf
- 文部科学省 (2024). 「令和 5 年度『英語教育実施状況調査』概要」 https://www.mext.go.jp/content/20240527-mxt_kyoiku01-000035833_1.pdf
- 文部科学省 (2025). 「令和 6 年度学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業成果報告書 (市町村教育委員会及び実証研究校における授業改善に関する調査研究)」 https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt_kyokasyo01-000041995_1.pdf
- 沢田早生・楠本正義・佐藤弘美・中山穂乃花・平山伸正・渡辺真衣他 (2025). 「小学校外国語教科書における活動種と言語活動のタスク性分析」『北海道英語教学会』 24,17-31.
- 鈴木寿一 (2024). 「本当に学習者のためになる英語教育を目指して」 英語授業研究会関西支部 2024 年度春季大会講演資料.
- 三河史絵 (2021). 「英語学習に対する情意面を高めるための動機づけ ストラテジーに着目した中学校英語科教育の実践 —小学校外国語での学びを生かして—」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』 12, 43-52.

研究プロジェクトメンバー

研究代表者: 泉 恵美子 (関西学院大学 教育学部)
研究分担者: アレン 玉井 光江 (青山学院大学 文学部)
大田 亜紀 (別府大学短期大学部)
加藤 拓由 (岐阜聖徳学園大学 教育学部)
倉田 伸 (長崎大学 教育学部)
黒川 愛子 (帝塚山大学 教育学部)
田縁 眞弓 (京都光華女子大学 こども教育学部)
長沼 君主 (青山学院大学 文学部)
森本 敦子 (立命館大学 産業社会学部)
海外共同研究者: バトラー 後藤 裕子 (ペンシルバニア大学 教育大学院)
研究協力者: 大江 太津志 (京都市立開晴小中学校)
奥平 明香 (沖縄県豊見城市立ゆたか小学校)
幡井 理恵 (昭和女子大学附属昭和小学校)
俣野 知里 (京都市立梅津小学校)
山川 拓 (京都市立吉祥院小学校)

* 研究分担者および研究協力者はあいうえお順とする

2025年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果最終報告書
(研究課題番号: 22H00684)

デジタル時代における児童の思考・判断・表現力と 自律的な態度を育む外国語科の評価

発行日 2026年3月30日
編集責任者 長沼君主
発行責任者 泉恵美子(代表者)
発行者 小学校英語評価研究会
印刷所 有限会社ノースアイランド
